

川崎市委託事業報告

小田急小田原線・多摩線の周辺における住居表示変更に伴う

町名と町の変化に関する調査研究

「川崎市北部 多摩区・麻生区の町名の移り変わり」



宿河原 八幡下塚樋

王禅寺・百合丘境 鍋ころがし

2018年3月31日

報告 日本地名研究所

主催 川崎市

●本事業の趣旨・目的

川崎市の文化は、多様な地形や歴史を背景に育まれており、川崎市文化芸術振興計画では、「地域資源を活用した特色ある文化芸術活動の推進」を施策の一つに掲げている。

地名は土地を識別するだけでなく、土地の由来やその地域に住んでいる人たちの関係や歴史を物語るものであり、生活や文化などについて伝えることができる貴重な文化財の一つと言える。

本事業は、市内の地名の由来を調査研究し後世に残していくとともに、研究成果を講座等の形で市民に還元することで、市民が地域への愛着と誇りを一層深めることを目的として実施するものである。

平成 29 年度は、「小田急小田原線・多摩線の周辺における住居表示変更に伴う町名と町の変化に関する調査研究事業」と題して麻生区・多摩区の町名と町の変化について調査研究を行うとともに、研究成果に関する講座及びまち歩きを開催した。

○調査研究内容

川崎市北部、特に麻生区・多摩区においては、小田急線に沿って町が大きく変化してきた。麻生区では昭和 49（1974）年に多摩線が開通して以降、新百合丘駅周辺を中心に大きく様変わりしてきた。また、多摩区においては、登戸地区の土地区画整理事業が進められるなど新しい町が編成されようとしている。

さらに小田急線については、多摩線では平成 12（2000）年に都心方面への直通運転が開始され、小田原線では今年度末に複々線化が完了するなど、通勤・通学利用者や観光客など人の動きも大きく変わりつつある。

こうした動向を踏まえ本事業では、小田急小田原線・多摩線の周辺の麻生区・多摩区の町名・町の変化について調査研究を行った。

○講座

調査研究成果に関する講座を以下のとおり開催した。

日 時：平成 30 年 1 月 27 日（土） 13 時半～16 時

参加人数：25 人

会 場：明治大学地域産学連携研究センター 多目的室

講 師：日本地名研究所 菊地恒雄

○まち歩き

調査研究精華に関するまち歩きを以下のとおり 2 回開催した。

日 時：第 1 回 平成 30 年 2 月 3 日（土）13 時半～16 時

第 2 回 平成 30 年 2 月 17 日（土）13 時半～16 時

参加人数：第 1 回 13 人

第 2 回 19 品

場 所：小田急線はるひ野駅集合～セレサモス麻生店解散

講 師：日本地名研究所 菊地恒雄

目次

本事業の趣旨・目的	・・・・・・・・	1
調査研究内容	・・・・・・・・	1
【麻生区】		
黒川地区	・・・・・・・・	3
栗木地区	・・・・・・・・	5
片平地区	・・・・・・・・	8
五力田地区	・・・・・・・・	10
古沢地区	・・・・・・・・	12
万福寺地区	・・・・・・・・	13
細山地区	・・・・・・・・	15
金程地区	・・・・・・・・	19
高石地区	・・・・・・・・	20
王禅寺地区	・・・・・・・・	23
早野地区	・・・・・・・・	26
上麻生地区	・・・・・・・・	28
下麻生地区	・・・・・・・・	30
岡上地区	・・・・・・・・	31
【多摩区】		
菅地区	・・・・・・・・	33
布田地区	・・・・・・・・	42
中野島地区	・・・・・・・・	44
和泉地区	・・・・・・・・	47
登戸地区	・・・・・・・・	48
宿河原地区	・・・・・・・・	51
堰地区	・・・・・・・・	55
長尾地区	・・・・・・・・	57
生田地区	・・・・・・・・	59
まとめ	・・・・・・・・	73
【付録】		
講座資料 パワーポイント		
まち歩き資料		

黒川(くろかわ)地区

黒川の名前は、この地域を流れる三沢川のことと思われる。市域境の多摩市・町田市の丘陵部を水源として、水田が奥深くまで耕作されている。もともとは深田で、水田には適さないところであった。昭和 53 年度から 57 年度にかけて土地基盤整備事業により、黒川上営農団地ができるが、そのとき、田の水抜きができるような圃場整備が行われた。

黒川地区を三沢川に沿って南北に鶴川街道が通っている。稲城市の矢野口から坂浜を抜けて黒川から町田市の鶴川へ通ずる道で、古くから物資輸送など重要な働きをした道である。

黒川地区は現在、黒川、南黒川、はるひ野 1～5 丁目からなっている。開発が最も遅く、そのため、川崎市域では数少ない、農業を主体として市街化調整区域に指定され、黒川上営農団地、黒川東(あずま)営農団地がある。

昭和 49 年 6 月に小田急多摩線が通り、黒川駅が開業した。同年 10 月に京王相模原線が通り、若葉台駅が開業した。昭和 54 年に、住居表示が実施され字**宮添**の一部が**南黒川**として生れた。黒川駅を挟んで町割りがなされ、主に北側にマイコンシティ南黒川地区として研究機関などが進出した。

平成 16 年に都市基盤整備公団(現 UR)が開発して、そこに小田急多摩線はるひ野駅ができ、平成 18 年には**はるひ野 1～5 丁目**が誕生した。町の名前は開発事業者が町のイメージを考え、春を連想する明るい町にと銘打って入居者を募集し、駅名ができ、町の名が追隨したことになる。はるひ野は**字谷ツ・柳之町**の全部と周辺の**宮添・海道**の一部からなっている。谷ツは小名の**牢場(ろうば)**で、通称地名として**ろう口**や**うまやの谷戸**とも呼ばれて、奥まった深い谷となっていた。その最も高い所を**横峯**と呼んでいた。**柳之町**は小名にも**柳ノ町**があり、**池谷戸**や**ぶちあい**などの地名がある。柳之町の意味は不明。

東は小名**新井**や字**台**付近をいう。稲城市坂浜・平尾に接し、三沢川の右岸高台に位置する。営農団地造成に際し、遺跡発掘調査が行われ先土器時代の石器や最古の縄文土器、馬蹄形集落形態の住居跡などが見つかかり、早くから開けたところと思われる。

現在の黒川地区の面積は、黒川 202ha、南黒川 8ha、はるひ野 1～5 丁目 81ha

黒川の**小名** 柳ノ町、ろうば、七ツ谷、すくも塚、堀切、新井、今僧坊、字台

黒川の**字** 宮添、東、谷ツ、柳之町、海道、西谷、広町、明坪

通称地名 ばば尾根、横峯、池谷戸、沢谷戸、石神谷戸、鷹ノ巣、腰巻、橋場、丸山、入り谷戸、伏越、日陰、寺谷など

特別緑地保全地区は西黒川(9.6ha)、黒川海道(8.6ha)など 17 箇所計 42.5ha

緑の保全地域は黒川青少年の森(1.2ha)など 5 箇所 4.8ha で、他に、黒川谷ツ公園(3.2ha)や黒川学舎緑地など緑地の占める割合は黒川全体の 16%以上になっているのも、この地域の特色である。緑地保全地区の名称に小字など旧地名を使用していることは、望ましいことと思っている。

【黒川】

黒川は区の西端にあり、北部から西部にかけては東京都稲城市と多摩市に、南部は町田市に接しています。

現在は黒川と南黒川を合わせた地域を古くは**黒川村**と呼んでいました。黒川村はその後、明治二十二年の市制・町村制施行で**柿生村**大字黒川となり、昭和十四年に川崎市へ編入されました。

黒川の地名が歴史上初めて見られるのは、今から六二〇年ほど前の南北朝時代のことです。小山田庄黒河郷と呼ばれ、お仁々局という女性が所有していましたが、貞治六年(1367)、お仁々局が黒河郷の半分を円覚寺の塔頭黄梅院に寄進したため、黄梅院の所領となりました。この間には、黒河郷の領有権をめぐる押領や訴訟事件があったことを黄梅院文書(『改訂新編相州古文書第三巻』)から知ることができます。

黒川は、昭和四十九年に京王相模原線と小田急多摩線が開通するまでは、川崎の秘境といわれるほどの人の行き来の少ない地域でした。東部の県道沿いと北部の駅周辺に民家や商店が見られますが、南部から西部にかけてはいくつもの谷が奥深く延びて起伏の多い地形をし、谷戸田や山林の間に果樹園や畑、野菜栽培の温室などが見られる田園風景が広がっています。山間からにじみ出る水が谷戸田を潤して三沢川の水源となり、多摩川へ入ります。「川の水が澄んで黒く見えるので黒川の地名がついたのかもしれない」と土地の古老が話してくれました。

黒川には**宮添、東、谷ツ、柳之町、海道、西谷、広町、明坪**、の八つの字があり、黒川内は上、中、下の三講中に分かれています。南部の上講中に人が住み始めたのは、広町の中でわき水のあった**サワ谷**のあたりと言われています。この一帯を**日陰**と呼び、落武者が身を隠すように住み着いたということです。町田市に通じるサワ谷の奥には、「アザシシバン小屋」という屋号の家があり、外部からの侵入者を見張っていたそうです。

広町と西谷の境は**ハシバ**で、昔は山間から流れ出る三沢川の支流がここで合流し、橋が架かっていたためについた地名です。道祖神があり、正月のセエノカミは現在もここで行われています。ハシバから北へ向う**寺谷**の奥には明治初めに廃寺となった金剛寺がありました。現在、毘沙門大堂のある近くです。

『風土記稿』に記載のある「**セツ谷**」は、明坪の中です。七つの小さな谷が入り組んでいるので**ナナヤト**と呼ばれています。

丸山は西谷にある標高一四九・五メートルの山で、市内で一番高い地点です。丸い形が名称の由来と言われますが、『風土記稿』には「**すくも塚**」と書かれています。丸山の南にあたる西谷から海道にかけるとは**鷹ノ巣**と呼ばれる山地で、ここにある屋号「鷹ノ巣」の家は、川崎で最後まで黒川炭を焼いていました。

宮添には鎮守汁守神社があります。正月に始まり、夏の疫病除けの天王まつり、二百十日の風祭り、そして収穫の秋祭と四季を通じて黒川の人達の心の拠り所となってきました。明治になって地番がつけられた時、ここに一番地が置かれたのもうなずけることです。

堀切は宮添の東南の**鶴川街道**沿いです。堀切の西にある農道沿いは**灯籠場**と呼ばれた所で、昔、明りをつけて道行く人の目印にしたと言われています。

腰巻は宮添と広町の南境にある山すその地名です。山の麓の斜面が円形に広がった地形に付けられた地名で、区内の古沢にもあります。

もと黒川分校があったあたりは**ババオネ**と呼ばれ、牛馬も通るのに骨が折れたと言われるほど険しい尾根道でした。県道上麻生連光寺線の開通で山は崩されて切り通しになりましたが、この尾根のあたりが多摩川水系と鶴見川水系の分水嶺になっています。

黒川に伝えられた江戸初期の獅子頭は、現在、民家園に保存されていますが、昭和三十八年、市の郷土資料に指定されました。

【南黒川】

小田急多摩線の黒川駅周辺が南黒川です。面積はわずか八ヘクタールの町で、民家もわずかしか見られません。黒川の**宮添**の一部が区画整理されてできた新しい町で、昭和五十四年に住居表示が実施されました。

駅の北側は、コンピューター関係の会社や研究所のビルが建ち並んでいます。黒川の山間を水源とする**三沢川**が町の北西境を北流しています。

栗木(くりぎ)地区

栗木は黒川境にあり片平川の水源に位置する。周囲は丘陵の尾根が連なり、東に開けている。このような地形から、傾斜地を意味する削るが栗の語源と考える。現在切通しとなっている上麻生連光寺線は、近年まで急坂で通行の障害となっていた。

昭和 49 年に小田急多摩線の開通と並行して宅地開発が行われ新しい町が誕生した。現在四つの町に分割されている。**栗木、栗木 1～3 丁目、栗木台 1～5 丁目、栗平 1～2 丁目**である。

栗木及び栗木 1～3 丁目は上麻生連光寺線の南側の地域で、片平に接する栗木は住居表示未実施地区で、町田市広袴に接する所に栗木山王山特別緑地保全地区(2ha)に指定している緑地がある。栗木 1～3 丁目は平成 11 年に住居表示が施行された。栗木 2 丁目はマイコンシティ栗木地区として造成されたが、進出企業が少なく指定変更など再整備されている地区である。栗木 1 丁目には鎮守御嶽神社が旧地より移転して鎮座している。栗木 3 丁目には桐光学園が昭和 53 年に開校し、現在は小学校から高等学校までがある。

栗木台 1～5 丁目は、昭和 57 年に住居表示が行われている。**とんび池**のあった周辺に栗木台小学校やとんびいけ公園があり、稲城市平尾と接し、急傾斜地を造成してできた町である。

栗平 1～2 丁目は、昭和 51 年に住居表示が行われている。栗木と片平の一部からなり、両方の地名の一字をとって栗平とした。これは、小田急多摩線の新駅名として採用され、後の町名となった。

現在の栗木地区の面積は、栗木 19ha、栗木 1～3 丁目 52ha、

栗木台 1～5 丁目 58ha、栗平 1～2 丁目 23ha

栗木の小名 亀井

栗木の字 一号、二号、三号、四号
通称地名 亀井、菅沢、広町、清水口、栃窪、賽の神戸、坊主あらく、焼畑、稗畑、宮田、深田、大芝原台、浅間谷戸、小坂谷戸、大森谷戸、京衛谷戸、鳶の谷戸、細谷戸、狸沢谷戸、中谷戸、松原谷戸、山野、天王山、山王山、鳶山、大六天山、数山、高山、タテ山、ばば尾根など

栗木の字は一号から四号とあり、日常にはほとんど使われることがなく、通称地名が村の生活の場で使われてきた。

栗木 1 丁目 字二号の北半分、字四号の東北、字一号の一部。中の谷戸
栗木 2 丁目 字四号の西、字三号の一部、黒川字宮添の一部。松原谷戸
黒木 3 丁目 字四号の東、字二号の南半分。栃窪
栗木 字二号の南東。京衛谷戸、金井原(片平境)
栗木台 1 丁目 字一号。菅沢
栗木台 2 丁目 字一号、三号。黒川字宮添。ばば尾根、鳶山、山野
栗木台 3 丁目 字三号。黒川字宮添。細谷戸、鳶の谷戸
栗木台 4 丁目 字一号、三号。狸沢谷戸
栗木台 5 丁目 字三号。狸沢谷戸
栗平 1 丁目 字一号、片平字吾妻。浅間谷戸、亀井
栗平 2 丁目 字一号、片平字吾妻。小坂谷戸

【栗木】

現在の栗木は、旧栗木の南半分にあたる**字二号と四号**の地域です。

昔は現在の栗木、栗木台一丁目～五丁目、栗平一・二丁目の一部を含めて**栗木村**と呼ばれました。栗木村はその後、明治二十二年の市制・町村制施行で**柿生村**大字栗木となり、昭和十四年に川崎市に編入されました。

栗木の名称は、古くから栗の木が多い土地なので村名につけられたと言われていますが、江戸時代の貞享、元禄期の文書に「栗喜」と書かれたものがあります。

民家は北部を通る県道上麻生連光寺線沿いと東部に集まり、北西部に延びる**中谷、大森谷、畑谷**には現在も水田や畑が見られ、田園風景が広がっています。山間部からにじみ出た水は谷戸田を潤して**清水戸**に集まり、**片平川**に流れ込んでいます。このあたり一帯は**亀井**と呼ばれた所で『風土記稿』にも記載がありますが、市道栗木線の開通によって周辺の地形が変り、現在は「亀井」という屋号に残っているだけです。

東南部から片平にかけての一角を**金井原**といい、南の町田市方面にかけては**金井原台**といいます。さらに南の町田市にも金井町があり、金井のつく地名が広範囲にあったことがわかります。「昔、金井の富豪が栗木の土豪の家に嫁いで来るとき通ったところにすべて金井の地名がついている」と話してくれた人がいました。

御嶽神社のある山は**天王山**と呼ばれていました。素戔鳴尊を祭る八雲神社があったからです。御嶽神社は旧栗木の**字三号**(現在の栗木台二丁目)にありましたが、大正九年に現在地に移され、八雲神社を合祀しました。

南の丘陵上にはこんもりとした**和合院塚**があります。修験者を葬った塚で、以前は七基ありました。修験者は夫婦別々ぶ葬るのが習わしで、ここは修験者代々の墓地となっていました。『風土記稿』に記載のある「和合院」は、昔、修験をつとめていた「法印」という、屋号の家に居た修験者の名前でもありますが、この家の近くにあったと伝えられるお堂のことかもしれません。

桐光学園のあるあたりは**トチクボ**と呼ばれた窪地でした。**大森谷**から**畑谷**が分かれる所に**観音寺**と呼ばれる畑がありますが、由来については不明です。字**四号**はマイコンシティ建設地で、現在、開発が進められて変貌しつつあります。

【栗木台一丁目～五丁目】

小田急多摩線の栗平駅と黒川駅の中間にあり、旧栗木の北部台地にあたる字**一号**と**三号**の地域です。区画整理による住宅造成によってできた新しい町で、昭和五十七年に住居表示が実施されました。

農業が営まれていた頃は水の便が悪く、「水田は十年のうち六年が不作」といわれてきました。**鳶谷池**や**狸沢池**は天水をためた灌漑貯水池で、水不足の時は村の責任者が栓を開けて水を田へ送りました。現在はどちらも公園名になり住宅地の中に残されています。

四丁目の南部は**広町**と呼ばれ、かつては良い耕地が広がり、栗木の穀倉地帯といわれたところでした。

「アラク」は原野を開墾して耕地にしたところをいいます。五〇センチ四方の土を掘り返し、根をしばらく置き、枯れたところをマンノウ鋤でたたいて土を落とし、焼くのがこのあたりの開墾のやり方でしたが、大変骨の折れる作業でした。坊主顔のような丸ミ山を開墾した**ポーズアラク**は五丁目の北の方にありました。

一丁目の線路沿いにあるすげ沢公園は、以前は菅の生い茂った**菅沢**と呼ばれたところです。御嶽神社がもとあった一、二丁目の北部境には**御嶽さまの谷**があり、近くに**宮田**、**宮前**という田がありました。神社は八雲神社と合祀して現在地に祭られましたが、この山も開発のため崩され、造成工事完了後に再びもとの所に戻されることになっています。林清寺の裏山には昭和四十一年に完成した公園墓地柿生霊園があります。

【栗平一・二丁目】

この地は、区画整理による宅地造成によってできた新しい町で、西半分は旧栗木、東半分は旧片平の地域だったため、一字ずつ取って栗平と名づけられ、昭和五十一年に住居表示が実施されました。栗平駅周辺には商店もみられますが、北部には住宅があまりみられません。

町の西境には市道栗木線が通っています。開発以前には、少し東寄りに平尾へ通じる**平尾道**があり、その近くには**センゲン谷**、**コザカノ谷**、**タヌキ谷**など小さな谷がありました。一丁目北西部のあたりにあった**ヘーバタケ**は稗畑のことで、宝暦八年(一七五八)の「栗木村山畝歩並田畑見取場改帳」(栗木公民館蔵)の中にも「ひえ畑入」などの地名がみられません。

片平(かたひら)地区

片平は、麻生川の右岸に位置し、片平川が栗木から流れ麻生川に合流する。片平の地名は、片平川を挟んで左岸の北側が比較的、土地が高く崖を形成している。それに対して右岸は緩い傾斜で耕地が開けている。このような一方が開けた土地をカタヒラ、カタビラ、カタマチなどと呼ぶ。

片平は区画整理が終了し、昭和 57 年に住居表示が行われ、1 丁目から 5 丁目までは完了した。その後、平成 8 年に麻生川に残る地域も麻生川を境に地番変更を行い、境界を決定した。6 丁目から 8 丁目は平成 18 年に片平川と上麻生連光寺線の間、の地区の住居表示を行った。片平川の右岸から南側は、市街化調整区域のため片平地番のまま存在する。

片平 2 丁目で世田谷町田線と尻手黒川道路が交わり、今後は片平 2 丁目の地内を新道が貫通して、上麻生連光寺線に繋げる計画である。

白鳥 1 丁目～4 丁目は、片平の字**吾妻(あずま)**と五力田の字**小台**の地域を区画整理してできた町で、先行して昭和 51 年に白鳥 1 丁目から 3 丁目が成立し、平成 14 年に五力田の一部(字小台)を編入して白鳥 4 丁目ができた。(五力田に記載)

現在の片平地区の面積は、片平 64ha、片平 1～8 丁目 116ha、白鳥 1～3 丁目 37ha、

片平の小名 寺台、赤せき、はつみ、天神かいと、かない原、せき谷、京法台、夏刈屋

片平の字 葉積、日向、中村通り、吾妻、金井原、富士塚、仲町

通称地名 修広寺谷戸、五反田谷戸、大六天谷戸、金井原谷戸、セキ谷戸、池田谷戸、治兵衛谷戸、猿田谷戸、柿の木谷戸、寺台、享保台、原台、全明寺台、亀井、熊ノ下

片平 1 丁目 字葉積と五力田の一部

片平 2 丁目 字日向

片平 3 丁目 字日向、仲町

片平 4 丁目 字仲町、富士塚

片平 5 丁目 字中村通

片平 6 丁目 字中村通

片平 7 丁目 字吾妻、富士塚

片平 8 丁目 字吾妻、金井原

片平 字富士塚、金井原。市街化調整区域

白鳥 1 丁目 字吾妻、片平字中村通、五力田字小台

白鳥 2 丁目 字吾妻

白鳥 3 丁目 字吾妻、五力田字小台

白鳥 4 丁目 五力田字小台

【片平】

この地域は、片平一丁目～五丁目、白鳥一丁目～三丁目、栗平一・二丁目と五力田一丁目の一部を合わせて、かつて**片平村**と呼ばれたところです。

天保七年(一八三六)の片平村絵図(安藤家文書)を見ますと、現在の県道上麻生連光寺線にあたる往来道が村の中央を横断し、北側は山が迫り急傾斜なのに対し、南側は田畑が広がっています。このような地形を「片平」と呼ぶ例は全国にもたくさんあります。

片平村は古くは片平郷と呼ばれ、『小田原衆所領役帳』に記載のある片平郷は隣接する五力田や古沢も含まれていたと思われます。古沢は早く分村しましたが、文禄三年(一五九四)の「武州都筑郡片平郷御縄打水帳」(安藤家文書)には五反田の田畑がたくさん記載されています。それから五年後の慶長四年(一五九九)の水帳には「片平村御縄打水帳」とあるように片平郷から片平村に記載が変わり、五力田の田畑は書かれていません。恐らくこの時、五力田も片平郷から分村して五力田村になったものと思われます。

片平村は元和年間(一六一五～二四)には旗本前場氏の知行地と幕府直轄の二給地でしたが享保元年(一七一六)以後は幕府直轄領となりました。

片平村はその後、明治二十二年の市制・町村制施行で**柿生村**大字片平となり、昭和十四年に川崎市へ編入されました。

現在、片平と呼ばれる地域は、旧片平の字**金井原**と**富士塚**で、全域が市街化調整区域です。北東境に県道上麻生連光寺線と**片平川**がほぼ平行して走っています。

富士塚は、かつては富士山が眺められた台地の上に築かれた古墳で、現在は日本輸出入銀行グラウンドの一角に入ってしまったが、『風土記稿』にも記載されています。富士塚の地名は、この塚の名称に由来しています。富士塚から片平川まで下って来たところに**富士見橋**があります。

西部の栗木に接する地域は金井原で、栗木では金井原に続く地域を**金井原台**と呼んでいます。片平川沿いには田畑も見られ、丘陵斜面には雑木林や竹林が残っています。

片平一～三丁目の東境と上麻生の西境の間に、麻生川に沿って片平の細長い飛地があります。住居表示でとり残された地域です。

【片平一丁目～五丁目】

旧片平の字**葉積**、**日向**、**中村通**、**仲町**にあたる地域で、昭和五十七年に区画整理がほぼ終り、住居表示が実施されました。

葉積は、一丁目の地域にあたります。文禄三年(一五九四)の水帳や『風土記稿』には「はつみ」と書かれています。「端詰」を意味する地名とも考えられます。天保七年(一八三六)の村絵図には、**麻生川**が片平村に入る所に「ハツミ堰」があります。堰の付近一帯は「**赤せき**」とも呼ばれていました。現在、区画整理された住宅の一角に造られている葉積緑地に葉積の名称が残っています。

二丁目の山間に**夏菟山修広寺**があります。『風土記稿』に「昔は村内字寺台にあり」と書かれ、字**寺台**については「此あたりを大光寺前ともいへり」とあります。また『皇国地誌』には、寺は**夏菟岡**に建立されて台光寺と称したのを、永正十七年(一五二〇)、現在地に移し

て今の寺号に改めた、とあります。寺台は、三丁目のライオンズマンションのある高台のあたりをいいます。寺台も**大光寺前**も水帳に記載のある地名です。

夏菟山の「菟」は「狩」を表わし、寺伝では源頼朝がこの地で夏狩をした古事にちなむ山号だと伝えられています。寺の周辺には**夏刈屋**、**夏刈川**の地名があり、麻生川を挟んで王禅寺にも**夏刈谷**があります。夏刈は、夏草や葦を夏に刈り取った谷や川辺に付けられた地名と思われます。ここでは、「なつかり」の地名が、夏草を刈る「夏刈」と、頼朝の狩猟を伝える「夏狩」の両方にかけてられています。

善正寺や片平小学校のある五丁目は、中村通で、旧片平の中央部にあたるところでした。後北条氏に仕え、片平郷を領していた大熊修理亮の屋敷は、善正寺の寺地にあったと伝えられています。

寺台の西南の**かきの木畑**は現在でも柿の木が多いところで、水帳にも記載があります。

三、四丁目境の片平仲町遺跡公園は、石段を上った見晴らしの良いところにあり、縄文中期から末期の敷石住居が発掘されたところです。

【白鳥一丁目～三丁目】

旧片平の字**吾妻**と、北部の五力田の入りくんだ地域が区画整理されてできた町で、昭和五十一年に住居表示が実施されました。小田急多摩線の南北にまたがる丘陵斜面にあり、三丁目の南西端に栗平駅があります。町名は鎮守白鳥神社の名をとってつけられました。

白鳥神社は白鳥、片平、五力田、栗平地区の鎮守です。日本武尊が亡くなった時、白鳥になって墓から飛び立ったという伝説に由来する社名で、祭神は日本武尊です。明治の初め、この地に「吾妻」という字名がつけられたのも、日本武尊の伝説にちなむものです。日本武尊が東征に向う途中、海が荒れたために、妻の弟橘媛が海に身を投じて静めました。日本武尊は妻の死を悲しみ「あずまはや」と嘆いたという、あの伝説の吾妻です。

三丁目に建っている栗平タウンハウスのあたりは、もと**六所谷**と呼ばれたところで、谷には六所社がありました。

五力田(ごりきだ)地区

五力田は古沢と共に昔は、片平郷(村)の内であったが、一村として独立した村である。五力田の地名は、五反田と同じように、五人の力で耕地が耕せるほど狭い土地であったことに由来する。地元では近江から五人力の男が水田を開いたという伝承があるという。

五力田の東半分が字**大台**といい、西半分が字**小台**という。大台は小田急多摩線開通に伴う区画整理が行われ、昭和 57 年に住居表示が実施されて、**五力田 1～3 丁目**が誕生した。五力田 1 丁目は大部分が片平地番の地域からなっている。2 丁目にある小田急多摩線五月台駅の駅名は、五力田の「五」と大台の「台」を取り、五月の「さつき」をイメージして五月台としたという。

小台は、小田急多摩線に近い地域が、平成 14 年に住居表示を実施して白鳥 4 丁目となった。残りの平地を有する古くから集落のあったところは、五力田地番として残っている。

現在の五力田地区の面積は、五力田 15ha、五力田 1～3 丁目 30ha、白鳥 4 丁目 18ha

五力田の小名 赤せき、六所谷、諏訪谷

五力田の字 大台、小台

通称地名 川森谷戸、池ノ谷戸、寺谷戸、五力田谷戸、修広寺谷戸、高尾根、向原、
台田、相ノ坂、大畑、日向畑、又口

【五力田】

現在、五力田と呼ばれているところは、旧五力田の西半分の字**小台**にあたる地域で、北部は稲城市平尾に接しています。市街化調整区域のため、丘陵地帯には雑木林や田畑が昔の景観をそのまま残しています。

現在の五力田と五力田一丁目～三丁目をあわせて、昔は**五力田村**といました。五力田村はその後、明治二十二年の市制・町村制施行で**柿生村**大字五力田となり、昭和十四年、川市に編入されました。

五力田の名称は、近江から来た五人力の男が水田を開いたことに由来するなどといわれています。古くは「伍力田」とも書かれました。

文禄三年(一五九四)の片平郷の水帳には、五力田の地名と田畑がたくさん記載されています。この頃は片平郷の中に含まれていました。五年後の慶長四年(一五九九)に再び検地が行われた頃、片平郷は片平村となり、水帳からは五力田の田畑や地名が消えました。これは、江戸時代初期、村切りによって村境が定められ、行政単位の村が成立していく様子を表わしています。五力田村もこの時にできたものと思われれます。元禄期まで石高は三九石八斗六升五合で、川崎市域でもっとも石高の低い村でした。明暦の頃(一六五五～五八)も片平村と入会にしている田畑があり、片平村との関係は深かったようです。

『風土記稿』に記載のある**入定塚**は平尾との境にありました。平尾では、鎌倉幕府滅亡の頃、鎌倉の僧が平尾に潜伏し、この地で入定したと伝えられています。現在は整地されて平尾の入定塚公園にその名を残しています。

入定塚の向い側には、入定僧を供養したと思われる供養塚が一行に並んでいました。この付近は、貞享三年(一六八六)に古沢村と片平村が平尾村を相手に境界争いをしたところで、幕府から下りた裁許絵図を見ますと、入定塚から供養塚の上を通る線が引かれていて、このとき五力田村と平尾村の境界線が定められたことがわかります。平尾側ではその後、供養塚のあたりを**十三本塚**と呼んでいますが、川崎側では**ニジュウツカ**と呼んでいます。入定塚が転訛した呼称なのか、二十基近くあった供養塚の名称なのかははっきりしません。平尾団地の建設工事で塚は崩され、当時の様子を知ることはできませんが、以前はこのあたりは木が鬱蒼と茂って薄暗く、大人でも気味が悪くて遠回りをしたそうです。

諏訪谷と**六所谷**は**又口**から分かれてそれぞれ西の方へ延びています。諏訪谷の先には日当りの良い**日向畑**があります。谷の名称となった諏訪社と六所社は、明治四十五年、鎮守白鳥神社に合祀されました。

五力田二丁目と白鳥一丁目の境は**相ノ坂**で、かつては五力田村と片平村二村の境だったところでした。

【五力田一丁目～三丁目】

旧五力田の字**大台**にあたる地域で、二丁目に小田急多摩線の五月台駅があります。東部の片平とともに区画整理が行われ、入り組んだ境界線を改めて、昭和五十七年に住居表示が実施されました。このため一丁目の大部分はもと片平だったところです。

五月台の駅名は、五力田の「五」と大台の「台」を合わせ、明るい五月のイメージにふさわしい街づくりを願ってつけられた駅名です。駅周辺は、かつて池ノ谷と呼ばれた水田地帯でした。昭和五十二年から宅地造成工事が行われ、現在では一面が住宅地となりました。大台の一番高いところが**高尾根**で、戦時中、監視塔がありました。小田急線に架かる高尾根橋や、三丁目の五力田高尾根公園にその名が残されています。

二丁目の五力田仲村通公園は、かつてここが片平の字**中村通**だったことから付けられた名前です。

柿生学園はもと片平の全明寺があったところです。全明寺は修広寺三世の貴山玄頓和尚が開山と伝えられていましたが、文化年間より無住となり、明治五年に廃寺となりました。本尊薬師如来は寅薬師と呼ばれ修広寺に安置されています。

三丁目の東の方は、五力田や片平で「**赤せき**」と呼ばれていたところです。**葉積川**に作られた堰の周辺の崖が崩れて赤土が見えていたのでついた地名といわれています。

古沢(ふるさわ)地区

古沢村は五力田村と共に**片平郷**に属していた。戦国時代末期に五力田村より早く、独立したようである。万福寺村境から古沢村を経て五力田村から片平村に抜ける道があり、昔はそれなりの交通量があったと思われる。その道に沿って五力田方面から川が流れ麻生川に合流している。古沢の地名についてのいわれはわからないが、この流れの沢が地名に通ずると思われる。

明治時代になって地租改正に伴う字の設置に対して、一村一字という単位であったところからも、小さな村であったことがうかがわれる。字名は「**都古**」で、**都筑郡古沢**の行政地名の各一字をとったとされている。

新百合丘駅周辺の区画整理に伴い、古沢の北東部、万福寺平尾道路の北側が万福寺5丁目に編入された。

現在の古沢地区の面積は、古沢 38ha

古沢の小名 神川、大久保

古沢の字 都古

通称地名 花ノ木、すりこばち、谷、大川、堤下、陣川耕地、後田、滝ノ沢、大久保、上畑、二十塚、谷山、押込、塚戸、腰巻、弁天前、天神前、四ツ田、間ヶ戸、寄せ場、熊沢

【古沢】

区のほぼ中央にあり、北は東京都稲城市に接しています。字は都筑郡の「都」と古沢の「古」をとってつけられた**都古**が一つだけです。

『風土記稿』に「片平郷に属す、民家わづかに十五軒」とあり、古くは片平郷に含まれていたようですが、天正十八年(一五九〇)に豊臣秀吉が麻生郷に出した禁制には、片平郷と古沢村両方の名が見られることから、この頃には片平郷から分村していたと思われます。古沢は、その名にふさわしく水に恵まれた土地で、早くから水田が開け、小村ながら集落のまとまりを見せていたようです。

貞享三年(一六八六)五月、稲城市側の平尾村が入会地に境界を立てて、古沢村の使用を禁じたとして、片平村と共に平尾村を訴え、境界論争が起きました。六か月後に幕府の裁許が下り、現在の稲城市と、川崎市五力田と古沢北部の境界線がはっきり定められました。この時、五力田村と平尾村の境にあった**入定塚**や**供養塚**が線引きに利用されました(稲城市、馬場保雄家文書)。

県道世田谷町田線から古沢の信号を西へ入ると、左側は**四ツ田**、**前田**、**向田**などと呼ばれる田畑が続く、山側には民家が点々と並ぶ田園風景が見られます。四ツ田は四枚で一反分の田をいいます。全域が市街化調整区域のため、北部の雑木林や竹林は昔ながらの景観を残しています。

小沢原合戦の陣地だったと伝えられる**陣川**は、万福寺にかける東の方一帯です。陣川の名前は、ここを流れる麻生川の別名とも考えられますが、土地では川の名をそのようには呼んでいないようです。川周辺に広がる耕地は**陣川耕地**と呼ばれ、近くに「陣川」という屋号の家や**陣川谷**があります。陣川谷の奥は土地が大きく窪んだ**押込**です。

麻生警察署の前から北の金程の方向に見える山を**花ノ木**といいます。山に木蓮の林があるからともいわれますが、「ハナ」とは山が差し出た所をいい、村の端(鼻)にも通じる地名です。ここは昔の都筑郡と橋樹郡の境にあたります。

古沢に古くから住んでおられる古沢(こざわ)さんという家があります。また明治五年に廃寺になった福正寺は山号を古沢山(こたくさん)といいました。古沢の字を三通りに読み分けて使っていたのも面白いことです。

万福寺(まんぷくじ)地区

新百合ヶ丘という地名はない。**万福寺**という寺もない。新百合ヶ丘駅は小田急線の全ての電車が停車する駅で、麻生区の中核の町である。小田急多摩線が敷設されるに伴い、分岐点に新駅が開設されることになった。万福寺を中心に、周辺の地域が区画整理され、昭和59年に一部が住居表示され、**万福寺1・2丁目**が誕生した。その後隣接する王禅寺・上麻生・古沢などと境界変更を行って、平成19年に万福寺1～6丁目が成立した。

万福寺の地名はかつてこの地に存在したであろう寺の名が地名になったと考えられている。村の中央を津久井道(県道世田谷町田線)が通り、相模北部の物資がこの道を通って、江戸へ運ばれた。高石(現百合丘)境が分水嶺で、万福寺側は鶴見川水系となる。

近年までは純農村地帯であったが、小田急新線の分岐点に新百合ヶ丘駅ができ、また多摩区から麻生区が分区するに至って、万福寺一帯が大きく変化した。駅にはバスターミナルが完成し、周辺住民の交通の便は一段と進歩した。駅周辺は商業・文化施設が充実し、周辺から新百合ヶ丘に人々が集まっている。麻生区役所や図書館・市民館があり行政の中心でもある。こうした中で、新しい地番での住宅造成が進み、現在に至っている。

現在の万福寺地区の面積は、万福寺1～6丁目 65ha

万福寺の小名 長坂、神川、池尻、笹合

万福寺の字 第一号

通称地名 矢崎、堂ノ前、堂ノ入、志万崎、柳田、十字ヶ谷、稗田谷、背戸の谷、谷、後谷、四十八枚田、コーズ山、角山、追分、弁天前、天台、花の木、すりこばち、あらく、屋敷内、小沢原

万福寺1丁目 万福寺、上麻生字山口

万福寺2丁目 万福寺、上麻生字山口

万福寺3丁目 万福寺

万福寺4丁目 万福寺、千代ヶ丘の一部

万福寺5丁目 万福寺、古沢の一部、金程の一部

万福寺6丁目 万福寺、古沢の一部

【万福寺】

現在の万福寺は、万福寺一・二丁目とともに、以前は**万福寺村**と呼ばれていました。万福寺村は、明治二十二年の市制・町村制施行で**柿生村**大字万福寺となり、昭和十四年、川崎市に編入されました。字は全域で字**一号**が一つだけです。

万福寺の名称について、『風土記稿』には「古、万福寺と云寺院のありしゆへかゝる名もあるにや、今は土地にも其伝へなし、またまさしく寺跡と覚ゆる地も見えず」と記され、村名の由来は不明ですが、『小田原衆所領役帳』に既に「万福寺」の村名が見られます。江戸時代の寛永十年(一六三三)以後は旗本の天野、椿井両氏の二給地となりました。

現在の万福寺の南境を県道世田谷町田線が通っています。追分はこの道路から上がった旧**津久井道**沿いで、高石との境をいいます。どちらから来ても登り坂で、昔この道を往来する人々は追分の茶店でひと休みをしていきました。現在も「追分」という屋号の家があり、前庭は旧道の茶店の面影を残しています。ここは、橘樹郡と都筑郡の郡境でもありました。千代ヶ丘に抜ける麻生郵便局前のバス通りは、かつて**笹合谷**と呼ばれ、細長い水田が続いていました。谷に沿って**笹合農道**の名称は、交通量の増えた現在でも残っています。農道が県道世田谷町田線と交差するあたりは、昔は腰まで入ってしまうほどのどぶ田でした。足を取られて体の自由がきかず、ゆらゆらと揺れたので、**柳田**と呼ばれたということです。西の方、古沢と接する一帯を**陣川**といいます。陣川の地名は寛文九年(一六六九)の検地帳にも記載されていたようですが、『風土記稿』には、「神川」と書かれています。陣川は、古沢の**陣川**の続きで、古沢と同じように小沢原の合戦の陣地に由来する地名と伝えられています。この地の東にある**矢崎**は、合戦の時、矢が飛んで来てさきった所といわれ、「矢

先」とも書きます。また、すぐ北にあるスリコバチは、戦いのとき急な崖道を滑り下りた場所といわれ、古沢にも伝えのある地名です。

万福寺会館はもとの**医王寺跡**で、**堂の前**、**堂の入**などの地名が近くにあります。会館には室町から江戸期にかけの仏像五体が安置されていますが、この数から推して、あるいは記録には残っていない万福寺という寺院の仏像が含まれているのではないかと言う人がいます。

第二次世界大戦後、地元の篤農家の努力で生まれた万福寺人参は、全国農産物品評会で五年連続優等賞の栄に輝きました。全国的にもその名を知られ、とくに松本方面に大量に出荷されていましたが、昭和三十年頃から始まった宅地造成で、弘法の松周辺の好適な栽培地を失い、短期間で姿を消してしまいました。

【万福寺一・二丁目】

旧万福寺の南部にあたる地域です。昭和五十二年頃から町の区画整理が進められ、五十九年に住居表示が実施されました。

一丁目には小田急線の新百合ヶ丘駅があり、さらにここから区の北西部へ向かう小田急多摩線の起点駅にもなっています。駅周辺には区の総合庁舎や文化センターのほか、企業のビルも建ち、麻生区の中心的な区域となりました。

線路を挟んで東部にあたる二丁目はほとんど全部が新興の住宅地で、人口は一丁目の三倍以上もあります。南のはずれには、雑木林や松が生い茂る自然公園の万福寺檜山公園があります。この山続きには、かつて檜を植えた美しい山があり、開発で消えてしまったこの檜山を惜しんでつけられた公園名です。

細山(ほそやま)地区

細山は、県道世田谷町田線から一步奥にあり、**高石**の**二枚橋**付近から稲城市に抜ける道があり、その道の右側が**多摩美 1～2 丁目**、その道を挟んで**細山 1～8 丁目**がある。左側の奥には、未指定の**細山**、**千代ヶ丘 1～9 丁目**、**向原 1～3 丁目**と続く広い地域である。

明治 22 年には、**生田村**大字細山となった。細山の地名は、東西に長く続く地形から付いたものと思われる。

昭和 40 年代に宅地造成が盛んに行われ、細山でも大規模な造成と新しい町が次々と誕生した。昭和 46 年に千代ヶ丘 1～7 丁目が、昭和 53 年に多摩美 1～2 丁目、細山 1～7 丁目ができる。さらに、昭和 56 年に細山 8 丁目と千代ヶ丘 8～9 丁目ができ、二つの町が拡大した。昭和 62 年に字**向原**に向原 1～3 丁目ができほぼ完了した。未指定の細山は、市街化調整区域に指定されており、よみうりゴルフクラブや授産学園福祉の杜緑の保全地域などがある。

大規模開発で町が様変わりする中、地元有志によって細山郷土資料館が開設され、郷土資料の保存と地域のコミュニケーションの場として、地道な活動を続けてきたが、近年閉館してしまったことは残念である。

現在の細山地区の面積は、細山 23ha、細山 1～8 丁目 80ha、多摩美 1～2 丁目 24ha、
千代ヶ丘 1～9 丁目 90ha、向原 1～3 丁目 36ha

- 細山の小名 向原、小町久保、辻の宮、馬場、経塚、本村、本屋敷、板東、二重経塚、
別圃、桑原、石名坂、大久保、池田、的場、向坂
- 細山の字 内野、大久保、金井久保、七代、中嶋、南田、板東、山田、北谷、中ノ間、
西久保、原尾、向原
- 通称地名 亀久保、表板東、裏板東、元屋敷、細久保、将切、競馬場、七国峠、おおづ
る道、四辻、暗闇坂、太夫坂、勝坂、長坂、猪の爪洗い井戸、丸山、代官山、
新地山、さがまち、はす田、神明田、水車の町
- 細山 1 丁目 字内野、大久保
- 細山 2 丁目 字大久保、七代、高石字稲荷森
- 細山 3 丁目 字北谷、中島、七代、南田
- 細山 4 丁目 字中島、北谷、大久保
- 細山 5 丁目 字大久保、中島
- 細山 6 丁目 字大久保、金井久保、菅字小谷
- 細山 7 丁目 字大久保、金井久保
- 細山 8 丁目 字北谷
- 細山 字原尾
- 多摩美 1～2 丁目 字内野
- 千代ヶ丘 1 丁目 字坂東、山田
- 千代ヶ丘 2 丁目 字坂東、七代
- 千代ヶ丘 3 丁目 字坂東
- 千代ヶ丘 4 丁目 字山田
- 千代ヶ丘 5 丁目 字坂東、山田
- 千代ヶ丘 6 丁目 字坂東、南田
- 千代ヶ丘 7 丁目 字坂東、西久保
- 千代ヶ丘 8 丁目 字中ノ間、西久保
- 千代ヶ丘 9 丁目 字中ノ間
- 向原 1～3 丁目 字向原

【細山】

現在の細山は、旧細山の字**原尾**の地域です。細山のほかに細山一丁目～八丁目、千代ヶ丘一丁目～九丁目、向原一丁目～三丁目、多摩美一・二丁目を含む地域を、昔は**細山村**と呼んでいました。文禄三年(一五九四)び水帳には「武州都筑郡小机の内細山郷」とあり、当時は都筑郡に属していたようです。その後、橘樹郡に編入され、同郡の西端に位置する村となり、正保二年(一六四五)以後は椿井氏の知行地となりました。明治二十二年の市制・町村制施行で**生田村**大字細山となり、昭和十三年、川崎市に編入されました。

旧細山は、昭和三十年代から宅地造成による宅地化がすすみ、その後、昭和五十三年からの住居表示実施により、現在はこの地域だけが旧地番のままで残っています。

北の丘陵部は東京都稲城市から続く東京よみうりゴルフ場です。**向原の石名坂**から東の**金井久保**方面へ行く市境の道と稲城市の方へ行く道が交差する所を**四辻**といい、「寄辻」とも書きました。以前はここで正月のセエノカミが行われたり、庚申塔を祀ったりしましたが、ゴルフ場建設の時になくなりました。

市境の道をさらに東へ行くと**おおづる道**がありました。峠の上に立つと東西が低く、ちょうど弓の弦を張ったような形に見えたのでつけられた地名です。かつては村の主要な道でしたが、今ではゴルフ場の中に入ってしまった。

町の南には昭和五十六年に開設した身障者の福祉施設授産学園があります。

【細山一丁目～八丁目】

区の北部にあり、旧細山の字**大久保、七代、南田、中嶋、中ノ間、北谷、金井久保**を含む地域です。一丁目から七丁目は昭和五十三年に、八丁目は五十六年に住居表示が実施されました。

『風土記稿』に記載のある字**本村**は四丁目の細山公民館のあたりで、江戸時代はここに高札場や郷蔵があり、村内の道もここを通り、村のほぼ中心地だったようです。

大久保は周囲が高く中央が窪んだ地形に付けられた地名で、矢野口へ通じる県道稲城読売ランド前停車場線が通っています。昔は谷に沿った細い道で、北部のよみうりランド入口近くは木が生い茂って薄暗く、クラヤミ坂とよばれていました。

マンション・シャンポール裏の箕輪正治さんの庭には「猪の水浴場」と呼ばれる湧水池があります。このあたり一帯はもと山林で、開発以前は猪、狐、貉など色々な動物が住みついていました。山間の湧水池は動物達の唯一の水飲場となり、いつの頃からか「猪の水浴場」とよばれるようになりました。

逆大門で知られる鎮守**細山神明社**は二丁目にあります。古くから細山の中を谷ごとに**北谷、板東表、板東裏、大久保、向原**の五つの区域に分け、これに**金程**を加えた**六谷**の氏子によってまつられてきました。神明社の西側には**神明田**があり、近くの湧き水は眼病や腫れ物に効き目があると言われていました。神明社周辺には蓮田が多かったので、**はず田跡**という地名が残っています。

昔、代官の所有地だったと伝えられる**代官山**は八丁目の北部で原尾の境です。昭和五十九年の発掘で平安時代の火葬墓二基が検出され注目されました。

香林寺の境内には区内最古の延宝三年(一六七五)銘の庚申塔や、昭和六十二年に完成した五重塔があります。山門脇の細山郷土資料館は、地元の人達によって建てられ、農具や民具など細山の歴史を伝える資料が収集展示されています。

【多摩美一・二丁目】

旧細山の字**内野**の地域で、区の北東部の台地上にあり、北部には多摩区菅仙谷のよみうりランドがあります。

昭和三十年代から住宅開発が行われ、全域が住宅地となり、昭和五十三年に住居表示が実施されました。美しい多摩丘陵にちなんで、多摩美と命名されました。開発以前はほとんど全域が山林と畑で、谷から流れ出る水を集めた谷川が**五反田川**に注いでいました。二丁目北西部には、よみうりランドの方へ行く日当りの良い**ヒナタ坂**がありました。また一丁目西の方には、かつて軍馬を育成した馬場があり、草競馬が行われたこともありましたが、今は宅地となり、その一帯を**競馬場跡**と呼ぶだけになりました。昭和四十一年、住宅の増加に伴って東京の築地から浄土真宗妙延寺が一丁目に移転してきました。

【千代ヶ丘一丁目～九丁目】

区の北部にあり、旧細山の字**山田、板東、西久保、中ノ間、七代**を含む地域です。昭和三十八年から宅地開発が行われ、昭和四十六年に区画整理によって一丁目～七丁目の新町名が誕生し、八、九丁目は五十六年に住居表示が実施され、現在の町名となりました。板東は町の中央部で、南部を**表板東**、北部を**裏板東**と土地の人達が古くから呼び分けてきた名称は、現在でも使われています。板東の由来について『風土記稿』には「この所に香林寺の観音ある故、札所の心にてかく唱ふるなるべし」と書かれています。地元では小沢原の合戦で勝利を収めた北条勢が登ってきた**勝坂**の東に当たるので板東という、とも伝えられています。勝坂は、五丁目の天理教生代分教会から NTT 百合ヶ丘社宅に下りる斜面にありました。五丁目の御嶽神社は、細山坂東御嶽講の人達によってまつられています。児童公園のあたりは**経塚**と呼ばれる所ですが、開発時の発掘では出土品はありませんでした。五丁目と七丁目の境にある千代ヶ丘トンネルのあたりは、別に追加開墾された土地に付けられる**別甫**と呼ばれた所で、『風土記稿』にも記載があります。八丁目北部の千代ヶ丘配水塔付近は**七国峠**と呼ばれ、町内で一番高い所です。ここから七つの国が眺望できたといわれます。この北側にある窪地は**将切**と呼ばれ、小笠原合戦で大将格の人物が切られた場所と伝えられています。

【向原(向原1丁目～3丁目)】

旧細山の西端にあたる字**向原**の地域です。金程との境を一部改めて昭和六十二年に住居表示が実施されました。西部は東京都稲城市に接し、東京よみうりカントリークラブのゴルフ場になっています。

一、三丁目のほとんど全域が住宅地となりましたが、三丁目の台地から見下ろす傾斜地に向原の森林公園があり、二、三丁目の一部に残された緑地とともに開発以前の森林の面影を残しています。

一丁目の中央あたりは、もと**小町久保**と呼ばれた窪地の畑でした。北側に大きな溜池があり、池の周辺は**池ノハタ**と呼ばれていました。池には水田に水を送るための坎樋が設けられ、『風土記稿』にも「溜井にそひて長四間幅一間、地頭所より修造する所なり」と記されています。

金程(かなほど)地区

金程は、小田急線沿いから一步奥にあり、バスを利用して最寄の新百合ヶ丘駅に出る。もともとは**細山村**の枝郷的な地域で、多摩川と鶴見川の分水嶺に位置づく。多摩丘陵の台地上に開けた村で、畑作を主とした地域であった。金程の地名は、村の中心が東に開けた地域で鑪(たたら)の火口(ホド)のように見立てて、カナホドとしたと思われる。

昭和 55 年頃から宅地造成工事が行われ、昭和 62 年に住居表示が実施され、**金程 1~4 丁目**となった。宅地造成で旧農家の解体に際し、民俗調査が行われて、建物が生田緑地の日本民家園に移築されることで話題になった。

新住民が大半を占める中、金程の伝統文化を継承しようと、新住民をも巻き込んだ諸活動が盛んな地域でもある。

現在の金程地区の面積は、金程 1~4 丁目 50ha

金程の小名 坂上、大門沢、中の久保、坂木、西平、坂下、前原

金程の字 後谷、西平、夕木、前田

通称地名 長坂、図法田、桜畠、砂田、中尾根、山あらく、茶の木畠、坂下、坂本、中ノ久保、平み、夕木田、日影、白山下、曲りっど、権現下、寮跡、小沢原古戦場、後谷戸、大見谷戸、大津沢、胴坂、松木坂、勝坂、狐山、浅間山、殿山、平川

金程 1 丁目 夕木、前田

金程 2 丁目 夕木、前田、西平

金程 3 丁目 西平、後谷、細山字向原

金程 4 丁目 前田、西平、後谷、細山字向原、西久保

【金程一丁目~四丁目】

このあたりは古くは**金程村**と呼ばれていましたが、明治二十二年の市制・町村制施行で**生田村**大字金程となり、昭和十三年に川崎市へ編入されました。かつての橘樹郡の最西部にあたり、西は多摩郡、南は都筑郡に接し、行政的にも一番の奥地に位置していました。

昭和五十五年から**夕木**地区を除く全域で宅地造成工事が行われ、西部の四つの山が切り崩されて町内の景観は一変しました。細山の向原との町境を一部変更し、昭和六十二年に住居表示が実施されました。

『風土記稿』には、「古は多摩郡小沢領に属せしと云」とあります。寛文九年(一六六九)の水帳では多東郡の所属になっていますが、『武蔵田園簿』や『武蔵国郷帳』では橘樹郡の中に記載され、江戸初期にはその所属がはっきりしていなかったようです。

金程村の村名は、『蔭涼軒目録』の長享二年(一四八八)七月五日の条に記された西芳寺の寺領目録案に「武蔵国小沢郷金程村 久敷不知行之間不在之」(『県史資料編 3 下』)と書かれたのが初見とされています。これは摂津満親という人が、応永二十四年(一四一七)に金程を含む小沢郷の一部を京都の南禅寺に寄進し、後に西芳寺領に移ったものですが、久しく知行していないので年貢高は不明の旨が書き添えられています。

一丁目は字**夕木**にあたる地域で、昭和三十年代に住宅地として開発されました。夕木は、夕日が差し込む谷があったのでつけられた地名といわれ、谷には**夕木田**がありました。**砂田**は砂を多く含んだ水田で、水帳にも記載があります。その上には**砂田山**があり、開発で崩された山肌の一部に砂地が見えています。

二丁目から四丁目にかける中央部は、開発以前の金程の中心部で、十数軒の民家がここに集落を作っていました。集落の後方にあたる北部の山地は字**後谷**で、ここに**後山、後谷**があり、前方には**前田**が広がっていました。そしてその向こうに見える山が**向山**というように、集落の位置から見て付けられた地名が周囲にありました。

『風土記稿』に記載のある旧跡**小沢原古戦場**は一丁目東部の万福寺境にあります。そして四丁目と千代ヶ丘五丁目の境にある**坂本**は、合戦のとき戦勝者が登って来た**勝坂**のもとにあたる場所と伝えられ、水帳にも記載されています。合戦に由来する地名はこのほか**万福寺**や**古沢**にも伝えられ、小沢原合戦の戦場はこのあたり一帯に及んでいたと考えられます。

高石（たかいし）地区

高石は小田急線及び世田谷町田線の北側と南側の東半分**高石一丁目から六丁目**がある。南側の西半分が**百合丘一丁目から三丁目**がある。明治 22 年から**生田村**字高石として本村の生田の影響下にあった。小田急線が昭和 4 年に開通してからも、西生田駅（現よみうりランド駅）が最寄駅で村の中心が東側にあった。昭和 35 年に日本住宅公団が高石の南部西側を大規模に宅地造成をして百合丘団地が完成した。都市型団地として全国的に注目された団地である。これを受けて、小田急線は新駅を開設したのが、百合ヶ丘駅である。駅に近く、都心に出るのも便利だということで、駅周辺開発のモデルとして脚光を浴びた。現在は入居者の世代交代と建物の老朽化などから、再開発が行われている。

一方、高石地番の地域も昭和 59 年に住居表示が実施されて、一丁目から六丁目ができた。周辺の細山や生田の宅地開発に合わせて、丘陵地も谷戸もそのほとんどが住宅地となっている。その周辺の町が再編成されて、一部が昭和 57 年に**東百合丘一丁目から四丁目**ができた。東百合丘は高石・百合丘 3 丁目・王禅寺・生田の一部からできた町である。高石の小名の**塔ノ越**は、峠を意味する地名で、生田から王禅寺に抜ける尾根道にあるところから付いた地名と考える。

高石の地名由来は、よくわからない。地形から判断すると、タケシ・タカシいう、五反田川などの低地から見て、周辺が高くなっている所からの地名か。

現在の高石地区の面積は、高石 1～6 丁目 115ha、百合丘 1～3 丁目 59ha、
東百合丘 1～4 丁目 77ha

高石の小名 鶴巻、勝沢、猫の実、半郡、打越、小貝戸、石神、烏沢、塔ノ越、水暮、
雉ヶ谷、萩谷、蓮慶峰、瀧沢、雁股、ちくはん、二本松、字原、字本村

谷

高石の字 石神、水暮、三谷、猫三谷、烏沢、二本松、半郡、中半郡、富士塚、山後、
中村、本村、寺前、森下、稻荷森、弦巻

通称地名	上、下、谷戸、宮田谷戸、長窪谷戸、井戸窪谷戸、宮山、上っ原、お伊勢の森、春日森、権現森、八幡森、富士浅間森、稲荷森、二枚橋、追分、長坂、布子坂、旧道
高石 1 丁目	中村、森下
高石 2 丁目	本村、寺前、稲荷森
高石 3 丁目	中村、森下、弦巻、石神
高石 4 丁目	石神、水暮、三谷
高石 5 丁目	三谷、猫三谷
高石 6 丁目	猫三谷、烏沢
百合丘 1 丁目	山後、中半郡
百合丘 2 丁目	山後、富士塚
百合丘 3 丁目	中半郡、半郡、二本松
東百合丘 1 丁目	生田字塔の越
東百合丘 2 丁目	生田字塔の越、餅井坂
東百合丘 3 丁目	生田字餅井坂
東百合丘 4 丁目	生田字塔の越、餅井坂、高石字二本松、王禅寺字光ヶ谷

【高石一丁目～六丁目】

現在の高石一丁目～六丁目と百合丘一丁目～三丁目を含む地域を昔は**高石村**といました。高石村はその後、明治二十二年の市制・町村制施行で**生田村**大字高石となり、昭和十三年に川崎市に編入されました。古くは区内の細山、金程と共に橘樹郡に属していました。一丁目～六丁目は、旧高石の字**本村、寺前、中村、稲荷前、森ノ下、弦巻、石神、水暮、三谷、猫三谷、烏沢**を含む地域です。昭和三十年代から始まった百合丘地区の開発をきっかけに住宅化が進み、東南部に残されたわずかな畑地を除くほぼ全域が住宅地となり、昭和五十九年に住居表示が実施されました。

『風土記稿』に記載のある本村は、字**本村**から寺前にかける二丁目の一帯でした。天正十年(一五八二)、武田氏滅亡の時逃れてきた家臣加々美正光は、この本村に住んでいたといわれ、のちの高石村の領主加々美氏はこの人の子孫です。高石山法雲寺や、潮音寺もこの本村にあります。また、**高石神社**より早く勧請された熊野神社(大正十年、高石神社に合祀)もかつて本村にあり、盛大な祭礼が行われていました。本村はその名が示す通り、高石村発祥の地域だったと思われます。

やや時代が下って宝暦十四年(一七六四)の村絵図(市民ミュージアム蔵)には『風土記稿』に記載のある字**原**が弦巻、今の三丁目の北部あたりにみえ、名主の家の前には高札場や郷蔵があり、民家も集まって当時は原が村の中心地だったようです。現在も「元名主」と呼ばれて屋号を「原」という家があります。

小田急線南側の四、五、六丁目は、開発以前は谷が南に延びて、北から水暮、三谷、猫三谷、烏沢の字がありました。猫三谷から烏沢一帯は前述の宝暦十四年の村絵図には「**ぬこさね**」と記され、『風土記稿』記載の小名「**猫の実**」にあたる所です。猫の名称の由来は

はっきりしませんが、高石村を開発した五苗の一人、笠原氏は、戦国期に城代として小机城に居城した笠原氏の一族と伝えられ、小机城は別名を根古屋城とも称したので、これにちなんでつけられた地名ともいわれています。

県道世田谷町田線から矢野口へ通じる県道稲城読売ランド前停車場線の角地にあるレストランは、以前、細王舎のあった所です。明治二十二年、座繰機という養蚕の糸くり機から出発した細王舎は、大正期始め、二代目が足踏式の脱穀機を発明してから、農機具工場として一躍有名になりました。当時としては画期的な発明で、国内のほか満州、台湾、中国方面にも輸出されました。養蚕以外にはほとんど現金収入の無かった時代ですから、工場は近村の人達の良い働き場となり、最盛期には三百人近い人が働いていました。高石の人口も増加し、約半数の人が働いていたということです。細王舎の名称は、初代夫妻の出身地である細山と王禅寺から一字ずつ取ってつけたといわれています。

一丁目の高台にある高石神社は、森ノ下の西端です。承応三年(一六五四)に領主加々美金右衛門によって建立され、社の森は「**お伊勢の森**」と呼ばれて親しまれてきました。一月十五日に行われる流鏝馬の行事で知られています。

【百合丘一丁目～三丁目】

小田急線百合ヶ丘駅の南にあり、旧高石の字**山後、富士塚、中半郡、半郡、二本松**にあたる地域です。日本住宅公団による大規模な宅地造成工事が行われて、昭和三十五年に公団住宅が完成し、多数の人達の入居とともにできた町です。この年の三月、小田急線百合ヶ丘駅も開設しました。百合ヶ丘団地の完成は、川崎市西部の農村地帯が都心へ通勤する人達の新しい住宅地として開発されるきっかけとなり、画期的なことでした。人口の増加に伴って、駅周辺に商店やスーパーマーケットが進出し、にぎやかな商店街ができました。百合丘の名称は、宅地開発に百人余の地主などが力を合わせて協力したこと、弘法の松周辺に山百合が自生していたこと、また山百合が神奈川県花であることなどから考えられた町名といわれています。

二丁目にある**弘法の松**の伝説は広く人々に知られています。弘法大師が諸国を巡錫した時、この地に百の谷があれば寺を建てようと考えましたが、一つ足りなかったので断念して松を植えたという伝説です。その古木は枯れて、現在あるのは二代目の松です。谷と松の木が非常に多かったこの地にふさわしい伝説です。

昭和のはじめ、現在の三丁目十九番地と万福寺の境付近で、約百万年前のものと思われるパラステゴドン象の歯化石が発見され、四十八年、市の天然記念物に指定されました。

【東百合丘一丁目～四丁目】

区の東部にある新しい町名の町で、昭和五十七年、多摩区からの分区に伴い、生田、高石、王禅寺、百合丘三丁目のそれぞれ一部を含めて住居表示を実施してでいた町です。

江戸時代には橘樹郡の**上菅生、下菅生**の両村にまたがり、小名**長沢**の南西にあたる地域でした。

一、二、四丁目が高石と接する一帯を**塔ノ越**といいます。高石との境は見晴らしの良い尾根道で、昔は生田から王禅寺方面へ越えて行く道でした。この道が長沢方面から登って来

る道と出合った所は一番の高台で、ここに原店という食料品店があります。明治九年に店を開いた頃は、飴や一杯酒を売る峠の茶店でしたが、あたりは家一軒ない見渡す限りの原っぱだったそうです。野原の一軒家を誰いともなく「原店」と呼ぶようになりました。現在はバス停の名前にもなり、車を運転する人の目印にもなっているところです。

餅井坂は塔ノ越の南の方をいいます。土地の人達は「もちざか」といいます。バス停「餅坂」のあたりに「餅屋」という屋号の家があります。昔から祭や縁日に餅をついて露店で売っていた家で、昭和二十五年頃まで続いていました。この家の付近一帯を「餅坂」と呼んでいたのが地名の起こりのようです。小田急バスの停留場は「餅坂」、市営橋の停留場は「餅井坂」となっています。

昭和三十年代までは民家もほとんど無い地域でしたが、その後急速に宅地化が進み、現在は一、二、四丁目の全域が住宅地となりました。この地域は、もと生田村(明治 8 年、上菅生村と五反田村が合併して生田村となった)長沢だったので、現在も鎮守は多摩区長沢四丁目の諏訪神社です。

王禅寺(おうぜんじ)地区

王禅寺はその名の通り、この地にある真言宗の寺、王禅寺に由来する。この地区には、他に、**真福寺**や**万福寺**などの地名があることから、古くから寺が集合する地であったと思われる。

王禅寺村は大村で主要道路から外れ、開発が最も遅く、旧村の佇まいを留めていた。しかし、周辺の開発に伴って大規模な住宅地が造成され、新しい町が生まれた。最も早くできたのが、昭和 48 年に王禅寺と早野、横浜市黒須田の一部を含む**虹ヶ丘 1~3 丁目**である。その後、昭和 51 年に再編成された虹ヶ丘 1~3 丁目ができ、昭和 56 年に万福寺・上麻生寄りに**白山 1~5 丁目**ができ、それに伴い白山小学校や真福寺小学校などが次々に開校した。しかし、白山小学校は児童数の減少に伴い平成 21 年 3 月に王禅寺小学校に併合され廃校になるなど、激しい変化に町が翻弄されていった時代でもあった。そして、王禅寺も平成 13 年王禅寺西 8 丁目、王禅寺東 3~6 丁目と住居表示が実施され、ほとんどが住宅地として整備されてしまった。平成 14 年に王禅寺西 8 丁目と王禅寺東 6 丁目の一部が再編成される。平成 26 年に下麻生の一部が王禅寺東 5 丁目に編入された。

王禅寺の寺のある一帯が緑地公園として保存されている。

現在の王禅寺地区の面積は、王禅寺 81ha

王禅寺西 1~8 丁目 118ha、王禅寺東 1~6 丁目 138ha、
白山 1~5 丁目 40ha

王禅寺の小名 日吉谷、荒立野、入口、真福寺谷、光かゞ谷

王禅寺の字 下耕地、入口、通、志村谷、化粧面、庄田谷、大田谷、般若面、日吉谷、大門、四ツ田、五郎谷、源左衛門谷、瓦谷、島田、白山、大谷、源内谷戸、日光、吹込、米田、荏子田、這松、光ヶ谷

通称地名 真福寺、本村、入口、谷戸、日吉、上、中、下、金子谷戸、十六軒谷戸、背戸谷戸、坪田、広町、宮免、四十八枚田、化粧面、油免、新田坂、死人坂、稲荷森、裏門坂、鍋ころがし、けち山、米田の池、荳子田池、寺前、夏刈谷、榎木戸、むじな谷戸、民部谷戸

王禅寺西 1 丁目 字這松、光ヶ谷、吹込、荳子田、

王禅寺西 2 丁目 字這松、光ヶ谷

王禅寺西 3 丁目 字荳子田、吹込、米田、島田、光ヶ谷、瓦谷

王禅寺西 4 丁目 字吹込、米田、島田、白山谷

王禅寺西 5 丁目 字吹込、日光、

王禅寺西 6 丁目 字日光、上麻生字大ヶ谷戸

王禅寺西 7 丁目 字日光、源内谷、白山

王禅寺西 8 丁目 字源内谷、白山

王禅寺東 1 丁目 字瓦谷、日吉谷、源左衛門谷、光ヶ谷

王禅寺東 2 丁目 字瓦谷、島田、日吉谷、般若面、大田谷

王禅寺東 3 丁目 字日吉谷、大田谷、般若面、大谷、化粧面谷、五郎谷

王禅寺東 4 丁目 字般若面、島田、大谷、白山谷、白山、下麻生字花島

王禅寺東 5 丁目 字大谷、白山、化粧面谷、通、入口、志村谷、下麻生字花島、籠口

王禅寺東 6 丁目 字入口、下耕地、下麻生字日枝、入生、踊場、早野字富士山下

王禅寺 字通、志村谷、大門、五郎谷、四ツ田

白山 1～5 丁目 字白山

【王禅寺】

現在の王禅寺、白山一丁目～五丁目、虹ヶ丘一丁目の一部を含む地域をかつては**王禅寺村**といました。王禅寺村は、明治二十二年の市制・町村制施行で**柿生村**大字王禅寺となり、昭和十四年に川崎市へ編入されました。

現在の王禅寺は、区内で一番広い面積を占める町で、昭和四十年頃から住宅開発が進み、東部の丘陵地と寺院の周辺を除くほぼ全域が住宅地となりました。

『小田原衆所領役帳』には「王禅寺領 五拾貫文 麻生内」とあり、かつては麻生の中にある王禅寺領でしたが、天正十九年(一五九一)の秀吉の禁制には王禅寺村の村名が見られ、寺号を村名にして一村に独立したことがわかります。

王禅寺村は二代将軍秀忠と鷹狩りなどを通じて縁故が深かったといわれています。寛永三年(一六二六)、秀忠の夫人崇源院が亡くなった時は名主以下百姓三百五十人が落髪し、悲しみながら柩をかつぎました。そして寛永九年(一六三二)、秀忠の死以来、秀忠夫妻の仏殿料として増上寺御霊屋料に編入されました。供米のほか、毎年御霊屋に立てる正月の門松は王禅寺村から上納され、十二月には隣村の石川村から二十人の人夫が松を伐りに来ました(志村家文書)。寛永九年(一六三二)の王禅寺村水帳にある「**けわいめん**」の地名は将軍秀忠夫人の化粧料を賄ったところと伝えられ、字**化粧面**にその名が継がれています。化粧面は梨ノ木団地のあたりをいいます。

古刹**星宿山王禅寺**は静かな山間の地**大門**にある真言宗の寺院で、境内に禅寺丸柿の原木と伝えられる古木や、柿生の里を詠んだ北原白秋の詩碑があることで知られています。寺の創建については、慶安三年(一六五〇)の「聖観音略縁起」(『県史資料編八』)に、「都筑郡二本松に出現した聖観音を、孝謙天皇の勅命で大徳の律師某が現在地に堂舎を建てて祀ったのに始まる」と書かれています。この**二本松**は字**光ヶ谷**の百合丘三丁目に近いところにありました。現在は住宅地の中です。水帳(前掲)には「かうか谷二本松」と記され、宝暦十二年(一七六二)の王禅寺村絵図にも見られます。光ヶ谷は「岩洞の透より光明お(を)放し」た尊像に由来する地名で、『風土記稿』には「**光かゝ谷**」と書かれています。大門の**あぶらめん**は、王禅寺の灯明料を賄った田畑につけられた地名です。

百合丘三丁目との境は急な断崖で、現在はマンションが建っていますが、「鍋ころがし」と呼ばれていました。頼朝の挙兵を知り奥州から馳せ参じた義経の一行がここを通ったとき、弁慶の馬が足を滑らせ、鞍につるした鍋が崖下にころがり落ちたという伝承のある場所です。斜面は雛壇状に作られた**四十八枚田**(いろはだ)もここにありました。

字**吹込**は上麻生の台地から風や雪が吹き込むところもちなむ地名で、上麻生四丁目境の真福寺川に沿った細長い地域です。水帳(前掲)にも**吹込屋敷内**、**吹込丸町**、**吹込榎戸**などの地名が見られます。そのすぐ南が字**日光**で、上麻生の**日光台**の続きです。日当りの良いところとも、日光の宮大工が住んでいたところともいわれています。

真福寺はこの日光にありましたが、明治初め、廃寺となりました。王禅寺の人達は、古くから広い王禅寺村の西半分を真福寺、東半分を王禅寺よ呼び、二つの集落に分けて村内の事柄を処理してきました。そのため、真福寺の名称は、寺が無くなってからも永く地名や町内会の名称として親しまれてきました。

東部の丘陵地**四ツ田**には武蔵工大原子力研究所があり、**五郎谷**には日立製作所のシステム開発研究所があります。このあたりは、かつて兎の猟場で、土地の人達は横浜方面にまで兎を追って行ったそうです。**大兎谷**、**小兎谷**、**兎坂**などの地名が残っています。

浄光堀は、旅の僧浄光が**日吉**の方から**島田**へ水を引くために作った堀と伝えられ、水帳にも記載のある地名です。日吉の水源を利用して黒須田村(現在、横浜市)の反対にあり、堀は完成しませんでした。村の人達は浄光の徳をたたえて山上に像を立てたといわれています。宅地造成でこの堀は消滅しましたが、浄光の話は今も語り継がれています。

琴平神社は、神職を務める志村家にちなむ**志村谷**にあります。正月には茅ノ輪くぐりの行事が行われます。

【白山一丁目～五丁目】

日本勤労者住宅協会と川崎市住宅供給公社の共同開発により都市計画された新しい高層住宅街で、新ゆりグリーンタウンと呼ばれ、旧王禅寺の**字白山**にあたる地域です。町名は『風土記稿』にも記されている**白山神社**にちなみ、昭和五十六年に住居表示が実施されました。

町の中心部は、四丁目のポプラ街区で、その周りに一丁目のさつき街区、三丁目の楓街区、五丁目のアカシア街区、さらに白山小・中学校や真福寺小学校の区画があります。

かつてはひととき目立った高い石段の上にある白山神社も、もっと高い高層住宅から見下ろされるようになりました。この白山神社前の**白山谷**から**民部谷**を通り、王禅寺の方へ越えて行く坂を**シブト坂**といいました。現在の明るい街並からは想像もできませんが、新田義貞の鎌倉攻めの時の戦死者を王禅寺方面へ運んだ道とか、伝染病の死者を運ぶために作られた道とかいわれ、昔は気味悪い坂道だったということです。

早野(はやの)地区

早野は、麻生区の南東部に位置し、王禅寺や下麻生、横浜市の鉄町や寺家町に隣接する。小田急線からも少し離れており、最寄の駅へはバスを利用しなければならない。バスは、新百合ヶ丘や柿生、あざみ野方面など、複数の系路がある。

早野地区の北には農業用水の溜池が複数あり、農業の盛んな地域であった。**54年**に市営の霊園として整備され、一部は公園として自然を保存している。地域のほとんどが農業振興地域に指定され、現在も水田が多く見られる。

王禅寺に近いところが、昭和48年に虹ヶ丘団地が造成され、**虹ヶ丘1～3丁目**となった。隣接する横浜市と土地が複雑に入り込んでいたため、境界変更を行い新しい町が生まれた。

現在の早野地区の面積は、早野 93ha、虹ヶ丘1～3丁目 34ha

早野の小名 龍ヶ谷、堀向、矢崎

早野の字 富士山下、広地、矢崎前、上ノ原、長沢田、堺塚、中ノ谷、梅ヶ谷、山田
通称地名 こんねんぼうふ、坊主谷、堤入、高峠、御堂山、下ノ谷、中ノ谷、木綿谷、塚山、池下、林ヶ池、五ヶ村堀

早野 富士山下、広地、矢崎前、上ノ原、長沢田、中ノ谷、梅ヶ谷

虹ヶ丘1～3丁目 山田、堺塚、王禅寺字志村谷

【早野】

早野は区の南端にあり、東部から南部は横浜市緑区に接しています。早野は、七つの溜池と、かつて**林ヶ池**近くの横穴古墳で人や馬の線刻画が発見されたことで知られています。中央から北部にかけての山林五〇ヘクタールは、市営早野聖地公園の計画区域で、現在整備がされつつあります。

現在の早野と虹ヶ丘一丁目～三丁目の大部分、横浜市緑区もみの木台の一部を含む広い地域を、かつては**早野村**といいました。早野村はその後、明治二十二年の市制・町村制施行で**柿生村**大字早野となり、昭和十四年に川崎市へ編入されました。

早野の名称については、水不足で荒れた土地に稗が生えやすく、「ひえの」が「はやの」になったのではないかと言う土地の人もいます。

早野には九つの字があり、古く元禄十五年(一七〇二)の「武州小机領早野村検地水帳」(石井家文書)にすでに記載があります。北東部の字**山田**と**境塚**の区域は、昭和四十八年に横浜市の黒須田町、鉄町、元石川町地区と同時に区画整理が実施され、その際、一部境界変

更を行い、横浜市側は「すすき野一丁目～三丁目」、川崎側は「虹ヶ丘一丁目～三丁目」となりました。

字**広地**は**早野川**左岸の水田地帯で、**中広地**、**沖田**、**広地堀端**などの水田地名にも見られません。

下麻生の恩廻公園のあたりにかつて鶴見川の元堰を設け、ここから早野の地内に用水堀を通して鉄村(横浜市)など五か村に水を送っていました。早野ではこの用水堀の内側を**堀内**、外側を**堀向**と呼んでいました。堀向は『風土記稿』に小名として記され、水帳には**堀向関場**の地名が見られます。用水堀の用地を提供したため、堀向の田には自由に水を引かせてもらったそうです。古い記録によると「文化六年(一八〇九)、下鉄村と用水路の堀敷料をめぐり、争いがありました。

早野の東部の境界塚は、鉄村との境に塚を築いたことからつけられた地名で、ここから南西に向かう尾根道に境界塚が並んでいたそうです。毎年春秋の彼岸には村中の人が出て、塚が並ぶ尾根道の道普請をし、帰りには塚の上に一畝ずつ土を盛って帰ったそうです。昔、この境界塚を築く時、盛り土が崩れても境界線がはっきり解かるように、塚の下に木炭を入れたという言い伝えが村に残っています。

また、字**上ノ原**の横浜市域には「鉄火の松」の碑があります。昔、境界にある松の木をどちらの村に入れるかで鉄村と争った時、両村の人が焼けた鉄の棒をつかみ合って決着をつけることになり、火傷をしなかった早野村のものになったという伝説の松の碑です。また、このあたりは見通しがよかったので、見張りをするのに都合がよく、ぼくちをした場所とも言われています。上ノ原には**エンジャシキの畑**と呼ばれている畑地があります。水帳に記載のある**円乗屋敷**のことかと思われそうですが、地名の由来については伝えがありません。溜池のひとつ**竜ヶ谷池**は、**竜ヶ谷**にあるためにつけられた名称ですが、いつの間にか**竜ヶ池**と名前が変わってしまいました。池の西には**坊主山**があり、その南下には水帳にも記載のある**木綿谷**がありました。昔はこの谷で採れた綿を嫁入り仕度に使ったそうです。

戒翁寺の斜め向いの畑地は寺の前身であるお堂があった所で、**お堂山**と呼ばれています。お堂山の西の続きに早野村の領主富永重吉と一族の墓地があり、大型の五輪塔四基が立っています。

【虹ヶ丘一丁目～三丁目】

区の東南にあり、東は横浜市緑区に接しています。昭和四十八年に行われた区画整理により、早野の字**山田**と**境界塚**、王禅寺の**志村谷**の一部、さらに川崎、横浜両市の境界変更に伴って横浜市の一部をとり入れてできた町で、虹ヶ丘と命名されました。その後、昭和五十一年に住居表示が実施されました。二、三丁目は公団虹ヶ丘団地の棟が立ち並んでいます。元禄十五年(一七〇二)の「早野村検地水帳」に記載のある**こんねんぼふ**は「**くねんぼう**」とも呼ばれ、このあたりにあった山の窪地で、よくへびが出た所でした。意味はわかりませんが、**前こんねんぼふ**、**後こんねんぼふ**の地名が見られます。耕作に通うのがいやな場所で、村の人達は日が暮れないうちに帰ったということです。

上麻生(かみあさお)地区

明治 22 年に周辺の村が合併して、**柿生村**外一カ村ができる。その村役場が**上麻生**に置かれた。津久井道の旧道が通り、村の南には上麻生横浜道ともつながり、地域の中心であった。

昭和 4 年に小田急線の柿生駅が開業し、世田谷町田線の新道(バイパス)ができるなど、町も少しずつ変化を遂げますが、ゆっくりしたものでした。

昭和 50 年ころに、王禅寺に接する台地上に**美山台**の造成が行なわれ、柿生トンネルが切通しになったことや、新しいバスターミナルの設置により交通アクセスが緩和された。

上麻生 1~3 丁目は昭和 59 年に、2~4 丁目は 62 年に、5~7 丁目は平成 11 年住居表示が実施された。

万福寺や王禅寺に接する地域は、住居表示実施により境界変更を行った。また、麻生川に沿った片平と上麻生の境界は、平成 8 年に麻生川を境に住居表示が行われた。

現在の**上麻生**地区の面積は、上麻生 1ha、上麻生 1~7 丁目 212ha

上麻生の小名 中下、山口、大ヶ谷、竹ノ花、宿地、亀井

上麻生の字 亀井、仲村、白根、大ヶ谷戸、出口

通称地名 松葉下、長谷、がけ松、関場、向新田、日光台、宮の脇、与田川戸、白根河門、橋場、角間田、砂場、宿地、国領、亀井、宮の台

上麻生 1 丁目 字山口、万福寺の一部

上麻生 2 丁目 字山口、王禅寺の一部

上麻生 3 丁目 字山口

上麻生 4 丁目 字山口

上麻生 5 丁目 字山口、大ヶ谷戸、仲村、王禅寺字日光

上麻生 6 丁目 字白根、大ヶ谷戸、仲村

上麻生 7 丁目 字仲村、白根、亀井、下麻生字原、台、国領、柳里、王禅寺字源内谷

上麻生 字亀井

【上麻生】

現在の**上麻生**は、旧**上麻生**の南部にあたる**字大ヶ谷戸、仲村、白根、亀井**の地域です。**麻生川**に沿った町で、南は町田市三輪町に接しています。

現在の**上麻生**と**上麻生一丁目~四丁目**を含む地域は、江戸時代は**上麻生村**と呼ばれていました。上麻生村はその後、明治二十二年の市制・町村制施行で**柿生村**大字**上麻生**となり、昭和十四年に川崎市に編入されました。

上麻生と下麻生はもと一つの村で、中世には**麻生郷**と呼ばれていました。江戸時代初期の『武蔵田園簿』によってはじめて上・下麻生の二村に分かれたことがわかります。

柿生駅は大字大ヶ谷戸にあります。この付近は明治二十二年の市制・町村制施行の際に誕生した柿生村の中心地で、村役場は柿生保育園の南の隣接地にありました。昭和二年、小

田急線が開通した時、ここに柿生駅を誘致するために柿生村の各部落が応分の負担をしたといことです。

柿生村には現在の麻生区内の旧細山、金程、高石、岡上を除く全域が所属していました。この柿生村は昭和十四年に川崎市へ編入され、わずか五十年間で廃止されてしまいました。しかし、柿生の名称に愛着を持つ人は多く、現在でも柿生駅周辺には公共施設をはじめ柿生の名称がたくさん残っています。

王禅寺から柿生中学の方へ行く道は、以前は尾根道を越える急な坂道で、**下駄切り坂**と呼ばれていました。昭和二十六年、ここに市内唯一の柿生隧道ができましたが、昭和五十二年頃、老朽化したため取り壊され、現在の切り通しになりました。

『風土記稿』に記載のある**竹ノ花**は、麻生川と片平川が合流するあたり一帯をいいます。竹ノ花の地名について柳田国男は、「竹鼻又は竹ノ花と言ふ地名が武蔵を始め諸方の川辺に多くあるのは、風害水害を防ぐと同時に家を隠し遠目を遮る昔の田舎武士の武備であろう」（『定本柳田国男集』第二十巻）と述べています。中世の伝承を残す麻生の地にも地方武士の屋敷、竹ノ花が存在したのでしょう。ここを通る**津久井道**沿いにはかつて通行人相手の宿屋や酒屋があったそうです。

宿地は**新中野橋**の近くで、宝永五年(一七〇八)の水帳(小島家文書)にも**宿地**、**宿下**の地名が見られます。ここには宿と呼ばれる家は何軒かありました。

柿生陸橋から横浜へ通じる県道横浜上麻生線の西側は字**白根**で、かつては麻生川に沿った収穫の多い水田地帯でした。水帳でも**白根河内**、**白根道下**に田畑が集中していたことがわかります。現在、麻生環境センターのあるあたりです。

亀井は上麻生南端の字名で『風土記稿』にも記載があります。下麻生に近い一七〇～一八〇番地のあたりは**亀井原**で、平安末期に源義経の従者亀井六郎重清が亀井城を築いた場所と伝えられるところです。水帳に記載のある**亀井屋敷**はすぐその南で、亀井姓を名乗る人物の屋敷があったことを伝えています。亀井の地名は橋の名に残されています。また北西に約四キロ離れた**栗木**にも同地名があり、藤沢の亀井野にも亀井六郎の伝承があります。月読神社は上麻生と下麻生の境界線上にある両町の鎮守で、上麻生一七〇番、下麻生七六〇番の二つの地番を持っています。天文三年(一五三四)、皇太神宮の別宮月読宮を亀井城の東の地に勧請したと伝えられています。

【上麻生一丁目～四丁目】

旧上麻生の字**山口**にあたる地域です。全域で宅地開発と区画整理が行われ、一丁目～三丁目は昭和五十九年に、四丁目は六十二年に住居表示が実施されました。新百合ヶ丘駅周辺の一、三丁目では、川崎市西部の新都心をめざし建設工事が進められています。

開発以前のこの地域一帯は、谷の多い起伏に富んだ地形をしていました。現在、近代的な街づくりが行われている三丁目の一角にある**隠谷公園**は、開発前の谷の名称を公園名につけて土地の人達が残したものです。

二丁目は全域が住宅地となり、整然と区画された住宅街は王禅寺方面にまで続いています。

お屋敷台は上麻生村の領主三井家の屋敷があったところといわれています。

四丁目の中を新しく開通した市道万福寺王禅寺線が市道尻手黒川線とぶつかるあたりは**日光台**と呼ばれたところで、開発前は日当りの良い地味の肥えた畑地でした。王禅寺へ越える丘陵の上で、王禅寺の**日光**に続く台地でした。

王禅寺の境には、かつて上・下麻生と王禅寺三村の共有入会地が十二町歩もあり、三村の戸数や耕地面積の割合で管理地を分担していました。炭焼の木材や肥料にする下草、飼料などは、この入会地の中で賄われていました。入会地の中に鶴松、亀松と呼ばれた形の良い松があり、亀松の姿の美しさを江川太郎左衛門が賞賛したという話が土地の人達の間で語り継がれています。王禅寺の字**這松**は、この亀の形に似た松が地名になったもので、宝暦十二年(一七六一)の王禅寺村絵図にも記載されています。この名木を偲んで四丁目に鶴亀松公園ができました。

下麻生(しもあさお)地区

下麻生は麻生川が鶴見川に合流する地点の左岸に位置し、右岸は町田市三輪町である。王禅寺から流れる真福寺川沿いに耕地が開け、早野の水田地帯に続いていた。

麻生台団地が最も早い住宅建設で、引きつづいて市営住宅が**踊り場**で建設された。

王禅寺や上麻生に住宅開発に伴い、隣接する下麻生でも連続した住宅建設が進んだ。

平成15年に住居表示が実施され、**下麻生1～3丁目**となる。旧住所地は早野境に一部残り、他は上麻生や王禅寺に編入された。

現在の下麻生地区の面積は、下麻生 - ha、下麻生1～3丁目 52ha

下麻生の小名 子ノ神、島、青戸袋、並木、塚畑、ろふ場、おどり場、入生

下麻生の字 押切、島、踊り場、入生、柳里、国領、日枝、台、原、花島、籠口

通称地名 恩廻、籠口ノ池

下麻生1丁目 字原、台、国領、上麻生字亀井

下麻生2丁目 字花島、籠口、日枝、入生、踊場、王禅寺入口、白山

下麻生3丁目 字柳里、入生、踊場、押切、島、上麻生字亀井、早野字広地、横浜市青葉区寺家町の一部

下麻生 字押切

【下麻生】

上麻生の南に続く町で、南は町田市三輪町と横浜市緑区寺家に接しています。

下麻生と上麻生はもと一つの村でしたが、『武蔵田園簿』の記載により、江戸時代初期に上麻生と下麻生の二村に分かれたことがわかります。下麻生には十一の字があり、**島、踊り場、入生、籠口**は『風土記稿』にも小名として記載されています。

字**国領**は**不動橋**より南、**真福寺川**の西側の地域です。律令制下、国衙領であったことに由来する地名で、国府に近かった調布市にも同地名があります。また、地続きの上麻生の地域は「**こくりゅう**」と呼ばれ、宝永五年(一七〇八)の上麻生村の水帳にも記されています。国領は上・下両麻生にまたがる一帯の地名だったことがわかります。

字踊り場は早野の**子ノ神社**の南の下麻生側に広がる区域です。昔、子ノ神社の祭礼の時の踊り場だったことからついた地名で、古くは早野村にあったと伝えられています。いつの頃かわかりませんが、行き倒れになった死者の片付けを下麻生村が引き受けてくれたお礼に、早野村がここを譲ったとも伝えられています。

下麻生の中を真福寺川が縦断し、西から来る**真光寺川**や**麻生川**も**鶴見川**に合流して、南部の地域は洪水の絶えない所でした。用水路や堰をめぐる近村との争いもありました。**恩廻**は、上麻生の亀井から下麻生にかけて洪水に見舞われた時、川の流れを向う側へと必死に追い回したことからついた地名ではないかと土地の古老が話してくれました。昔は**水車橋**の近くに鶴見川の水をせき止める**元堰**がありました。

北部の三井新百合ヶ丘住宅のあたりは籠口です。**籠口池**は江戸時代初期に作られた灌漑用の溜池でした。また、この地の西は字**花島**で、保育園のあたりは**フクベ谷**と呼ばれ、ここにもひょうたん型をした**フクベ池**があり、灌漑用に利用されていました。花島は、村の北の端(鼻)を意味する地名と思われる。

不動院は字**台**にあります。火伏せ不動とも呼ばれ、毎年一月二十八日にはダルマ市が立ち大勢の人でにぎわいます。

岡上(おかがみ)地区

岡上は、川崎市域で唯一の飛び地として、区内の南に位置づく。周囲は、三方を町田市、東に横浜市緑区奈良町に接する。鶴見川が岡上の北側を流れ、丘陵地にあることから、岡上となった。古くは、**岡登**(おかのぼり)とも呼ばれたのは、川を渡って村に入るには岡を登らなければならなかったからという。

地域の西は、和光大学と岡上西町会となり、丘陵部斜面に住宅が建っている。一方東側は農業振興地域に指定され、岡上営農団地の温室や圃場がある。鶴川陸橋から横浜市緑山・奈良町をへてこどもの国に貫ける道はかなりの交通量がある。

現在の岡上地区の面積は、岡上 145ha

岡上の小名 自性寺谷、せいのだう、関村、川井田、阿部ノ原

岡上の字 川内、開戸、関、川井田、丸山、池ノ谷戸、天神谷、自正寺、梨子ノ木、小塚、杉山、宝殿、栗畑、杉山下

通称地名 五反田、本村、精進場、丸山、鎌倉古道

【岡上】

区の西南にあり、南が横浜市緑区と接しているほかはすべて東京都町田市に囲まれているため、川崎市の飛び地といわれている町です。

古くは「おかのぼり」村と呼ばれていました。川崎市域に現存する最古の検地帳である天正十九年(一五九一)の「武州都筑郡岡上村御縄打水帳」(梶家文書)では都筑郡の所属になっていますが、『武蔵田園簿』や『武蔵国郷帳』では多摩郡の所属になっています。江戸

時代の古文書にも二通りの記載があって、その所属ははっきりしませんが、江戸末期には都筑郡の所属と確定したようです。

岡上が川崎市の飛地になったいきさつには、明治から昭和に至るまでの行政区画のめまぐるしい変遷と地理的な条件がありました。

明治七年、大区小区制実施の時、岡上は都筑郡の寺家、恩田、奈良、鴨志田の村々(以上、横浜市)とともに七大区七小区になりました。

そして明治二十二年に市制・町村制が施行されて町村の合併が行われた時、岡上は地理的な不便さもあって、大区小区制の時に同じだった南部の村々とはいっしょにならず、一村で残り、行政事務の一部を多摩郡を越えた北部の都筑郡柿生村と共同で行いました。さらに大正二年には「柿生村外一ヶ村事務組合」を設立して村政の全部を柿生村と共同運営することになり、行政、経済を通じて柿生村との関係が深まりました。この間、三多摩地区が明治二十六年に神奈川県から東京府に移管され、岡上周辺は南部を除いて東京府になりました。その後、横浜、川崎両市で隣接町村の編入が進み、都筑郡の村々もいずれかの市へ合併を余議なくされました。岡上は、南部の横浜市よりも柿生村とともに川崎市への編入を選び、昭和十四年、同市の飛地となりました。

岡上の北部を通る県道世田谷町田線が、村の経済や文化の交流に大きな役割を果たしてきたこと、昭和二年の小田急線の開通によって、鶴川駅や柿生駅が開設し、柿生村との距離が一層縮まったことも川崎市への編入を決める理由になったと考えられます。

住宅地は、北部の平坦地と西側の丘陵斜面に広がっていますが、南東部一帯は農地で、雑木林や竹林があちらこちらに残っています。

岡上には十四の字がありますが、**川井田、杉山下、杉山、丸山**以外は前述の天正十九年の水帳に見られる古い地名です。

『風土記稿』にある小名**自性寺谷**は水帳にも記載があり、字**自正寺**にあたる所ですが、寺の伝えはまったくありません。水帳の「**せいとう**」は『風土記稿』の「**せいとう**」で、丸山の岡上文化センターのあたりをいいました。昔ここにセエノカミをまつたお堂があったことからついた地名と思われる。丸山は村の共有地で、昔は屋根の葺き替え作業などの共同作業を行なった所です。

自正寺から南へ延びる**天神谷**を、土地の人達は**山伏谷**と呼んでいます。明治までこの谷には、修験道を学ぶ山伏の家が数軒あり、村の人達に様々な民間信仰を伝えてきました。

岡上神社は字**栗畑**にあります。脇の道を北東に入った所が『風土記稿』に記載のある**阿部ノ原**でアベツバラと呼ばれています。現在は小高い畑地ですが、ここから古瓦や文字瓦がたくさん出土し、九世紀後半の廃堂跡とも瓦の窯跡とも言われています。

字**開戸**は**鶴見川**に架かる岡上橋の東南で、水帳にも「**かいと**」と記されています。「**かいと**」は本来、「**垣内**」と書き、豪族や百姓が自宅のまわりを囲って耕地とした所の名称で、古代から中世の土地売買の証文などにもよくみられる古い地名です。ここも区画を定めて開墾された地域だったのでしょう。開墾地にまつられたと思われる開戸稲荷がありました。

『風土記稿』にある**関村**は、字**関**にあたり、本村橋の西の地域で「**せきのまへ**」「**せき下**」「**せきは**」などの地名が水帳にもみられます。

東光院は字**宝殿**にあり、行基伝説を伝える古刹で、寺の西側の道は**宝殿通り**と呼ばれていました。兜跋毘沙門天立像は市の重要歴史記念物に指定されています。

田園風景の広がる静かな岡上にも、文化二年(一八〇五)大きな事件がありました。領主の大久保氏が農民から御用金を徴収しようとしたのに対し、村中の農民が窮状を訴えて反発したことです。首謀者がわからないように、上下左右から長方形に署名連印して団結を確認し合った議定書が、現在も岡上に残っています(梶家文書)。非合法を承知で領主に門訴した岡上の人達の心情が伝わってきます。

菅(すげ)地区

菅は、川崎市域の北西部に位置し、稲城市に接する。北には多摩川が流れ、南の丘陵部と川によって形成された沖積地に町が広がる。町の中央を県道府中川崎線(府中街道)が通り、稲城市や府中市とは文化的交流の濃い地域であった。

昭和 39 年に丘陵部によみうりランドができたころから、丘陵部を中心に宅地造成工事が行われた。**仙石谷戸**にはふじのき台の分譲地が、**馬場谷戸**には寺尾台団地(昭和 45 年)ができる。昭和 48 年に京王相模原線が敷設され、京王稲田堤駅が開業し、登戸を經由せずに新宿など都心に直結できるようになり、人の流れがかわった。平成 49 年には、相模原の橋本駅まで開通し、新宿まで直通運転するに至り、南武線との乗り換え利用者が増えた。菅地区の住居表示は二回に分けて実施された。昭和 59 年に稲田堤、野戸呂、芝間、城下、60 年に馬場、北浦、仙谷の地域である。

現在の菅地区の面積は、菅 1～6 丁目 76ha、菅稲田堤 1～3 丁目 61ha、
菅野戸呂 30ha、菅北浦 1～5 丁目 64ha、
菅仙谷 1～4 丁目 116ha、菅馬場 1～4 丁目 103ha、
菅城下 19ha、寺尾台 1～2 丁目 26ha、

菅の小名 城ノ越、鷹之巣、馬場耕地、おんまわし、おき田、柳町、とつら谷、松の木戸、
矢栗谷戸、野戸呂、山崎、芝間、仙谷、北浦耕地、大谷

菅の字 芝間耕地、野戸呂耕地、北浦耕地、北浦谷、馬場耕地、馬場谷、小谷、仙石谷
通称地名 小沢峰、天神山、浅間山、小沢谷、塚戸、竹の鼻、延命場、庚申坂、寺尾台、
瓦塚、たとう様、五徳松、天狗松、川久保谷戸、清水谷戸、西入谷戸、天宿、
城下

菅 1 丁目～6 丁目 芝間耕地

菅稲田堤 1 丁目～3 丁目 北浦耕地、馬場耕地

菅野戸呂 野戸呂耕地

菅馬場 1 丁目～4 丁目 馬場耕地、北浦谷、馬場谷

菅北浦 1 丁目～5 丁目 馬場耕地、北浦耕地、北浦谷、小谷

菅仙谷一丁目～四丁目 仙谷谷、北浦谷

菅城下 芝間耕地

寺尾台 1・2 丁目 馬場谷、生田字北大作、寒谷

【菅】

南武線の稲田堤駅と中野島駅の中ほどに位置する小さな町です。

昔は、菅一丁目～六丁目、菅野戸呂、菅稲田堤、菅城下、菅仙谷、菅北浦、菅馬場、寺尾台とともに江戸時代には**菅村**に属していました。

菅の地名は、寿福寺の寛永二年(一六二五)の鐘銘に、「武州多摩郡小沢郷菅村」がみられます。元禄三年(一六九〇)に、幕府は二ヶ領用水の取入口を中野島と菅の境に設けるため、この地を天領とし、多摩郡から橘樹郡に編入しました。

その後、明治十一年の郡区町村編制法施行にともない、橘樹郡菅村となり、明治二十二年の市制・町村制施行時には、菅村は中野島、登戸、宿河原、堰とともに**稲田村**に組み込まれました。昭和十三年に川崎市に編入されました。そして昭和四十七年に区制施行とともに多摩区菅となりました。菅地区は、昭和五十九年から六十年の住居表示にさいして、『風土記稿』にみられる小名や字名の**野戸呂、馬場耕地、仙谷谷、北浦**の旧地名を復活し、菅野戸呂、菅仙谷、菅馬場、菅北浦としましたが、一部、住居表示の区域からはずれた部分が、現在も菅として残っています。また、寺尾台は昭和四十五年に区画整理により誕生しました。

菅の地名の由来については、多摩川の河原に菅や小さな雑木が茂っていたからとか、あるいは橘樹郡菅生郷の菅生から一字としたという説(『菅小学校百周年記念誌』)もありますが、定かではありません。

明治以前には、菅は、**上菅**と**下菅**に分かれ、名主も上菅と下菅にそれぞれおり、鎮守も上菅は八雲神社、下菅は子之神社と分かれていました。

上菅には、仙谷、城下、芝間、野戸呂、天宿の各集落があり、下菅には北浦、稲田堤(昭和十年に川原、新田を併せて改称)、馬場の各集落があります。これらの集落のことを菅では「ムラ」と呼び、ムラの範囲を「シマ」と呼んでいます。荒れた河床を配発して集落が生まれていく過程を、シマという言葉はよく表しています。ムラの下部組織には講中があり、冠婚葬祭などの互助活動の中心になっており、そのつきあいを「シマヅキアイ」と呼んでいます。

古くからの集落は、洪水を避けるために周囲より高い場所にあり、また低い所の家々も周囲に土盛りをしたり、竹や木を植えて土盛りが崩れないように工夫してあります。

【菅一丁目～六丁目】

区内の多摩川沿いの地区のなかで最西北部に位置し、東は二ヶ領用水の中野島水路を境にして上布田と中野島に接し、南は生田、西は稲城市に接し、多摩川の対岸は調布市です。菅一丁目から六丁目の大部分は、以前の字**芝間耕地**です。芝間というのは、『稲田の民俗』によると、開墾のできる可能性のある未開地、もしくは草や小さな雑木の生えている採草地で、その草を肥料や飼料に使ったところといわれています。

菅の用水は、稲城市の大丸から取水した**大丸用水**と、仙谷谷から流れてくる**小沢川**、丘陵の裾を流れる**三沢川**にたよっています。

大丸用水は、二ヶ領用水と同じように多摩川を水源とする農業用水で、長沼、押立、矢野口、菅、中野島、五反田、上菅生の村々の水田を潤していました。その大丸用水が矢野口から菅に入るところを**樋口**といいます。

『風土記稿』に記されている**百村川**は、現在の三沢川のことで、**北浦**と**馬場**を通過して二ヶ領用水に流れ込んでいます。しかし、この川は頻りに洪水をおこし、被害が大きかったために、昭和二十年代に新たに流路を菅城下の**新指月橋**の上流で分岐して**新三沢川**を設けました。

以前は、この川筋の一丁目の**新三沢橋**から少し下流のあたりは、水田の落ち水や、大丸用水の余水が集まって池をつくり、**池淵**とよばれていました。

四丁目の京王稲田堤駅付近は、**南天宿**です。天宿とは、天王様(八雲神社)に関係ある地名といわれていますが、定かではありません。また菅野戸呂の東南部には**北天宿**があり、以前は二つ合わせて**天宿**と呼ばれていました。

ここから京王相模原線に沿って八雲神社にかけては、昔、大きな柳が並び、**柳町**と呼ばれていました。柳町は『風土記稿』にも記されてある古い地名で、**天神下**と並んで菅ではもっとも肥沃な土地でした。多摩川の氾濫によってできた荒地を、長い年月をかけて開墾してきた菅は、今では住宅のひしめく市街地となって、往古の菅の生い茂る湿地の面影をとどめているものはありません。

【菅稲田堤一丁目～三丁目】

菅野戸呂と同じく多摩川のほとりに位置し、南武線稲田堤駅の北側で、南武線と多摩川を渡って南下してくる京王相模原線に囲まれた地域です。

菅稲田堤も、江戸時代は菅村に含まれ、稲田村、稲田町等を経て、多摩区菅となり、昭和五十九年の住居表示で菅稲田堤一丁目～三丁目となりました。

菅稲田堤一・二丁目は以前の字**北浦耕地**、三丁目は字**馬場耕地**にあたります。

地名の由来は、明治三十一年に日清戦争の勝利を記念して、多摩川の堤防に村をあげて二五〇本余りの桜を植えたことから、この土堤は**稲田堤**と呼ばれました。やがて稲田堤の桜は、東京近郊の王子の飛鳥山、小金井などとならぶ花の名所となりました。そして昭和五年に北原白秋が稲田堤の桜を詠んだ多摩川音頭を作詞しました。次の詞はその一節です。

咲いた咲いたよ 稲田のさくら 時は世ざかり 時は世ざかり 花ざかり

こうした背景から、当時、観光名所になっていた稲田堤の名をそのままとって、昭和六年に川沿いの**川原**と**新田**の両集落を併せて稲田堤と改称しました。そして昭和十六年には、菅に観光協会がつくられ、南武線稲田堤駅から多摩川の堤防へと通じる道にも桜の木が植えられ、**観光道路**と呼ばれました。しかし、昭和三十三年と三十五年の多摩沿線道路改修のために桜の並木は切られてしまい、わずかに面影をとどめていた残りの桜も、昭和四十三年にはすっかり姿を消してしまいました。現在は店が立ち並ぶ稲田堤商店街となっています。

また堤防の桜も、通行車両の増加による排気ガスのため枯れたり、道路改修で切られたりして、現在は往時の花ざかりをしのぶことはできません。

川原とは多摩川沿いの二丁目から三丁目にかけてをいい、新田はその西側の川沿いをいいます。川原とは、文字どおり、多摩川の川原のことで、ここにはさらに**三軒家、中島、下島**の集落がありました。三軒家とは、その集落が三軒の家から始まったからだといわれていますが、定かではありません。新田とは新しく開けた耕地のことで、ここにも、**前島と裏島**という集落があります。

川沿いの二丁目と三丁目の境のあたりには、かつて「**下菅の渡し**」がありました。下菅の渡しも上菅の渡しと同様、川向こうの調布にある畑の耕作に通うための作場渡しで、また下菅や生田方面の人々が梨の集荷や肥ひきに通う渡しでもありました。湯水の十月から翌三月までは、渡し舟は使えず、仮の橋がかけられていました。

人家もまばらであったこのあたりも、昭和五年に京王線が調布から多摩川原駅まで支線を延ばしたことで、対岸の駅周辺には料理屋が立ち並び、稲田堤の桜見物や川遊びの行楽客も増えました。また昭和十五年には上流の矢野口に多摩川原橋が開通したために、渡しを渡る荷車も減ってしまい、下菅の渡しと上菅の渡しとを一つにし、新たに観光道路の多摩川べりに「菅の渡し」をつくりました。

しかし、橋がかかると、菅の渡しを利用する通行人や下肥運びは減り、利用者は対岸の畑に行く野戸呂、芝間、川原の農家の人々のみとなり、さらに自動車一般化するようになり、ついに昭和四十八年、この渡しも姿を消すにいたりました。その後、昭和四十九年には京王電鉄相模原線が開通し、京王稲田堤駅が開設されました。

今では、このあたりも住宅地となり、多摩沿線道路脇の堤防下に建てられた「菅渡船場跡」の石碑だけが、わずかに往時をしのばせるものになっています。

【菅野戸呂】

菅野戸呂は、南武線の稲田堤駅と矢野口駅との間に位置していますが、鉄道の沿線には面しておらず、南側が大丸用水と、北側を流れる多摩川にかこまれた土地で、対岸は調布市です。

菅野戸呂は、江戸時代、菅村に属し、明治二十二年の市制・町村制により稲田村となり、その後、稲田町を経て、川崎市に編入され、昭和四十七年の区制施行により多摩区菅となりました。そして昭和五十九年に住居表示が実施され、江戸時代の旧地名を復活して菅野戸呂となりました。

野戸呂のトロとは、全国各地の川の流域によくみられる地名で、川の流れがゆるく淀んだところの意です。川崎区の**小土呂**も同じです。

野戸呂は、元禄四年(一六九一)の「菅村年貢付状」では菅村に入っていますが、野戸呂分として別格扱いにしてあります。これはおそらく、万治二年(一六五九)の洪水以前までは多摩川の北側にあった野戸呂が、洪水によって土地が流され、しかも流路が北へ移動し、多摩川の南側となったために菅村に属し、野戸呂が独立するまでの処置として野戸呂分としたものと思われます。

野戸呂の東南部には、菅四丁目の南天宿に隣接して**北天宿**があります。天宿というのは、天王様(八雲神社)の近くにあることから名づけられたという説や、古代の天皇陵の番人と

いう意味の守戸を、この場合、天王様を天皇陵にみたてて用いてそれがなまったものだという説(『稲田の民俗』)もありますが、確かなことはわかっていません。

野戸呂は、昔から多摩川の洪水でしばしば堤防が決壊しました。そこで明治四十三年も大洪水を契機に、堤防近くに土俵小屋を建てて古い俵二百俵を貯え、いざという時にはそれに土をつめて、堤防の補強ができるようにしていました。その小屋の近くには、水難を絶とうという願いから、**たとうさま**という石の祠が建てられました。これは現在の野戸呂十一番地の堤内にありますが、多摩沿線道路が開通して以来、被害を受けたために金網をかけていたのを、最近新しく造りかえました。

たとうさまのあたりには、かつて「**上菅の渡し**」がありました。この渡しは、『風土記稿』に、渡しは村の西の矢野口と両村で共有し、濁水の十月から翌三月までは仮の橋をかけた、とあるように以前は矢野口にあり、「**矢野口の渡し**」と呼ばれていました。しかし明治時代に多摩川の流路が変わったために渡しもたとうさまのあたりに移動し、「上菅の渡し」と呼び変えられました。

この渡しは、菅の農家の人たちが川向こうの調布にある畑へ耕作に通うための作場渡しでしたが、昭和十五年に矢野口に多摩川原橋ができると、上菅の渡しは下流の**下菅の渡し**といっしょになり、少し下流の野戸呂と稲田堤の間に移りました。しかし、その後、渡船の利用者が減り、ついに昭和四十八年に渡しは廃止になりました。昭和四十九年には京王相模原線が多摩川をこえて開通しました。上菅の渡しのあとは、現在、多摩川河川敷の菅公園の敷地内となっています。

上菅の渡しへと通じる道は、野戸呂の主要な道で、生田から菅仙谷、菅城下を通過して渡し場へと通じるもので、ここを通過して黒川の炭や相模川の鮎などが運ばれていました。そして大正四年に、このまがりくねったでこぼこ道は、道路改修で道はばを広げ、まっすぐにして**野戸呂新道**とよばれるようになりました。

多摩川によって多くの恵みを受けた反面、その災いをも直接にこうむってきた菅野戸呂には、いたるところに水との闘いの歴史が刻まれています。

【菅馬場一丁目～四丁目】

小田急線読売ランド駅前の北側の丘陵の頂から、新三沢川と二ヶ領用水が交差する平地までの地域です。

菅馬場も、江戸時代は菅村に属し、稲田村、稲田町を経て多摩区菅となり、昭和六十年の住居表示で菅馬場一丁目～四丁目となりました。

菅馬場一丁目と二丁目の大部分は、以前の字**馬場耕地**、二丁目の南西部から三・四丁目の南菅中学校、菅高校にかけての西側は字**北浦谷**、その他の三・四丁目の大部分は字**馬場谷**です。

馬場の由来は、その昔、寺尾若狭守の居城の近くに馬場があったからとも、あるいは代官屋敷の馬場があったからともいわれていますが、定かではありません。

一丁目と中野島の境を**下島**といい、生田の**土漕**との境を**沖川原**といいます。「沖」とは奥まったところという意味です。

二丁目の東菅小学校の脇から三沢川の水を引いて、一丁目の**中河原橋**のかけて流れる堀を**塚戸堀**といいます。そして塚戸堀をはさんだ一帯を**塚戸**といいます。塚戸とは塚のある場所という意味で、昔ここに経塚があったそうです(『菅の地名』)。また、ここは昔、田を埋めて土を積み上げたところで、高い場所だったともいわれています。

塚戸の東、中野島との境の三沢川橋周辺は**オンマワシ**と呼ばれています。これは塚戸とともに『風土記稿』に記されている地名ですが、現在は両方とも旧菅地区の中に二つずつ残っています。塚戸は前述の場所以外に、菅四丁目の南天宿のあたりにもあり、オンマワシも菅仙谷一丁目の寿福寺のあたりから細山へぬける細い道にもう一つあります。

オンマワシとは、お馬廻しの意味で、菅の支配者が領内を馬で巡検したおりに、村の境界のところで馬の首を巡らした場所(『菅の地名』)だとも、また土地の人の中にはオンマワシをオンマシと呼ぶ人もおり、オンマシとは水が満ちているところだともいわれていますが、両方の説とも定かではありません。麻生区の下麻生にも**恩廻**という地名があって、洪水に見舞われた時、川の流れを向う側へと必死に追い回したところからついたといわれています。

このあたりは、三沢川、新三沢川、二ヶ領用水、それに塚戸堀などがあって、かつては水に恵まれた水田地帯でしたが、今はこのあたりも徐々に住宅化が進み、水田もわずかばかりになってしまいました。

二丁目の生田浄水場付近は**砂田**と呼ばれています。ここは馬場谷、北浦谷を流れる谷川が上流から山の砂を運び、それが田に堆積したところで、今ではそのほとんどの田が水はけの良い土質を好む果樹園に変わっています。

【菅北浦一丁目～五丁目】

菅北浦は南武線稲田堤駅の南の新三沢川を越えたところから三沢川までの間の平地と、三沢川以南の丘陵の地域です。

菅北浦も江戸時代は菅村に属し、稲田村、稲田町を経て、多摩区菅となり、昭和六十年の住居表示で菅北浦となりました。

一丁目は以前の字**馬場耕地**、二・三丁目は字**北浦耕地**、四・五丁目は丘陵に入りこんだ字**北浦谷**、四丁目の西側は字**小谷**にあたります。

北浦という地名の由来は、多摩丘陵の北側の裏にあたるからとか、あるいは北を向いた浦だったからといわれています。「浦」というのは、川や海浜の浦以外に、内陸でも平地の奥や端にみられる地名で、湾曲して入り込んだ所という意味です。

一丁目と二丁目との境を東西に走る府中県道の旧道は、新三沢橋のたもとから南に折れ、ほぼ五〇メートル進んで東に曲がり、やがて新道にぶつかります。この新三沢橋から南にのびる道の両側を**出店**といいます。南武線が開通する以前は、毎年十二月二十八日に、ここに歳の市がたちました。市の品物は農具が主で、正月を迎えるためのザッキ(木製円形の皿)、御神酒口などの神具、名物のイマサカ(饅頭的一种)などの出店がにぎやかに立ち並んだものです。しかし、その後の府中県道の改修や三沢川の改修などで次第に店は少なくなり、ついに昭和五十年頃に店は姿を消してしまいました。

この出店に近い県道沿いに**街道村**と呼ばれるところがありました。ここは駐在所や火の見やぐらがあったところで、明治から昭和初期まで菅の中心的位置にあり、にぎわったところでしたが、現在は**大通り**と呼ばれています。

三丁目の三沢川にかかる**大谷橋**の近くに長松寺があり、そのまわりの集落が**延命**です。『風土記稿』には、建久八年(一一九七)、源頼朝が信州の善光寺にお参りした途中、菅の薬師に立ち寄り寺領を寄付したおり、将軍の命令を伝えるための仮の役所を建て、そこを演命場といったとあります。そして長松寺は北浦耕地の延命にあたることから、山号を延命山といっています。

大谷橋から川沿いに東へ行くと、**子の神橋**があり、その南の丘陵斜面に下菅の氏神である子ノ神社があります。

ここでは毎年一月に「オマト」が行われています。オマトとは流鏝馬のことで、『風土記稿』には「毎年正月九日神前にて猿楽の男舞及賭的あり」と記され、現在でも菅全体の氏子会で主催されています。

的は、あしを網代に編んで和紙を貼り、裏に「鬼」の字が書いてあります。弓は桃の木で作ったものを二張、矢は矢竹で十数本作ります。祭式は、まず神前に弓矢を供え、新年祭りの祝詞をあげ、それから神主と氏子の主だった一人が的を射て、そのあとに希望者が射るというものです。

神社の下の子の神橋を渡ったところを**宮下**といい、ここから東へ行くと、生田へぬける、以前の字**馬場谷**があります。この谷の入口に丘陵を南西に入りこみ、菅高校や南菅中学校の南側まで伸びる支谷があり、これを**地藏谷**といっています。

伝承によると、昔、地藏谷の代官屋敷に六体の地藏がまつられていましたが、宝暦年間に大地震があり、山崩れがおきて、地藏は屋敷もろとも土砂に埋まってしまいました。ところが、しばらくして村内に子供の疫病が流行し、これは六地藏を埋もれたままにしておいた祟りだという噂が広まり、村人はさっそく地藏を掘り出して、府中街道沿いに、六体を別々のところにまつて供養するようになったといっています。

これらの地藏には、いずれも「武州橋樹郡菅村衆中 宝永四年(一七〇七)」と刻んであります。現在でも稲城市との境の**樋口**と、生田に近い菅馬場の**塚戸**との間の府中街道沿いに六体の地藏が点々と立ち、「菅の六地藏」と呼ばれています。

【菅仙谷一丁目～四丁目】

京王相模原線京王よみうりランド駅と小田急線読売ランド前駅とに南北をはさまれた丘陵地帯です。丘陵の頂にはよみうりランドとふじのき台の住宅地があり、ここから北東、三沢川に向かって支谷がのびています。

菅仙谷も江戸時代は菅村に属し、稲田村、稲田町を経て多摩区菅となり、昭和六十年に住居表示が実施されて、菅仙谷となりました。

菅仙谷は一丁目と四丁目の北半分が字**仙谷谷**、三丁目の北半分と四丁目の南半分と二丁目とが字**小谷**、三丁目の南半分が字**北浦谷**です。

一丁目のよみうりランドのふもとに寿福寺があります。『風土記稿』には、寿福寺は宇仙谷にあり、仙谷郷ともいう、とあります。寿福寺は奈良時代に創建され、山号を仙谷山といい、鎌倉の建長寺の末寺で、寺領七石を受けていました。寺伝によれば、仙人道鏡がこの山にこもり、練行修身をつんだので、仙谷と呼ばれたとあります。

一丁目の北側、平地を見おろす丘に、稲毛三郎重成の子、小沢小太郎の居城だった**小沢城跡**があります。この丘は**小沢峰**あるいは**天神山**と呼ばれ、城は天神山と尾根続きの**浅間山**、**富士塚**の三つの峰にまたがって築かれていました。標高約八〇メートルのこの丘は、北側が急崖となり、その下に三沢川が流れ、南西部には段々畑状の平地や空堀り、井戸などが見られます。空堀りとは、外敵を防ぐために地面を掘って作った堀のことですが、山のために水が引けないので、空になっている堀のことです。

また城跡の南の麓には、**シロ**、**オキノカジヤ**、**コナヤ**、**タカノス**などの屋号を有する家があります。タカノスとは、昔、殿様が鷹狩りに来たときに泊まった家だと伝えられています。

小沢城は、戦国時代に幾多の合戦の舞台となりました。まず大永四年(一五二四)、小田原北条氏が江戸城を落とした後、上州の上杉憲寛と川越城主・上杉朝興は、南武蔵の勢力を回復しようと、享祿三年(一五三〇)、北条方の遠山四郎左衛門が陣どる小沢城を攻め落としました。これを皮切りに、上杉朝興と北条氏康は、小沢城を舞台に取ったり取られたりの戦いを繰り広げました。これが小沢城の戦いです。そしてついに上杉氏は敗れ、このあたりも小田原北条氏の勢力下になりました。

『風土記稿』には、城跡の南側から流れる小沢川を土地の人は**白清水**と呼ぶ、と記しています。この川は湧き水で、飲用にも洗い物にも使ったきれいな水だったそうですが、現在は生活水としては使われていません。

三丁目の丘陵に入りこんだ谷は、**小谷**といい、菅でもっとも小さい谷です。小谷の谷の入口の三沢川沿いの薬師寺には薬師堂があります。

これはかつて稲毛三郎重成が亡き妻のために建てた極楽寺にあった堂宇ですが、極楽寺は戦乱で焼失してしまい、そのときに幸いにも焼け残ったものです。

薬師堂の土俵では、毎年九月十二日に市の重要習俗技芸に指定されている「菅薬師獅子舞」が行われます。この獅子舞は、大変古い伝統を持つもので、江戸時代には一時中断していましたが、明和八年(一七七―)に菅村の百姓一同が、虫風祭として再び獅子舞を舞いたいという嘆願書を役人にさしだしたことから復活し、現在まで受け継がれているものです。昭和三十年頃までは、緑におおわれた多摩丘陵に幾筋もの谷戸が入り込み、そこに段々畑状の水田の棚田が連なる山村風景をみせていた菅仙谷も、よみうりランドや公団の住宅の造成のために山は切り崩され、今では一丁目と三沢川沿いの丘陵の端に山林を残すだけとなりました。

【菅城下】

多摩区の東端にあつて稲城市に接する、三沢川以北の平地です。

菅城下も江戸時代は菅村に属し、稲田村、稲田町を経て多摩区菅となり、昭和五十九年の住居表示で菅城下となりました。

城下というには、三沢川を越えた菅仙谷の小沢峰にかつて**小沢城**があり、その真下にあたることに由来するといわれています。小沢城は中世末期には廃城となっており、城下の地名もこの頃には使われていたと考えられ、それから現在まで使われている地名です。

矢野口の天神山の穴沢天神社の下から天神下堀の周辺にかけてを**天神下**といいます。

『風土記稿』には、**芝間**という字が記されていますが、江戸時代には菅城下もこの芝間に含まれていました。芝間は各地にみられる地名で、芝を刈る土地のことだと思われそうですが、江戸時代には萱畑などと同様、芝地は肥飼料に用いるための芝を刈る重要な入会地でした。また「芝間を掘る」とは、新田を開墾するという意味であったともいわれています。今でも菅五・六丁目あたりは芝間とよばれており、市営の芝間住宅にもその地名が用いられています。

昭和三十五年頃までは、一面の水田であったこのあたりも、昭和三十年に芝間耕地に市営住宅が建てられてから次第に住宅地化し、昭和四十九年に京王相模原線が開通して以来、急速に開発が進みましたが、ところどころにはまだ水田や果樹園が見られ、かつての水田地帯をしのばせています。

【寺尾台一・二丁目】

小田急線生田駅と読売ランド前駅との間の線路の北側の丘陵上に位置している町です。寺尾台一・二丁目は、江戸時代の上菅生村と菅村の境にあたり、それぞれの村に含まれていましたが、昭和四十五年に生田の一部と菅の一部を合わせて区画整理が行われ新しくできた町です。

この町の台地面は、かつて寺尾若狭守の城跡といわれていたところで、この辺に瓦塚や銭亀塚などという塚があって、廃跡の瓦や銭、壁瓦などを埋めた所といわれ、瓦や銭が埋まっている塚がありました。

銭亀塚は寺尾台の南の**ハギワラ**にあり。昔から人は気味悪がって誰も入らなかったそうで、何か埋まっているという噂でしたが、公団住宅の造成の際には何も出てきませんでした。しかし、昔から多くの瓦が出土していた瓦塚は、昭和二十八年に発掘され、八角形の土壇の跡がはっきり現われ、そのまわりに布目瓦がうず高く散らばっていました。

そして調査の結果、奈良時代末期から平安時代初期にかけて造られた寺のお堂の跡とわかりました。その後、東京都埋蔵文化財センターによって稲城市大丸の窯址の発掘調査が行われ、武蔵国分寺出土の瓦などとともに瓦塚出土の瓦とまったく同じ剣菱文軒丸瓦や軒平瓦も出土したことから、寺尾台の八角堂の瓦も、この窯で焼かれたことがわかりました。さらに窯址のより詳細な調査の結果、寺尾台の八角堂の創建は武蔵国分寺造営以前の可能性が強くなってきたということです。

この地は、すでに平安時代の初め頃に仏教が浸透し、早くから開けていたことがうかがえます。

現在では整理された区画に集合住宅などが整然と立ち並んでいます。

布田(ふだ)地区

布田は、調布市の布田村の飛地であったが、明治 45 年に東京府と神奈川県の間を多摩川としたため、**稲田村上布田・下布田**となった。調布には、布田天神社があり、甲州街道の宿場町として栄えた。布田の地名は、中世には「補陀」とあり、宗教的意味合いもあるかも知れない。布の字を当てていることから、多摩川での布を晒した地名とも言われている。その飛地として、上布田・下布田という狭い地域が川崎市域にある。平成 2 年に住居表示が行われ、多摩区布田となった。中野島の北西に位置し、行政的には中野島とほぼ一体とした関係にある。駅北には、鬼頭製作所があった。内陸型の生産工場であったが、昭和 58 年に移転し、現在は中高層住宅が建ち、現在の地番は中野島の地番に編入された。

現在の布田地区の面積は、布田 27ha

布田の小名 向河原

布田の字 新田、下布田堤外、布田南部

通称地名 腰上り畑、三塚、布田河原、筏道、上の渡し場道、古入橋、上布田橋、廻し川、お池、

布田 上布田、下布田、菅字馬場耕地

【上布田】

この地域は、東を下布田、西を菅稲田堤にはさまれた南武線の北側に位置し、北は多摩川を隔てて東京都調布市に接しています。町域の半分が多摩川の河川敷と堤防によって占められている小さな町です。

布田という地名は古く、『風土記稿』によると、「和名抄」には「**爾布多**」とあり、のちに「布多」さらに、「布田」と改められたと記されています。

しかし、もっと古い時代に編まれた『万葉集』に、

多摩川にさらす手作りさらさらに 何ぞこの児のここだ愛しき

と詠われているように、すでに奈良時代から、このあたりでは麻布の材料の苧麻が植えられ、多摩川で布がさらされていたようです。布田という地名も、麻布が多く作られたことからつけられたものかもしれません。

この他にも、多摩川沿岸には、**調布**をはじめ**染地**(調布市)、**染屋**(府中市)、**砧**(世田谷区)など、布づくりに関連したと思われる地名がいくつも残っています。

下って近世になると、慶長七年(一六〇二)に**甲州街道**の宿として上布田宿、下布田宿、上石原宿、下石原宿、国領宿の布田五宿ができ、当時、現在の多摩区上布田は多摩郡上布田宿に属していました。

『風土記稿』には「玉川を隔て南の方稲毛用水路の傍に飛地あり」「小名 向河原」と記されており、すでに江戸後期には、上布田は川を隔てた飛地となって**向河原**と呼ばれていました。

その後、明治四十五年(1912)に府県境界変更が行なわれ、東京府北多摩郡調布町から橘樹郡稲田村に編入されました。そして昭和七年(1932)の町制施行で稲田村は稲田町となり、さらに昭和十三年(1938)に稲田町は廃止され、川崎市に編入されました。その後、昭和四十七年(1972)に区制が施行され、多摩区上布田となり、現在に至っています。

上布田の全域は、『風土記稿』に記されている小名の向河原にあたりますが、現在では、**フダッカーラ**とか**カワラ**と呼ばれており、上布田のみならず下布田もそう呼ばれています。稲田堤との境の多摩川沿いには二ヶ領用水の取水口があり、そのあたりは**ロツポンイリ**と呼ばれています。取水口にある手動の水門調整器のハンドルが六本あることからこの名がつけられたといえます。

かつては二ヶ領用水に、板の上に土を乗せた六尺幅の橋がかかっていた。これは**古入橋**と呼ばれ、菅と上布田とを結ぶ唯一の橋で、中野島あたりの人々にも利用された大事な橋でした。しかし昭和三十七年(1962)に古入橋はこわれてしまい、そのかわりとして、二ヶ領用水と新三沢川とが交差するところに新たに**上布田橋**がかけられました。

かつてはこの上布田橋あたりから、**筏道**に沿って中野島へ流れる悪水路があり、**マウシガワ**とか**マーシッカー**と呼ばれていました。これは二ヶ領用水の余水を流したもので、かつての多摩川の旧流路でしたが、現在ではすっかり姿を消してしまい、市営上布田住宅を中心とした住宅地となっています。

【下布田】

東と南を中野島に囲まれ、西は上布田に、北は多摩川を隔てて調布市に接している地域です。

下布田の地名も、上布田と同じく、『万葉集』に詠われた布の産地であったことに由来するともいわれています。

江戸時代には、下布田は上布田、上石原、下石原、国領とともに甲州街道の布田五宿となり、この地は『風土記稿』には川向こうの飛地として記されています。

その後、明治四十五年(1912)の府県境界変更によって北多摩郡調布町から橘樹郡稲田村に編入され、稲田町をへて、昭和十三年(1938)に川崎市となりました。そして昭和四十七年(1972)の区制施行により、多摩区下布田となりました。

下布田も上布田と同じように、かつてはその全域は**フダッカーラ**とか**カワラ**と呼ばれていました。明治になるまでは、ここには川向こうの布田から移ってきた家がたった一軒あっただけで、講中や冠婚葬祭などの付き合いもすべて川向こうの調布まで舟で往来して行い、近隣との付き合いはなかったといえます。

その後、明治になって人々が移り住んでくるようになると、しだいに**菅**との交流が行われるようになりました。しかし、昭和に入ると、二ヶ領用水に隔てられた菅よりも、地続きの**中野島**との交流の方が盛んになり、今では町内会の組織や稲荷社の氏子なども中野島と一緒にいるほどになっています。

中野島との境には南北に道が走り、かつては**上の渡し場道**と呼ばれていました。この道は調布方面と生田方面とを結ぶ多摩川の渡し場へ通ずる道で、明治になってから通行量が増

え、それまでの六尺の道幅を九尺に広げました。その後、昭和二十六年頃に、それまで曲がりくねっていた道は、現在のような直線の道に改修されました。

以前は、上の渡し場のあたりに葦が生い茂った池があり、**オイケ**と呼ばれていました。この池は旧堤防の堤外にあり、多摩川の水が増すと池も大きくなるというものでしたが、昭和になって砂利掘りが盛んに行われるようになると、多摩川の水位が下がり、池も干上り、ついになくなってしまいました。その跡は現在、多摩沿線道路沿いの建設省の住宅地となっています。

上布田集会所の南から東へ進み、下布田へぬけて上の渡し場道を横切り、中野島へと続く道は、かつて筏道と呼ばれていました。**筏道**は、多摩川の上流から筏を組んで川を下り、河口の**六郷**で筏を売った筏師達が竿をかついで上流へ歩いて帰る道でした。江戸時代から昭和初期まで続いた筏流しが盛んだった大正の頃には二間幅の道でしたが、その後しだいに衰えて、昭和三十年頃にはほとんど草でおおわれ、わずかに人が歩く部分だけが道となっていました。しかし、昭和三十年代になって住宅地化が進み、筏道も現在のような舗装道路となりました。

下布田を通る筏道の間あたりの道沿いに、かつて**コシアガリノハタケ**と呼ばれたところがありました。ここは人の腰の高さぐらいまでこんもり盛り上がった麦畑だったところから、そう呼ばれたといえます。

下布田は、戦後しばらくまでは一面に麦畑や桃園が広がる農村でしたが、昭和三十年代にはいと、川崎南部工業地帯のベットタウンとして急速に住宅地化が進み、現在では下布田小学校付近にわずかに果樹園や麦畑が残るだけとなってしまいました。

中野島(なかのしま)地区

中野島駅近くに小さなお堂がある。**是法庵**という。修験者の万蔵が切り拓いたところから**万蔵島**と呼ばれていた。後に、**中野島**と呼ばれるようになる。多摩川が南を流れ、川の中洲にあったので**中野島**となった。以前は多摩郡に属していたが、明治になって橘樹郡に属す。

駅北には、鬼頭製作所があった。内陸型の生産工場であったが、昭和 58 年に移転し、現在は中高層住宅が建ち、中野島地区の開発の先鞭をつけた。その後、多摩川沿いに市営住宅が建設され、人口が急激に増えた。

府中県道が拡張され、梨の直売所がなくなり、外食産業や大型店の進出が目立つ。まだ一部に水田や耕地が残っており、農業的色彩が見られる。

平成 2 年に住居表示が実施されたが、登戸境の字下河原に住居表示未実施地区がある。

現在の中野島地区の面積は、中野島 4ha、中野島 1～6 丁目 121ha

中野島の小名 小沢、川端、大明神、川原

中野島の字 南耕地、砂川附、北島、樋口、北河原、下河原、中河原、石河原

通称地名 大道、大堀、中村、三谷、新田、麦畑、五畝割、三境、馬捨場、川原、廻し川、南堀、北堀、新田堀、内堀、渡し場道、筏道、石土手

中野島 1 丁目	樋口、南耕地、菅字馬場耕地
中野島 2 丁目	南耕地、砂川附、登戸字甲耕地
中野島 3 丁目	下河原、北河原、北島、砂川附、登戸字乙耕地
中野島 4 丁目	石河原、下河原、中河原
中野島 5 丁目	石河原、中河原、和泉西南河原
中野島 6 丁目	中河原、北河原、樋口、下布田字ヌノタ
中野島	石河原、下河原

【中野島】

二ヶ領用水とその支流の砂川とによって東、西、南をぐるりと囲まれ、北は多摩川に面した、水路に囲まれた町です。町域はすべて多摩川の流れによってできた沖積平野で、その中央を東西に南武線が横切っています。

中野島は、『風土記稿』に「島と云は玉川のきしへ出はりたる所にて、孤島のごとき所なればにや」と記されているように、以前は川中の島のような形であったところからついた地名といわれています。また『風土記稿』に「或は此辺を満蔵島ともよべり」と記されており、かつては村の開祖の名をとって、別名**満蔵島**とも呼ばれていました。

旧家に伝わる「満蔵島開発由来記」によると、中世末期、鎌倉あたりに住んでいた満蔵は、戦乱の世をさけて祈祷師となり、各地を流れ歩くうち、天正十七、八年の洪水で多摩川の中洲が大きくなったことを知り、そこに住みついて、中洲の島を開墾したといえます。当時、ここは多摩郡に属し、**中島新田**と呼ばれていましたが、十七世紀中頃には一村となり、**中野島村**と呼ばれました。

その後、中野島村は明治八年に多摩郡から橘樹郡に編入され、明治二十二年の市制・町村制で稲田村に編入され、昭和七年、稲田町となり、そして昭和四十七年の区制施行によって多摩区中野島となり、現在に至っています。

近世の新田開発によってできた中野島は、専農に頼れるほど豊かではなく、農閑期には副業に精を出したそうで、下駄屋、豆腐屋、たばこ屋、糸屋などの屋号が当時の様子を物語っています。また文化年間に和唐紙の紙漉きを始めたという唐紙屋という屋号の家もあり、明治の末まで商いを続けたといえます。その後、大正から昭和にかけて桃や梨の栽培が盛んになりました。

昭和三十年以前までの中野島は、東西に二本、南北に二本の生活道路が通るほかはすべて農道でした。東西に走る道のうち、多摩川よりの道は**筏道**と呼ばれ、多摩川の上流から下流へ木材を売りに川を下ってきた筏師たちが、上流の我家へと竿をかついで歩いて帰る道でした。筏流しは、江戸時代末期から昭和初期まで続き、毎年、初夏の頃や秋の彼岸の頃には、何千枚もの筏が多摩川を下っていきました。

東西に走るもう一本の道は、稲田五村(菅、中野島、登戸、宿河原、堰)を通る**稲田本道**で、中野島では**大道**と呼ばれていました。この大道沿いには鎮守の稲荷社や観音寺などがあり、中野島のメインストリートでした。また大道の西の端には、かつて大丸用水を導いていた木樋が二ヶ領用水の上を渡っていたことから**樋口**と呼ばれていました。

大道沿いに流れる用水は**大堀**と呼ばれ、かつての字**南耕地**と**砂川附**の田を潤していました。しかし、大堀は大丸用水の末端にあたり、水量が少なく、また田は砂質で水はけがよすぎるために、良質の米が取れるものの、常に水不足に悩まされたといえます。

『風土記稿』に「水旱ともに患あり」と記されているように、中野島は水不足の一方で、水害もくり返され、とくに菅との境の堤防が切れた明治四十三年の被害は甚大で、村の東の**三谷**から登戸にかけてはいつまでも水が引かず、舟で往来したという話が、ついこの間のことのように鮮明に語りつがれています。また毎年くり返される洪水のために、三谷あたりの家では、軒下に舟をつるしていたともいいます。古い家々では、水防のために、申し合わせたように、水が入ってくる北西方向に竹藪をもっています。

南北に走る道は、二ヶ領用水にかかる**橋本橋**で二股にわかれ、西に分かれる道が現在の中野島駅前を通り、多摩川へ通じ、**上の渡し場道**と呼ばれていました。そして東へ分かれる道は、観音寺の前を通り、三谷の踏切を越えて多摩川へ通じ、**下の渡し場道**と呼ばれ、二本とも渡し舟で調布方面と生田方面とを結ぶ重要な往来でした。

渡し場は、洪水が起こるたびに場所が移動したといえます。渡しは、おもに調布の布田天神の縁日や野菜の出荷、下肥の運搬などに利用されていましたが、昭和十年頃に登戸に**多摩水道橋**がかかると、利用者は激減し、まもなく廃止されてしまいました。

大道と上の渡し場道が交わるあたりは**ヤシキ**とか**クラアト**などと呼ばれ、かつては**郷倉屋敷**や**高札場**があったところです。またヤシキから大道沿いの観音寺にかけては、昔、村の中心だったところから**中村**と呼ばれています。

新田堀の北東から多摩川にかけての地域は、かつての字**石河原**、**下河原**、**中河原**にあたります。これらの地域は、以前は霞土手の堤外地であったところから、総称して**カワラ**と呼ばれていました。カワラは明治の頃までは湿地で、**マワシガワ**という多摩川の小流が蛇行しながら登戸境まで流れ込み、あたりは一面の葦原と雑木林で、わずかな畑のほかは荒地で、人も住めなかったところでした。そして登戸寄りの堤防に沿ったあたりには、人々がたきぎを採るための雑木の平地林があり、**タキギバ**とか**ヤマ**と呼ばれていました。関東一円では、平地であっても林になっているところを広くヤマと呼んでいます。しかし荒地のカワラにも、明治末期から桑が植えられるようになり、やがて桃が作られる頃には少しずつ人が住むようになりました。

大正から昭和初期にかけて、中野島は桃や梨の果樹栽培の最盛期を迎えます。そして昭和四年、南武線が開通すると、江戸時代からほとんど人が増えなかった静かな農村にも、近代化の波が寄せてきました。昭和十年代には鬼頭製作所が建ち、それまでの下の渡し場道筋の三谷にあった駅は現在地に移されました。その後、昭和三十年代に入ると、川崎市のベットタウンとして急速に人家がふえ、多摩川沿いには市営住宅や市営団地が建ち並び、南武線沿いに小学校や中学校などが開校し、またたく間に変貌をとげました。しかし、南武線以南にはまだ水田が残り、そこかしこに梨畑がみられ、かつての田園風景をしのばせています。

和泉(いずみ)地区

和泉は、登戸と中野島に挟まれた小さな地域。もともとは現在の**狛江市**の和泉が多摩川の流路によって分断された飛地である。明治45年に府県境が多摩川を境に変更になったため神奈川県となった。その後も名称の変更もなく現在に至っている。

多摩沿線道路と登戸新町中野島線の道路に挟まれ、地域のほとんどが工場や関連施設で占められている。今年度はじめて和泉に住民登録があった。

現在の和泉地区の面積は、和泉 9ha

和泉の小名 ——

和泉の字 西南河原

通称地名 薪場、草競馬

【和泉】

多摩川に北面し、東に登戸、西に中野島に挟まれた、河川敷を除くと東西約四〇〇メートル、南北一五〇メートルたらずの小さな町です。町域の三分の二は多摩川の河川敷と堤防によって占められ、区内で唯一の世帯数、人口ともにゼロの町でしたが、平成元年に市の住宅供給公社の分譲住宅建設が始まり、平成二年の春頃からは人の住む町になりました。和泉は、江戸時代、現在の東京都狛江市の元和泉、中和泉、東和泉とともに多摩郡和泉村に属していました。

地名の由来は、村の開発にあたり、現在の狛江市元和泉一丁目にある泉龍寺境内の清水を水田の灌漑に利用したためにつけられたといい、その当時は「出水」という字をあてていたことが『風土記稿』に記されています。「イスミ」という地名は全国各地に見られ、神奈川県内だけに限っても数十件ほど見られます。

和泉はかつて多摩川の北側にありましたが、近世初期に多摩川の流路が北に移ったために川の南側となり、多摩郡和泉村の飛地となってしまいました。しかし、明治四十五年の府県境界変更で、この飛地は神奈川県橋樹郡稲田村に編入されました。その後、昭和七年に稲田町となり、同十三年に川崎市に編入され、四十七年の区制施行に伴い、川崎市多摩区和泉となりました。

和泉の全域はかつての字**西南河原**にあたります。おそらく、ここが川向こうの旧和泉村の西南方向にあたるころからつけられたものでしょう。

河原という地名が示すように、ここは昭和八年に堤防ができるまでは、多摩川がすこし氾濫しただけで一面水びたしになるほどの湿地で、人家も耕地もない、松や雑木の平地林でした。そこで、中野島や登戸の人々はここを**薪場**と呼び、日常の薪を採取するための入会地となっていました。

また昭和初年頃までは、ここで草競馬が行われていたところから、**草競馬**とか**競馬場**などとも呼ばれていました。その後、昭和十六年に菅原工業が建ち、現在は堤内の大部分が工場敷地に、堤外は河川敷の野球場や運動用地になっています。

和泉は、その面積があまりにも小さいために、この地名を語るものはほとんど残っていませんが、和泉の南の登戸新町と登戸の境に「和泉」というバス停があります。

登戸(のぼりと)地区

登戸は、北に多摩川が流れ、町の中央を旧津久井道とバイパスの県道世田谷町田線が通り、小田急線の登戸駅と向ヶ丘遊園駅がある、北部の中心都市として位置づく。

今から 500 年位前は多摩川が南側の多摩丘陵の岸、今の二ヶ領用水の辺りを流れていた。地名の由来としては、多摩川から北岸へ登る所と考えられる。なぜなら、現在の**狛江市**の**駒井登戸**の名がある。

多摩川が北に上がり、登戸の開発が行われ、街道の整備とともに交易の重要な役割を持つ村として発展していった。

昭和 24 年に登戸から分離して、登戸新町ができた。

近年になって、町の再整備の計画が出たが、町内が旧街道や水路などが複雑に入り込み、他地域の再開発から遅れをとってしまった。現在新しい区割りによる整備が急ピッチで行われている。極端な言い方をすれば、旧町割りはまったく無視され、部分的に飛び石的に保存されることになりそうである。

その再開発が終了してから、新しい地番が打たれることになる。

現在の登戸地区の面積は、登戸 167ha、登戸新町 23ha

登戸の小名 大島、柳町、中田耕地、内河原新田、東耕地、上台、中村

登戸の字 甲耕地、乙耕地、丙耕地、丁耕地、戊耕地、己耕地、庚耕地、辛耕地、壬耕地、癸耕地

通称地名 旧堤、川原、下河原、石屋河岸、東、中店、田中、橋場、富士塚、砂川、一本塚、紺屋前堰、越場

登戸 甲耕地、乙耕地、丙耕地、丁耕地、戊耕地、己耕地、庚耕地、辛耕地

登戸新町 壬耕地、癸耕地

【登戸】

多摩区のほぼ中央の北に位置し、町のなかほどを小田急線が南北に貫く、二ヶ領用水以北の平地です。

永禄年間(一五五八～七〇)に記された『小田原衆所領役帳』には「多波川北、駒井登戸 太田新六郎知行」と記載されており、当時は多摩川の北岸になっていたことがわかります。しかし、江戸時代初期にはすでに多摩郡府中領から橋樹郡稲毛領登戸村になっており、その間の洪水で多摩川が北に移り、川の北岸から南岸へ移ったものと考えられます。

登戸の地名については諸説ありますが、多摩丘陵への「のぼり口」にあたることに由来するとする説が有力で、「戸」はところの意味です。

登戸村は、明治六年の地租改正によって地番がつけられた際、それ以前からあった地字に関係なく、**甲耕地～癸耕地**という字名がつけられました。しかし、人々の生活の中ではほとんど根ふかず、現在では登記簿だけでのみ使用される地名となっています。

その後、明治二十二年の市制・町村制で菅、中野島、登戸、宿河原、堰の五村が合併して稲田村ができ、ここは橘樹郡稲田村大字登戸となりました。稲田村は、昭和七年、稲田町となり、昭和十三年、川崎市に編入されて、橘樹郡は廃止されました。そして昭和四十七年の区制施行により川崎市多摩区登戸となり、現在に至っています。

登戸は、古くから大きく分けて**東、中、上**の三つの地域に分かれていました。東は『風土記稿』に**東耕地**と記載されているところで、昔はかなり広範囲だったと思われませんが、現在では、登戸駅近くの**東通り**周辺の地域となっています。

登戸を通る古道の**津久井道**は、東京方面から現在の世田谷町田線に沿って通り、多摩川を「**登戸の渡し**」でわたり、**下河原**の踏切あたりから東通りへ入り、**中店、田中、榎戸**を経て生田へぬけていました。この道は、江戸と相模とを結ぶ大切な道で、別名を**江戸道**ともいい、渡し場近くの**石屋河岸**は、荷を満載した船が出入りする物資の重要な集散地となっていました。

街道筋には、旅籠や筏宿のほかにも、居酒屋、煮売り屋、荒物屋、下駄屋などの旅人相手の店が立ち並び、たいそうにぎわっていました。当時、宿屋として有名であった東通りの柏屋や榎戸の紀伊国屋は、現在でも料理屋としてつづいています。また、秋の万灯会にでぎわう**善立寺**も津久井道沿いにあります。

登戸は職人の町としても知られ、左官、かご屋、下駄屋、染物屋などさまざまの職人が集まり、稲田屋、大津屋などの問屋もありました。職人はすべて太子講に参加し、正月二十二日には**光明院**の太子堂で親睦をかねた総会を開き、その年の各職の手間賃をきめました。この大事な会合は、現在でも職人の人達の間で受け継がれています。

向ヶ丘遊園駅から宿河原境にかけての**富士塚、中田**の地域は、かつては東に含まれていましたが、いつ頃から東から分離し、今では南と呼ばれています。南の氏神は富士塚の**浅間社**で、文化年間、丸山講をはじめた伝左衛門が建てた浅間塚が、現在では富士塚と呼ばれています。

向ヶ丘遊園駅の南口の二ヶ領用水付近には、江戸末期から紙漉きを商う家が数軒ありました。これらの商家は、近代になって手漉きから機械漉きとなり、現在では工場となって操業を続けています。

中田、富士塚あたりは、以前はたんぼばかりで、用水が網の目のように流れていましたが、小田急線稲田登戸駅が向ヶ丘遊園と名を変えた昭和四十年頃から、東京、川崎のベッドタウンとして次々と宅地化が進み、水田は姿を消し、用水は生活排水と化しました。

登戸のほぼ中央に位置する光明院と稲荷社のあたりは**中村**と呼ばれ、その周辺を広く**中**といいます。ここは津久井道を中心とする集落とはちがいで、農村部の集落の中心となっていました。中村というのは村の中心に多くみられる地名で、ここの稲荷社は**東、中、上**のそれぞれの氏神とされている村の総鎮守です。稲荷社は、かつては多摩川の堤外地にあったそうですが、川荒れをさけて中村に移されたといえます。また光明院の隣には、幕末に伊藤六郎兵衛が富士講を母体として作った丸山教の本庁があります。

中にはこのほかにも**大島、川原、田中、榎戸、中店、栄町**などの集落があります。中村の南にあたる大島は、江戸時代、長念寺境内にあった弥周稻荷を集落内に移して、大島の氏神にしました。しかし、明治初めに中村の稻荷社に合祀されてしまいました。

栄町は小田急線が開通した昭和の初めに新しくできた商店街で、現在では登戸では一番の目抜き通りとなっています。中から中野島境にかけてを上または台和といい、そのなかに**上ノ台、台南、籠堰、向**という集落があります。

かつては**中野島**境を二ヶ領用水の支流である**砂川**が流れ、**スンガー**とか**スガバタ**(砂川端)とも呼ばれていました。この砂川は、中野島の**大堀**から流れてくる**大丸用水**と合流して、登戸では一番大きな用水路となっています。上の須伝のほとんどは、砂川が二ヶ領用水から分岐するところにある**一本塚**と、その少し下流にある**紺屋前堰**という二つの堰から引かれる用水によってまかなわれています。

上ノ台には古い文化財を持つ長念寺があり、かつて近くに長い池があったことにちなむ山号を長池山といいます。

台南には「コシッパ」という屋号の家がありますが、二ヶ領用水を多摩川本流が流れていた昔、生田の**根岸、山崎**から渡し舟がこのあたりへ着いたという伝承が残っていることから、あるいはコシッパという屋号も、浅瀬を歩いて渡ったりしたことになむものかもしれません。

昭和三十年代までは一面の水田であったこのあたりも、昭和四十年頃を境に宅地化が進みましたが、現在でも、毎年、小正月(一月十五日)のセエノカミ(ドンド焼き)の行事が受け継がれており、宅地に囲まれた水田の中から、幾時代を経ても変わらぬ煙が空にたなびいています。

【登戸新町】

登戸の多摩川寄り、南武線の北側にあたる比較的新しい町です。

江戸時代は多摩川の流れに絶えずさらされた堤外地で、明治六年、登戸村に甲耕地～癸耕地までの字名がつけられたときの**壬耕地**と**癸耕地**にあたります。その後、登戸村の一部として、稲田村から稲田町を経て昭和十三年川崎市に編入されましたが、昭和二十四年川崎市大字登戸から分離し、登戸新町となりました。

旧堤防は江戸時代の霞土手で、登戸村の人達は明治以前からこの堤外地を割地して桑などの作物を作っていました。霞土手とは、現在の堤防のように延々とつづくものでなく自村の村域分だけに築かれた堤防で、そのため隣村の堤防とはつながっておらず、空から見下ろすとたなびくかすみのように、たがい違いになっていたためについた名前です。

堤外の畑は常に洪水に悩まされたところで、大水が出るたびに、ある時は土を流水に流されて嘆き、またある時は肥沃な土の恵みに喜び、という具合でした。古老の話によると、旧堤防のあたりは**フルカワ**と呼ばれ、洪水のおりには川のように水が流れていたといえます。この堤外地は**カワラ**とか、その地割りの仕方から**戸数ワリ**と呼ばれ、明治期になると、作物はしだいに桑から桃へと切り変えられてゆき、大正から昭和初期にかけては、多摩川

の桃として東京方面で人気を博しました。しかし、昭和十年代になると、軍国主義下の主食増産の国策にそって、果物から芋、栗などに変えさせられてゆきました。

西隣りの和泉との境の堤外地は「**ヒョーゴッチマ**」(兵庫島)と呼ばれ、その付近から、砂利取りの盛んな大正の頃、数枚の板碑が出土したといえます。あるいは、ここに近世以前の古い集落や墓があったのかもしれませんが。江戸時代にはこのヒョーゴッチマに、登戸の草分けともいふべき吉沢兵庫が住みつき、稲荷社を勧請しましたが、のちに川荒れをさけて**中村**に鎮守もろとも移住したと伝えられています。

このあたりでは、大正から昭和初期にかけて、盛んに競馬が催されました。その競馬は、農耕馬が集まって競う草競馬から、本格的な競馬馬が来て競うものまで行われ、トラックの外には観覧席まで設けられていたそうです。競馬場の近くには、競馬馬の馬つなぎ場もありましたが、昭和初期に競馬がとりやめになると、その後、テニスコートとなり、その留守番として住み込んだ人が登戸新町の住人第一号となりました。

昭和十二年頃、登戸に区画整理組合ができ、この堤外地にも住宅化の構想が起こり、旧堤防の土を崩して新堤防に盛り上げ、町づくりが進められました。これ以後、登戸地内の分家、新家などが少しずつ住みはじめ、終戦後の昭和二十四年、登戸から分離して「登戸新町」が生まれました。

昭和三十年後半、**中野島**にカリタス学園が開校すると、旧堤防はバス道路として整備され、この頃から急速に住宅も増え始めました。そして昭和四十七年、登戸全体の人口が急激にふくれ上がったため、町内会組織が改正された際、登戸新町は県道世田谷町田線より西を新町、東を多摩川の町会に分け、登戸町会に正式に組み入れられました。

江戸時代後期には、現在の南武線登戸駅に近い下河原踏切のあたりに、石屋が石材をあげた**石屋河岸**があり、**津久井道**を運ばれた江戸や相模からの物資を積み降ろす船でにぎわったといいますが、今では交通量の激しい道路となり、昔を偲ぶよすがもありません。

しかし、休日ともなると、新堤防上のサイクリング・ロードを走る人や、河川敷でさまざまなスポーツを楽しむ人、多摩川でボート遊びや釣りに興じる人が絶えない、市民の憩いの場所となっています。

宿河原(しゅくがわら)地区

宿河原は、古くは登戸同様、多摩川が村の南を流れており、最近まで**狛江市**の一部に宿河原の地名が残っていた。河原の名が付くように多摩川の河原を切り拓いてできた村である。宿についてはいろいろな説があるが、宿場であったことはなく。水が滞るところと解釈するのが一番適当ではないか。字に宿(宿之島)があるので、その河原という意味か。

二ヶ領用水の取水口があることで、現在は桜の名所として市民に親しまれている。いろいろな説があるが、二ヶ領用水の最初の取入口は宿河原と考えたい。それも、現在の取入口は江戸後期のことで、古絵図などから**八幡下堰樋**付近がその取入口であり、多摩川が大きく蛇行しており、現在も旧堤防が残っている。

宿河原の住居表示は昭和 62 年に実施された。

現在の宿河原地区の面積は、宿河原 1～7 丁目 201ha

宿河原の小名 中ノ島、桑原、西光田、下ゲ綱、四ツ谷、宿、字北村、字前田耕地

宿河原の字 一耕地～十耕地、十一耕地甲、十一耕地乙

通称地名 本町、北町、下河原、橋本、宿之島、新明町、下ゲ綱、仲町、船島、西町、東一丁目、東二丁目、東三丁目、多摩新町、柘の口、堰の長池、旧堤防、桑の木原、八幡下塚樋

宿河原 1 丁目 七耕地、八耕地、拾壹耕地、登戸字辛耕地。船島、河原の島

宿河原 2 丁目 壹耕地、弐耕地、参耕地、七耕地、八耕地、登戸字庚耕地。下河原、橋本、西光田、前田

宿河原 3 丁目 弐耕地、参耕地、四耕地、九耕地。仲町、北村、柘の口、桑の木原

宿河原 4 丁目 九耕地、拾壹耕地

宿河原 5 丁目 九耕地、拾耕地、拾壹耕地

宿河原 6 丁目 四耕地、五耕地、六耕地、九耕地、堰字西耕地。宿之島、四ツ谷、下ゲ綱

宿河原 7 丁目 拾耕地、拾壹耕地

【宿河原一丁目～七丁目】

宿河原は多摩川沿いの沖積地で、東は堰に、南はほぼ都市計画道路鹿島田菅線を境に長尾に、西は登戸に接しています。北には多摩川が流れ、対岸は狛江市です。

現在の宿河原は江戸時代は宿河原村で、文献上の初出は『小田原衆所領役帳』に見られません。これによると、宿河原は太田新六郎の知行地で、

弐貫七百文	多波川北	駒井本郷
拾弐貫五百文	同	駒井登戸
拾弐貫五百文	江戸	駒井宿河原
		飯島分

と記録されています。ここにある**駒井**という地名は現在の狛江市にあることから、宿河原は当時、多摩川の北側になっていたことがわかりますが、近世初期に多摩川が北に流路を変えたために、駒井から離れて現在のような川の南側に移ったといわれています。

『武蔵田園簿』によると宿河原は天領となっていますが、享保二年(一七一七)には村の半分が有章院殿の御霊屋料として増上寺領となりました。

その後、明治十一年に郡区町村編制法が施行されて橘樹郡宿河原村となり、明治二十二年には市制・町村制で稲田村宿河原、昭和七年に稲田町となりました。昭和十三年に川崎市に編入されて稲田町は廃止され、川崎市宿河原となりました。そして昭和四十七年の区制施行で多摩区宿河原となり、昭和六十二年の住居表示で宿河原一丁目～七丁目となりました。

宿河原には**船島、橋本、北村**(現在の**北町**)、**本村**(現在の**本町**)、**宿ノ島、下綱**の六つの集落があり、土地の人々はこれらの集落のことを「ムラ」と呼んでいます。

船島は二ヶ領用水の取入口付近をいい、『風土記稿』に出てくる小名の**中ノ島**のことで、現在の宿河原一丁目の西半分にあたります。中ノ島は、かつて川の中洲だったことから、

その名がついたといわれています。また、船島は、渡しの船だまりだったからとか、島の形が船に似ていたからなどといわれていますが、確かなことはわかりません。

『風土記稿』には、宿河原の西の方に「登戸の渡し」があったと記してありますが、それが現在どこなのかは、流路の変化のため定かではありません。ただ船島には登戸の渡しの持ち主であった久兵衛の十八代目の子孫といわれるお宅があります。

二ヶ領用水の取入口の多摩川の堤外には、治水興農の守護神としての**船島稲荷社**があり、別名「くつ稲荷」とも呼ばれています。その由来は、昔、ある殿様の馬が病にたおれた折、この地の伯樂が手当して直したことから、感謝した殿様は馬の健脚を祈願して、この稲荷に馬のわらぐつを奉納しました。以来、村人は願い事があると、拝殿のわらぐつを一つ頂き、願いごとがかなうと、その御礼にわらぐつを倍にしてかえすという風習が生まれたことから「くつ稲荷」といわれるようになりました。この風習は今でも続いています。

船島の東、現在の一丁目の東半分は**西町**と呼ばれています。ここは昭和三十年頃までは河原だったので、**河原の島**と呼ばれ、一面の畑でした。今では住宅地となっしまい、わずかに畑が残っているばかりです。

二丁目の南側約三分の二が本町で、その北側が北町です。かつては、本町は本村、北町は北村と呼ばれていましたが、昭和三十年頃から、村から町へと呼び変えられました。本町には宿河原の地主層が多かったことから村の中心とも考えられ、そう呼ばれたといえます。また昭和三十年頃から、宿河原駅を中心に町がひらけ、そこを**仲町**と呼ぶようになりました。かつては水田であったこのあたりも、今では駅前から商店が立ち並ぶにぎやかな場所となっています。

生田と長尾に接した西南部は、平坦な宿河原の中で唯一の丘陵となっており、ここに**雪ヶ坂**があります。ここは北向きの急坂で、雪が降ると半日ぐらいたっても溶けず、ときには溶けないうちに再び雪が降り積もり、たいそう難儀した坂です。

この丘の頂に、文化四年(一八〇七)の銘のある浅間さまの石の祠が二つまつてあります。ここでは富士浅間講が行われ、富士山に登拝できない人々が、かわりにここにお参りします。毎年四月一日が祭日で、今でも**宿之島上組、宿之島下組、下綱、北村、橋本、船島、本村上組、本村下組**の各ムラで一年ごとに番をまわして行なっています。

二丁目の登戸との境が**橋本**です。橋本から二ヶ領用水にかけては、かつて**下河原**と呼ばれた湿地帯で、ここに船島へ通じる橋がかけてありました。それで橋本と呼ばれたといわれています。

宿河原駅の南にある**八幡社**は、『風土記稿』によると、かつては多摩川の北側にありましたが、洪水で流されてしまい、残った観音堂を常照寺の境内に移し、その後そこへ社を建てたとあります。この八幡社の横は、かつて村の高札場のあったところで、村の中心でした。しかし現在、繁華街は駅周辺に移ってしまい、このあたりは梨畑となっています。

八幡社から二ヶ領用水沿いに東へ行くと**宿之島橋**があり、この北側が『風土記稿』に小名で**宿**と記された宿之島です。ここはあたりより小高い場所で、田の水が不足するところだったといわれています。現在は水田もすっかり姿を消し、川崎市緑化センターなどの建つ住宅地となっています。

明治六年に船島で生まれた元木佐吉は、大正年代にこの宿之島で新しい宗教、新明国上教を興し、多くの信者を集めました。彼は宿之島の発展のため、信者ととともに多摩川の堤防までの荒地を開墾し、宿坊と呼ばれる家を建てていきました。結局、この計画は六〇戸ほどしかできませんでした。この国上教は昭和十四年頃にはますます盛んになり、講中の数も三十を越し、先達だけでも三百人を越すほどになりました。そして宿之島と下綱にはさまれたこの一帯を**新明**と呼ぶようになりました。ここはもともとは**不動町**と呼ばれており、昭和初期には南武線の宿河原不動という駅があったところです。現在も南武線の車窓から新明国上教が望まれ、宗教色の漂うところです。

六丁目にある二ヶ領用水の中野島水路の南は緑ヶ丘霊園の急崖となっており、そこを**下綱**といいます。『風土記稿』には、丘の上に老松があって、長尾、上作延、下作延、宿河原の四村の境となっていること、さらに豊臣秀吉が小田原出陣のため、神宮寺の城に向かうおり、上杉家の兵がこの松に綱をかけて下りたという伝承が記してあります。

この他にも、下綱の松にまつわる言伝えは多く、頼朝が兵を挙げ、この地を通った時に川が氾濫したため、稲毛三郎重成がこの松に綱を下げて兵を渡したとか、あるいはまた多摩川がまだ多摩丘陵のすぐ下を流れていた頃、洪水で流された人々がこの老松からたれ下がっている白布につかまって助かったという話も伝えられています。後者の話には続きがあり、最後に助かった老婆が欲心をおこして白布を持ち去るとしたところ、白布はたちまち白蛇となって老婆を呑みこもうとしたので、驚いた老婆は、自分の欲心を一心にわび、ようやく許され、御礼に祠を建てたといわれ、それが丘の上にある松寿弁天です。

ここには天保二年(一八三一)の銘のある手洗石があり、当時は近郷近在ばかりか江戸からも参詣客が絶えず、河原から下綱まで茶店や旅籠が立ち並ぶにぎわいでした。ところが幕府は、これを風俗を乱すものとして老松を切り、店もとり壊したといえます。しかし、松寿弁天は今でも下綱の守り神となっています。

現在は丘のふもとは住宅地化され、かつてのにぎわいとどめているものはありませんが、まだ水田や畑や果樹園が点在しています。

四・五・七丁目の多摩川沿いの地域は、幕末の頃は、北村に住んでいた名主、関山五郎衛門慶定の所有地で、彼はここで当時としては画期的な寒暖計を使った養蚕を始めました。そして黒船来航によって開国した当時の輸出品の中で、筆頭は生糸で、当時の農村にとっては唯一の現金収入の途でしたから、養蚕熱はいっきに農村に広がりました。

その後、この砂地は明治から大正にかけて畑地となり、麦作りや桑作りが続きましたが、やがて桃栽培の中心地となり、昭和九年から十四年頃にかけては、あたりは一面の桃畑となり、「宿河原桃」として名声をあげました。

ところが戦争が勃発し、果樹栽培の制限令や主食増産の中で、桃は激減していきました。戦後ようやく復活し、昭和二十九、三十年頃には再びピークを迎えましたが、桃の樹齢は二十年とはもたないうえに、連作がきかず、また稲作と並行した労働が大変だったため、次第に桃は姿を消していきました。

そしてこの地域は、戦後、稻田中学校や多摩高校ができたのを契機に県営住宅や市営宿河原住宅が建設され、今では畑はすっかり住宅地となってしまう、往時をしのばせてくれるものはほとんどありません。

堰(せき)地区

堰は、西が宿河原、東が高津区宇奈根、南が久地に接し、北は多摩川に臨む小さな地域である。宿河原、宇奈根、久地と同様に多摩川の流路によって地形が大きく影響を受けてきた。

堰の地名について、『新編武蔵風土記稿』などから、水田に水を引き入れる堰があったことからの地名であろうとしている。しかし、その用水口なるものがはっきりしない。しいて言えば、この付近から最初の二ヶ領用水の取入口があったと考えることもできる。もう一つの考え方としては、村の中心を通る旧堤防である。現在は、堤防が削られて平らになっているが、その延長に**宿河原の旧堤防**が残っており、堤防の高さを想像することができる。この堤防によって、多摩川の水が堰止められたところからの地名と考えてもおかしくはない。

つい最近まで、梨の果樹園があちこちに見られたが、現在はそのほとんどが住宅地となっている。県立向の岡工業高校が堰の長池の末端の、土地の最も低いところで、開発されていなかったところに建設された。二ヶ領用水の悪水路(放水路)として堰の長池があるが、これは多摩川の旧流路である。その跡地には、花壇や畑地、公園など様々な形で利用されている。

堰の住居表示は昭和 63 年に実施された。

現在の堰地区の面積は、堰 1～3 丁目 60ha

堰の小名 記載なし

堰の字 北耕地、東耕地、西耕地

通称地名 中、西、東、北、河原、春田、五十間割り、本田、立場、長池、池尻、鷹匠橋、
稻田本道、渡し場道

堰 1 丁目 河原

堰 2 丁目 北耕地

堰 3 丁目 中耕地、東耕地、西耕地

【堰一丁目～三丁目】

区の東端の多摩川河畔に位置し、東は高津区久地に、西は宿河原一丁目～七丁目に接しています。町の南には府中県道が東西に走り、西には東名高速道路が南北に貫いています。ここは江戸時代の**堰村**で、そのなりたちについては『風土記稿』に、江戸開幕のすこし前、武家出身の七人の民が、当時、野原であった現在の堰に住みつき、多摩川の水をひくために堰をつくって開墾し村をつくったことから、村名を堰村と叫び、と記しています。このことは、開墾にあたって、水がいかに大事であり、その水を引き入れる堰がいかに重要であるかを物語っています。

また「武蔵田園簿」には、堰村はすべて「**見取場**」と記されています。見取場とは、開墾したばかりの新田などで地味が劣悪なため石高で表示せず、反別のみを記している耕地のことで、このことから江戸初期には、堰村はまだ比較的新しい村であったことがわかります。

その後、明治二十二年の市制・町村制によって、近隣の菅村、中野島村、登戸村、宿河原村とともに**稲田村**に編入され、稲田村大字堰となりました。稲田村は昭和七年に**稲田町**となり、昭和十三年に川崎市に編入され、昭和四十七年の区制施行で多摩区堰となりました。堰一丁目～三丁目は、かつて**龍巖寺**を中心に四つの集落に分かれていました。三丁目の龍巖寺周辺を**中**、その東を**東**、龍巖寺の西の現在の堰交差点付近を**西**、そして二丁目の稲荷神社周辺を**北**と呼んでいました。人家のほとんどはこの四つの集落に集まり、現在の二丁目と三丁目の境を通る市道鹿島田菅線の両側は畑、現在の一丁目と二丁目の境を通る道が旧堤防で、その北側は**河原**と呼ばれる堤外地でした。

当時、村内を走る道は、宿河原境から龍巖寺の南を経て**鷹匠橋**を渡り、久地へと至る**稲田本道**と、現在の三丁目のなかほどから龍巖寺の北を経て稲荷神社の西側を通り**河原**をぬけて**堰の渡し場**へと至る**渡し場道**以外は、道幅六尺以下の畑道でした。

堰の渡しは、多摩川沿いの村々に多くみられる耕作のための作場渡しではなく、対岸の**喜多見**へ渡る交通路で、このあたりは二子や登戸の渡しへ遠いところから、その中間点の堰に設けられたものでしょう。渡し場は、現在の東名高速道路の下あたりにあり、昭和の初め頃までは手押し車も渡せるほどで、昭和十五、六年頃まで続いていたといえます。

堰はほかの多摩川沿いの村々とはちがい、水田に恵まれた土地でしたが、湿田も多く、稲荷神社の北側の田は冬場でも麦のつくれない一毛作の湿田で、春にならなければ耕作できないところから「**ハルタ**」と呼ばれていました。

稲荷神社の南には「池」という屋号の家があり、現在二丁目の NEC 多摩川寮付近は**池尻**といいました。また、旧堤防に沿った一丁目の東名高速道路の下あたりには**堰の長池**という池があり、昭和五、六年頃、かい掘り(水を全部汲み上げること)をしても水がなくならないほど水が湧いていたそうです。しかし、昭和二十年頃からしだいに水も湧かなくなって、とうとう干上がってしまいました。

旧堤防外(現在の一丁目)の河原は戦前まで人家はなく、南北に細割りにされた畑となっていました。そして旧堤防内の田畑を**ホンデン**といい、**河原**の畑は細割りにされた畑の長さによって、**五十間割り**とか**六十間割り**と呼ばれていました。

河原は一尺掘れば砂利にあたるほどの砂地であったことから、明治の末期頃から桃や梨が植えられるようになりました。戦前までは桃のほうが盛んでしたが、戦時中に食料増産のために強制的に伐採されたり、また桃は連作がきかないことなどから、戦後は梨が主流となり、水田を潰して梨を植えるようになりました。そのため、昭和三十年頃にはすっかり水田は姿を消してしまいました。梨の栽培は昭和四十年頃にピークを迎え、以後は徐々に衰えましたが、それでも今なお二十二、三軒のもぎとりの梨園が残っています。

また戦後、河原にも人家が徐々に建ち、昭和二十九年に現在の一丁目の宿河原境に多摩新町自治会ができました。昭和三十年頃からは一丁目の東部にも住宅が建ち始め、昭和三十六年には向の岡工業高校ができました。

江戸時代、街道に沿った村々は大名の参勤交代の際には、その石高に応じて人足夫役が課されていました。そこで多くの村々は、働き手を人足にとられないように、自村の領地を故意に狭くするような努力をしました。現在、三丁目の東端の久地境付近は**タテバ**といい、領地を少しでも狭くするために、堰村内に札を立てて、そこを久地との境界と主張したといひます。また久地村内の堰境を**堰前耕地**と呼ぶのも、同様の理由によるといわれています。

自村の領地を広げるどころか、狭めざるをえなかった悲しい農民の歴史が、地名の中にも残っています。

長尾（ながお）地区

長尾は、宮前区の神木本町、神木、五所塚を含む、**東高根、西高根**と北斜面と平地の**河内長尾**で長尾村といった。区割り変更により、北斜面と長尾河内が**長尾 1～7 丁目**となる。長尾 1～7 丁目は昭和 50 年に住居表示が実施されたときに、高津区から多摩区に変更した。ここでは、長尾 1～7 丁目の部分について記述する。

字**新川**は二ヶ領用水沿いに開けた土地で、中野島取入口から流れる二ヶ領用水を新川と呼んでいたことからの地名である。丘陵の北斜面にはいくつもの谷戸があり、現在は宅地造成され、昔の地形がまったくわからないほど変わってしまった。長尾 6 丁目の造成地は、**長尾台**と表記されている。長尾 2 丁目から 3 丁目にかけてかつて向ヶ丘遊園地があったが、閉園し、一部が川崎市藤子・F・不二雄ミュージアムとなっている。園内にあったバラ園は春と秋に期間を決めて開放している。

現在の長尾地区の面積は、長尾 1～7 丁目 115ha、旧長尾地区(宮前区)114ha

長尾の小名 柳町、兵庫谷、**下河原、富士ヶ谷**、十三本原、**池田、坂下、大谷、雪ヶ坂**、鶴ヶ谷、別所、神木谷戸、殿下、権現台、妙覚寺台

長尾の字 新川、東高根、西高根、元泉、長峰

通称地名 白山面、射的面、天台、新林、下原、はなみど、兵五郎谷、向田堀、池田堀、勘助坂、新坂、平坂、狐坂、中道、中村、丸池

長尾 1 丁目 新川

長尾 2 丁目 西高根

長尾 3 丁目 東高根

長尾 4 丁目 新川

長尾 5 丁目 新川

長尾 6 丁目 東高根

長尾 7 丁目 東高根

【長尾一丁目～7丁目】

区の東南に位置し、町の中ほどを東西に流れる二ヶ領用水を境に、北側は沖積低地、南側は多摩丘陵となっています。

江戸時代、ここは神木一・二丁目、神木本町一丁目～五丁目、それに五所塚一丁目とともに**長尾村**の一部でした。そして明治二十二年の市制・町村制施行で、長尾村は上作延村、須菅生村、平村とともに**向丘村**となりましたが、昭和十三年に川崎市に編入された際、向丘村は廃止され、川崎市長尾となりました。その後、昭和四十七年の区制施行で高津区に編入されましたが、昭和五十年の住居表示の際に長尾と上作延の一部が多摩区に編入され長尾一丁目～七丁目となり、現在の町域になりました。

低地の一・四・五丁目は**河内長尾**、丘陵部の二・三・六・七丁目は**谷長尾**と呼ばれ、両方の地名とも『風土記稿』に記されている古い地名です。地元では現在でも、「コーチはどようですか。」「ヤトはいかがですか。」という挨拶がかわされています。

河内長尾は多摩川の流れが北に変わったためにできた平地で、ここに谷長尾から人々が移り住んで水田を開き、とくに二ヶ領用水の完成（一六一一）によって、新田開発はいっそう進みました。

「コーチ」は「カワチ」と同じく全国各地に見られる地名で、川に沿って開けた平地をいいます。

しかし、低地のため多摩川の氾濫にたびたび苦しめられ、なかでも現在の五丁目にあたる**下河原の丸池**や、現在の一丁目にあたる**大谷の池田**は、周囲よりも一段と低いため、洪水のたびに一面が池のようになり、なかなか水が引かなかったといえます。

下河原も大谷もかつての集落名で、その他にも四丁目には**中村**と呼ばれる集落がかつてあり、いずれも今では町会の地区名として使われています。また大谷は、江戸時代に高札場があったところでした。中村は、大谷と下河原の中（あいだ）にあるためにそう呼ばれたといえます。

かつてこのあたりは水田の広がる田園風景でしたが、今では水田はほとんどなくなり、丸池にも住宅が建ち、池田にも鹿島田菅線の道路が通り、自動車会社の営業所やファミリーレストランなどが目につくようになりました。

また、この一帯は、明治の中頃から梨や桃の栽培が盛んになり、近年では桃からぶどう作りへと変わったものの、現在でも四軒の農家が観光農園として営業をつづけています。

丘陵部の谷長尾は、昔は現在の宮前区神木本町一・二丁目あたりまでを含んでいて**神木長尾**と呼ばれていましたが、『風土記稿』が編纂された江戸時代後期頃に、谷長尾と呼ばれるようになったといえます。

谷長尾の西寄り、現在の二丁目の北側は、かつて畑地でしたが、ここに大正十五年、向ヶ丘遊園が開園し、『江戸名所絵図』に「頗る美景の地なり」と紹介された**雪ヶ坂**は、遊園の敷地内となりました。

「川崎のあじさい寺」として親しまれている三丁目の**長尾山妙楽寺**は、創建が平安時代と伝えられる古寺です。この寺は鎌倉時代に頼朝の庇護のもと、弟全成が住職をつとめた時期もある**威光寺**の後身ではないかと指摘されていましたが、確証のないまま「幻の威光寺」

といわれてきました。しかし、昭和五十三年、薬師三尊像を解体修理した際、日光菩薩像の胎内墨書銘に「天文十四年（一五四五）長尾山威光寺」の寺名が見つかり、妙楽寺が威光寺の塔頭（本寺を守る脇寺）の一つであったことがわかりました。

妙楽寺の周囲は**妙楽寺台**と呼ばれ、ここから北へつづく**権現台**には**長尾神社**がまつられています。長尾神社はもとは五所権現社といい、明治四十五年に赤城神社が合祀されて長尾神社になりました。ここでは、毎年一月七日に、一年間の無病息災を祈る「射的祭」（流鏝馬の一種）が行われ、雪ヶ坂、大谷、中村、下河原、台、下原の六地区の氏子によって伝統行事が受け継がれています。

六丁目の南側には、かつて**富士ヶ谷**と呼ばれた深い谷がありました。地名の由来は、以前、谷戸の入口に富士浅間社がまつられていたことにちなむもので、この谷の奥には**射的面（免）**という射的祭の供米田がありました。また、その近くには**白山面**と呼ばれる田もあり、ともに祭りや**白山神社**に供する穀物を作った水田で、租税が免除されていたことから面（免）と呼ばれました。

かつてこの谷には、谷筋に幾段もの棚田がつくられていましたが、昭和四十七年に宅地造成が行われ、棚田はすっかり姿を消し、丘陵も削られて、今ではかつての谷を想像することも難しいほどになっています。

七丁目の丘陵上の東端は、かつて**下原**といわれていました。ここは昭和四十三年に東名高速道路を通すために削られましたが、その工事中に、旧石器時代の石器や縄文後・晩期の集落跡が発掘されました。このほかにも、丘陵上からは**権現台遺跡、長尾台遺跡、鯉坂遺跡、東高根遺跡**など多くの集落跡が見つかっており、古代から中世にかけて多摩丘陵を舞台に生活した人々の息づかいを感じるところです。

生田(いくた)地区

生田は、江戸時代の村名は、**上菅生村**と**五段田村**であるが、五段田村は上菅生村内の未開地を切り拓いて出来た村であることから、文献などで重複することが多い。古くは、**菅生郷**と呼ばれ、江戸初期に上菅生村と下菅生村に分離された。資料に見られる**大野原**という広大な未開地があり、周辺の村からの入植者によって開墾され、村絵図などにも一部が記載されている。

明治時代になり、地租改正のための地番整理をするために、明治8年には2村は早々と合併して**生田村**としてスタートする。生田の町名は、上菅生と五段田から一字ずつとってできた合成地名である。

その後明治22年に、**生田村**と**細山村・金程村・高石村**が合併して新しい生田村ができるが、ここでは、旧の生田村について記述する。ちなみに、細山・金程・高石は現在麻生区に所属する。

津久井道が村の中心を通り、街道に沿って**五反田川**が**細山**や**高石**から流れてきて生田の**大作**、**根岸**から**登戸**で二ヶ領用水に合流している。昭和2年の小田急線の開通によって、駅

周辺を中心に町の様子が大きく変わった。当初は東生田駅と呼ばれたが現在は生田駅、西生田駅は現在は読売ランド前駅となった。

生田という地域は広範囲に及ぶことから、ブロックごとに新町名が生まれたのも特徴としてあげられる。生田以外に、西生田、南生田、栗谷、三田、東三田、柘形、東生田、長沢である。平地が少なく、五反田川沿いに旧集落があり、丘陵部に集合住宅を中心にほとんどが住宅地となっている。

三田 1～5 丁目は区画整理により昭和 42 年にできる。その後、住居表示が実施され、栗谷 1～4 丁目は昭和 52 年、南生田 1～8 丁目は昭和 52・57 年、西生田 1～5 丁目は昭和 53・54 年、柘形 1～7 丁目は昭和 55 年、東三田 1～3 丁目は昭和 55 年、東生田 1～4 丁目は昭和 55・57 年、生田 1～8 丁目は昭和 56 年、長沢 1～4 丁目は昭和 57 年に誕生した。

現在の生田地区の面積は、生田 1～8 丁目 141ha、東生田 1～4 丁目 54ha、
柘形 1～7 丁目 168ha、東三田 1～3 丁目 46ha、
三田 1～5 丁目 83ha、栗谷 1～4 丁目 48ha、
西生田 1～5 丁目 87ha、南生田 1～8 丁目 124ha、
長沢 1～4 丁目 67ha、

生田の小名 稲ノ目、松本、飯室、大道、宗久宿、明王、土渕、万吉寺、長沢、三田、栗ヶ谷、大作、押沼、榎木戸、星川、五段田、根岸、平ノ台、三田台、籠場口、栗屋台、雁又台、塔の腰、明王峰、手保井台、梅ヶ谷台、油免、不聞台、川小屋、鍛冶台、字寒谷、二枚橋

生田の字 菅生耕地、土渕耕地、北耕地、榎戸西、明王、土渕、寒谷、北大作、南大作、大作、西五反田、東五反田、根岸、稲ノ目、榎戸、飯室、柘形、東三田、大谷、三田原、西三田、平野、東栗谷、立牛、栗谷台、栗谷、無入、雁俣、四郎左衛門谷、塔の越、餅井坂、西長沢、中谷、東長沢、川窪、籠馬沢、飯室谷、鴛鴦沼(押沼)

通称地名 天神山、平台、お水山、稲荷山、大山、明王山、日向山、山崎、新寺、せんにん山、ト一カ森、原台、山谷、下村、庚申山、西台、おっぱら、西っ原、蟻のとう、大谷坂、とりっべの坂、くらやみ坂、七曲り、おっこし坂、宮坂、庚申坂、長とろ、不動谷戸、くすが谷戸、長兵衛谷、栗原、又兵衛谷、水車の谷戸、せんにん谷戸、山王谷、四反田谷、やすだ谷戸、じいだ谷戸、池の谷、かが谷戸、がんと谷戸、十一面、広町、おしゃみじ橋、籠馬池、権現池、川戸、五郎兵衛新田、堰面

生田 1 丁目 菅生耕地

生田 2 丁目 土渕耕地

生田 3 丁目 土渕耕地

生田 4 丁目 土渕

生田 5 丁目 寒谷

生田 6 丁目 大作、北大作

生田 7 丁目 西五反田
生田 8 丁目 東五反田、榎戸西
東生田 1 丁目 飯室、榎戸
東生田 2 丁目 飯室、枳形
東生田 3 丁目 鴛鴦沼
東生田 4 丁目 鴛鴦沼
枳形 1 丁目 明王、北耕地
枳形 2 丁目 北耕地、榎戸西、
枳形 3 丁目 榎戸、稲目
枳形 4 丁目 榎戸西、根岸
枳形 5 丁目 根岸、大谷
枳形 6 丁目 稲目、飯室、枳形
枳形 7 丁目 枳形、飯室、飯室谷、鴛鴦沼、籠馬沢
東三田 1 丁目 三田原、大谷、根岸
東三田 2 丁目 大谷、根岸、東三田、籠馬沢
東三田 3 丁目 大谷、東三田、菅生耕地、籠馬沢
三田 1 丁目 西五反田
三田 2 丁目 東五反田、西三田
三田 3 丁目 三田原、西三田
三田 4 丁目 三田原、平野
三田 5 丁目 三田原
栗谷 1 丁目 栗谷
栗谷 2 丁目 栗谷、栗谷台、東栗谷
栗谷 3 丁目 栗谷、大作、西五反田
栗谷 4 丁目 東栗谷、
西生田 1 丁目 北大作
西生田 2 丁目 大作、北大作
西生田 3 丁目 南大作、無入、四郎左衛門谷
西生田 4 丁目 鷹俣
西生田 5 丁目 鷹俣
南生田 1 丁目 無入、四郎左衛門谷、栗谷、栗谷台
南生田 2 丁目 四郎左衛門谷、立牛、塔の越、中ノ谷
南生田 3 丁目 立牛、中ノ谷、塔の越、栗谷台
南生田 4 丁目 中ノ谷、西長沢、塔の越
南生田 5 丁目 中ノ谷、東長沢
南生田 6 丁目 中ノ谷、東長沢
南生田 7 丁目 東栗谷、平野
南生田 8 丁目 立牛、東栗谷

長沢 1 丁目 東長沢、中ノ谷
長沢 2 丁目 東長沢
長沢 3 丁目 東長沢、西長沢
長沢 4 丁目 西長沢

【生田一丁目～八丁目】

多摩区の二ヶ領用水の南に広がる丘陵地帯は、現在、生田、東生田、枅形、東三田、三田、栗谷、西生田、南生田、長沢の九つの町に分かれています。この地域は、近世以前は**菅生郷**に含まれていましたが、その後、正保(一六四四～四八)の頃までに、菅生郷は**上菅生村**と**下菅生村**とに分かれました。その上菅生村がこれらの町域にあたります。

『風土記稿』によれば、その後、元禄三年(一六九〇)に上菅生村の中から新たに**五段田村**が分村し、二つの村に分かれたと記していますが、『大日本国史』は元禄の絵図には五段田村の記載がない故に、それ以後に分村したと記しています。しかし「元禄郷帳」には五段田村が記載されていることから、いずれにしても、この頃に分村したと思われます。五段田というのは、新しく開墾した土地を、一戸あたり五反ずつ分配したところにつけた地名といわれています。

その後、明治八年、この二村は再び合併し、両村の村名から一字ずつを取って**生田村**と命名されました。そして明治二十二年に高石村、細山村、金程村の三村を併合して、昭和十三年に生田村は川崎市に編入され、昭和四十七年には区制施行にともなって、多摩区生田となり、さらに昭和五十六年の住居表示で生田のなかの一地域としての生田一丁目～八丁目が生まれました。

生田一丁目～八丁目は二ヶ領用水と小田急線とにはさまれた地域で、二ヶ領用水と**三沢川**との間には平地が開け、丘陵の多い旧生田村の中ではもっとも平地に恵まれた所です。一丁目はかつての字**菅生耕地**にあたり、二・三丁目が字**土渕耕地**だったところで、両耕地とも生田でもっとも梨作りのさかんなところ。土地の人の話では、隣の菅や中野島では、掘ればすぐに砂利層にぶつかるのに対し、ここでは二メートルも掘らないと砂利層にとどかない土のたまった深い田んぼだったところから土渕と呼ばれたということですが、はっきりしたことはわかりません。

一丁目の三沢川沿いには生田浄水場があります。昭和に入り、川崎市南部への工場進出が激しくなると、南部地域の地下水だけでは工業用水をまかないことが難しくなったため、川崎市は多摩川の伏流水にその水源を求め、昭和十三年にこの生田浄水場を開設しました。五丁目はかつての字**寒谷**で、丘陵の浄水場付近には雑木林がよく残され、この丘と西側の寺尾台との間には深い谷が南北に長く続いています。この谷は北向きの斜面のために、冬になると寒い風が吹きあげ、山仕事にはつらいところだったらしく、それで寒谷と呼ばれたのかもしれない。かつては家もなかったこのあたりでも、今ではりっぱな住宅地に変わっています。

浄水場のある台地は**平台**とよばれ、ここに北東から**不動谷**が入り込み、谷の入口の三沢川沿いには土淵不動院があります。ここから生田小学校の北側で丘陵の尾根を越えて小田急線の生田駅へ抜ける道は、昔から土淵と生田の役場を結ぶ大切な道でした。

不動谷のすぐ東に小さな谷があり、ここから生田小学校の東側に通じる道が『風土記稿』に記されている**内匠坂**です。その由来は、かつてここに内匠の屋敷があったからとも、大工関係の人が住んでいたからともいわれていますが、定かではありません。また尾根を越すところは**アリノトウ**とか**アリノオワタリ**と呼ばれる険しい道で、女の人は通ってはいけないといわれていた急坂です。その由来ははっきりしませんが、各地の山村によくある地名で、アリしか通れぬような険しい所をいうようです。不動院のすぐ西側から四丁目にかけての地域が字土淵だった所です。

六丁目の東側が字**大作**で、西側はかつての字**北大作**です。ここは、以前は人家もない傾斜の急な雑木林でしたが、昭和三十五年頃に月見台住宅地が造成され、道も新しく整備されました。今でも尾根まで続く急坂に昔の面影をかいま見ることができます。

七丁目は以前の字**西五反田**で、旧道沿いの竹間家の入口は江戸時代の五段田村の高札場があったところでした。明治に入っても、この近くに生田村の役場や学校が置かれ、村の中心となっていました。現在でも、多摩区生田出張所や生田小学校、それに小田急線の生田駅もここに 있습니다。

生田駅の西側には石碑があり、そこには駅ができると同時に、発展を期して土地の人達の手で新道がつくられたことが刻まれています。

八丁目は、ほとんどが字**東五反田**で、東側の三分の一が字**榎戸西**にあたります。枡形の**根岸**の方から旧道を西進すると、傾斜のきつい**大谷坂**がありましたが、今では切り通しとなって、かつての面影はありません。大谷坂の由来は、坂の上に大谷家があったために、そう呼ばれたといえます。この大谷家は時代にさきがけて明治四十年に十五頭の乳牛を飼い、牛乳を配達していた先進的な農家でした。

小田急線生田駅の東、**五反田川**にかかる**生田大橋**の東側にかつて**和田堰**がありました。これは『風土記稿』に記されている「**土堰**」で根岸方面の田に水を運ぶものでした。

現在でも五反田川に沿って畑や水田、果樹園が見られ、かつての谷戸田の面影をしのぶことができます。

【東生田一丁目～四丁目】

東生田一丁目から四丁目は、小田急線の向ヶ丘遊園駅の南側の、向ヶ丘遊園と生田緑地とにはさまれた丘陵地域です。

東生田も明治八年以前は上菅生村に含まれ、その後、生田村を経て、昭和十三年に川崎市に編入され、昭和五十五年の住居表示で東生田一丁目～四丁目となりました。

長尾に接して高さ六六メートルの**飯室山**があり、山を含む一・二丁目をあわせて**飯室**といえます。稲田登戸病院のある丘の東側斜面も飯室で、この丘の山腹には、長者が財宝を埋めたという伝説をもつ**長者穴**とよばれる横穴古墳が三十余個あります。この横穴古墳は、

出土した須恵器や土師器の破片から、七世紀中頃から奈良時代中期までのものと推定されています。

飯室という地名の由来は、山が飯を盛った形に似ているからとか、あるいは横穴古墳の多数のほら穴、つまりムロがあるからだともいわれていますが、確かなことはわかりません。二丁目の生田緑地の駐車場に沿って三・四丁目の台地へぬける道は、かつては曲がりくねった急坂で、**七曲りの坂**と呼ばれていましたが、昭和七年に現在のような勾配もゆるくカーブもゆるやかな道に改修されました。

七曲りの坂を越えた三・四丁目は**押沼**です。押沼のいわれは詳かではありませんが、明治三十九年測量の地形図には「**鴛鴦沼**」という集落名が記されており、広福寺の過去帳には、「押浪」「押之間」と記してあります。押沼には松本姓を名のる七戸の家が古くから住んでおり、そのほとんどが鋸鍛冶でした。伝承によると、元龜・天正の頃(一五七〇～九一)に信州の松本から三人の兄弟が押沼に逃れて来て、二人は帰農して、押沼に住みつき、一人は枳形六丁目の**広福寺**の僧になったと伝えられています。

生田緑地の東口駐車場から押沼へ通じる道は、かつては山越えをしなければならない難儀な道でしたが、昭和八年に切り通しとなり、その断面に「おし沼砂礫層」があれられました。これは今から約三十万年前の間氷期の海進で堆積した貴重な地層です。

緑豊かな丘にとり囲まれたこのあたりも、最近徐々に宅地化の波が押し寄せてきています。

【枳形一丁目～七丁目】

枳形一丁目から七丁目は、小田急線が多摩川沿いの平地から多摩丘陵へ入る入口の丘陵地帯に位置しています。丘陵の南側には日本民家園や生田緑地などがあって緑に恵まれた地域です。

枳形も、明治八年以前は上菅生村に含まれ、その後、生田村を経て、昭和五十五年の住居表示で枳形一丁目～七丁目となりました。

一丁目の西半分から東生田緑地の丘陵にかけては明王といいます。丘のふもとは、土地の人達が明王不動尊とか、お不動さまと呼ぶ**明王山真福寺**があり、明王の地名のおこりとなっています。

また、丘の尾根を**明王峰**といい、その頂には三峰神社の小社がまつられており、**明王、宿、根岸**の三十数戸で三峰講が組織されています。毎月十九日になると、当番の家が一月ごとに交代して神社の灯籠にローソクをともし、その灯はふもともからも見えます。

三峰講では、秩父の三峰神社に講の代表がお参りにゆく代参という行事も行われており、盗難よけ、火ぶせ、嵐よけの御利益があるお札をいただいてきて各家に配ります。そしてもらったお札を竹にはさんで畑に立てる家もあるということです。三峰講は土漕にもありますが、市内ではこのあたりだけに続けられている講です。

一丁目の東半分と二丁目の**府中街道**以北の低地はかつての字**北耕地**で、街道に沿って**宿**という集落があります。ここは江戸時代の上菅生村の中心部にあたり、当時の高札場があったところです。『風土記稿』によると、村の源兵衛の先祖が婿に入った北条家浪人の斎藤

宗久がこの地に住んでいたことから、**宗久宿**と呼ばれ、略して**しゆく村**ともいわれたのではないかと記してあります。

登戸から**津久井道**を西進すると、**小泉橋**で二ヶ領用水を渡り、生田地域(枅形三丁目)へ入ります。この石橋がかけられたには天保十五年(一八四四)で、土地の豪農、小泉利左衛門が登戸にかけた三十三にのぼる石橋のひとつです。

橋を渡ると、三丁目の多摩警察署付近で府中街道と交差し、ここから五反田川にかかる**大道橋**あたりまでを**榎戸**といいます。かつては旧道沿いに旅宿、居酒屋、めし屋、菓子屋、たび屋、ふるい屋、仕立屋、紺屋、畳屋などが並ぶにぎやかな通りで、戦後しばらくまでは、年の暮になると歳の市が立ちましたが、今では小じんまりとした商店街となり、歳の市も立たなくなりました。

『風土記稿』には、相州厚木あたりへ行く旅人がここを往来し、路傍には小高い塚があって、そこに榎があったので**榎木戸**と呼ばれたと、地名の由来が記されています。しかし、この榎の古木は、明治十四年の火事によって焼失してしまい、現在は「榎戸」というバス停がその名残りをとどめているだけです。

柳田国男は「榎戸懐古」の中で「榎戸の榎は古木であったというが、それでも一ぺんは若木であり、人が路傍の神の御するしに、これを手植えした時代があったろう。私はそれを多摩川の岸はなお近く、ここを川船の船渡しとしていた時代だったかと思っている。それがある年の大水に荒らされて、村は以前の対岸の地へ移り、その跡は久しく広野になっていた。榎はその間にも段々と成長して、岡を南に越えて行く旅の者が、まだ陸続と去来している頃に、すでに遠くからの目標となり、またその樹蔭の居酒屋を有名にし、やがて五反田節というような新たな勧酒歌を、発生せしめる素地を作ったのではなかろうか。」と記しています。

ここにいう「樹蔭の居酒屋」というのは料亭紀伊屋のことで、文化年間に紀州からここに移り、造り酒屋と旅籠を兼ね、旅ゆく人々に喜ばれていました。また「新たな勧酒歌」というのは、稲毛三郎重成の妻が鎌倉からとついできたおり、鎌倉からのお供の人達によって伝わった「これさま」という唄で、現在でもおめでたい席で歌いつがれている歌です。これと同じ調子で五反田を歌いこんだのが「五反田節」です。

旧道を西進すると、五反田川を渡る大道橋があります。ここは柿生、鶴川方面への道と菅生方面への道とが分岐する追分にあたり、戦前までは馬宿、たばこ屋、床屋、傘屋、車大工、それに繭の仲買の即座師もあってにぎやかなところでした。五、六年前までは橋きわに伊勢参りの記念碑が立ち、道標などもあって、昔の面影をしのばせていましたが、その後、道路の拡張のため、道標もとり除かれて、今は**広福寺**に保存されています。

このあたりの集落は**大道**と呼ばれ、『風土記稿』には、大道は台道とも書くと記され、台地へ上がって行く道の意味だといわれていますが、定かではありません。また、このあたりは古くは鎌倉への街道筋で、多摩川も今よりずっと南側を流れ、その川岸に**大道の渡し**と呼ぶ渡し場があり、今の登戸の渡しは大道の渡しの移ったものであろう。とも記しています。その記述を裏づけるように、**根岸**の山崎という所には、船頭の親方という意味の**お**

頭という屋号の家があり、その下が渡船場であったといわれており、また同家には今でも渡船場の銭箱があるそうです。

小田急線が多摩丘陵にさしかかる谷の入口の北側にあたる四丁目の丘陵部が**榎戸西**で、谷の平地部と南側の丘陵の五丁目が根岸です。

根岸とは、昔、多摩川が今よりも南の、枡形の丘陵のふもとに沿って流れており、ここで五反田川が多摩川に合流して、流れが丘の根方にあたるのでそう呼ばれたといわれていますが、定かではありません。

四丁目と五丁目の境の谷を渡る生田根岸跨線橋の北側には、以前、丘を背にして**六地藏**が立っていました。これは元禄五年(一六九二)の銘をもつ地藏で、その前には広っぱ(広場)があり、五反田、大作、細山方面から登戸方面へ、米や繭、炭などの荷を運ぶ人達が一息入れる休み場になっていました。この六地藏も、今は跨線橋の南側に移されています。

また、この橋の下あたりの田は**油免**と呼ばれています。古老の話では、この田は稲毛三郎の妻の御化粧料の免田であったといいますが、油免とは灯用にするための菜種の油をとった免田ではなかったかともいわれています。

東生田小学校の北側の丘は**日向山**といい、南向きの日当りのいい山ですが、ここにかかる道はあたりに人家もないさびしい坂道で、おおいかぶさる林の落ち葉やしみ出る水で、車をひく人にとっては「じごく」といやがられていた道でした。

この丘の尾根には**根岸古墳群**があり、小型円墳が四基とやや大きい円墳が一基あります。これは古墳時代終期の七世紀か八世紀初頭のものともみられ、出土品から権力者というより、小規模の豪族の墓であろうと考えられています。

枡形六丁目から七丁目にかけて、標高八三メートルの**枡形山**があります。山上にはかつて山城があり、現在はその城跡に昭和三十五年(一九六四)に川崎市が建てた石碑があります。それには、枡形山がほぼ正方形の形をなし、その西方が削られたような絶壁で、形が枡形に似ているところからその名がつけられたと地名の由来が書かれています。

また枡形城の歴史については、次のようなことが記されています。枡形城は、源頼朝開幕の頃に、領主稲毛三郎重成の居城となり、下って永正元年(一五〇四)には、扇谷上杉氏と山内上杉氏の抗争の舞台となりました。また永禄十二年(一五六九)には、甲斐の武田信玄を土地の豪族横山式部少輔弘成が土塁を築いて防戦したという古伝もあり、しばしば戦国の武将に利用された山城でした。

枡形山の北の麓には五反田川が流れており、かつては**谷川**と呼ばれていました。この川にかかる**松本橋**を渡り、城跡に向かう道は**くらやみ坂**と呼ばれて、両側の木々に陽をさえぎられ、昼なお暗い急坂で、城の正面にあたる大手門へと通じる道でした。

この坂の途中に真言宗広福寺があります。境内には稲毛三郎重成の墓といわれる五輪塔があり、平安時代の木造地藏観音像と鎌倉時代の木造観世音菩薩像とともに県の重要文化財に指定されています。

境内から西側の石段をおりると、道の向かいに**天神社**があります。ここは韋駄天社ともいわれ、広福寺の守護神であり、このあたりの氏神様でもあります。

広福寺の周辺は**松本**と呼ばれています。地名の由来は、昔、信州の松本から来た三人の兄弟のうち一人が広福寺に入って僧となり、寺の山名稲毛山を松本山と改め、松本山広福寺と寺の山号を名乗ったからだといわれています

六丁目の北半分は**稲目**です。『風土記稿』には、むかし村内に稲目図書という人がいたことからこの地名がおこったと記してありますが、定かではありません。また『風土記稿』によれば、文永三年(一二六六)の鎌倉八幡宮から武蔵目代宛の書状の中に「鶴岡八幡宮領武蔵国稲目、神奈川両郷」とあり、神奈川に対してこのようにいっていることから、今はわずかの所であるが、その頃の稲目はかなり広い範囲の地名であったのだろうとも記してあります。

【東三田一丁目～三丁目】

東三田一丁目から三丁目は、小田急線の南側の丘陵地域で、生田緑地と三田とに東西をはさまれた地域です。

東三田も、明治八年以前は上菅生村に含まれ、その後に生田村となり、昭和五十五年に住居表示が実施されて東三田一丁目～三丁目となりました。

一丁目の大半は**三田原**で、この原は南に高くなって長沢浄水場のある尾根に続いています。

三丁目は**東三田**と呼ばれた台地で、南は専修大学のある尾根に続いています。

この三田原と東三田の間に長沢浄水場の北側まで達する長い谷が入りこんでおり、**大谷**と呼ばれています。これは一・二丁目の谷の部分と、三丁目の全域を含む大きい谷で、かつては**権現池**と呼ばれた溜池が三丁目の中央あたりにありましたが、今は住宅地となっています。以前は大谷沿いには**谷戸田**といわれる水田があって、台地上は畑になっていました。この三田原に、昭和二年、ブラジルへ移住する人達のための教育機関である日本拓殖学校ができました。しかし、軍事色が濃くなって昭和十四年、第九陸軍研究所が移転してくることになり、拓殖学校の周辺や、現在の生田中学校のあるあたりまでが国に買収されてしまいました。この陸軍研究所では、戦時中、極秘で各種の爆弾や細菌兵器の研究や軍票の印刷などが行われていたことが、最近の調査で明らかになりました。

終戦後、陸軍研究所の施設や用地は、国から元の持主や農協、慶応大学などに払い下げられました。そして旧研究所の施設をそのまま使って、慶応大学、専修大学などが開校し、授業を次々に始めました。慶応大学は昭和二十四年に理工学部をここに開設しましたが、二年後の二十六年から明治大学があとを継いで、現在に至っています。

このように東三田は、戦後まもなくにして大学や小・中学校のある学園都市になりましたが、その周辺が現在のように住宅地化され始めたのは昭和四十年以後のことです。

【三田一丁目～五丁目】

この地域は、小田急線生田駅の南側の丘陵地帯に位置しています。

三田も、明治八年以前は上菅生村に含まれ、その後、生田村となり、昭和十三年に川崎市に編入されました。そして昭和四十二年、他の生田地域に先がけて区画整理が行われ、三田一丁目～五丁目となりました。

三田の地名の由来は、ここに**大谷、長兵衛谷、水車の谷**の三つの谷があり、そこに田があったからだとか、開墾した耕地を一戸に三反ずつ分配した「三反多」が「三田」に縮まったとかいわれていますが、確かなことはわかりません。

小田急線沿いの一丁目はかつての字**西五反田**、二丁目は**東五反田**です。五反田の農家は、ほとんどが三田の台地の上に畑を持っており、そこへ上がる坂道を**トリツベの坂**といいます。この道は相当な急坂で、昔は坂の上に手押し車やリヤカーでこやしを運ぶ際には、まず坂の下に肥樽をおろして、いったん車だけを坂の上まであげ、それから樽を二人でかついで登らなければならないほどでした。トリツベとは、一説に、この坂を鳥がすべるように下ったからだともいわれていますが、坂のふもとには「トリツベ」という屋号のお宅があり、このお宅は明治初年から水車を動かしていた家で、坂を下りた堰にある箱形の樋を「トリツベ」と呼んでいたもので、そのことに関係があるかもしれません。

五反田の台地には細い谷がいくつも入りこんでおり、**生田大橋**から長沢浄水場の北側まで長く伸びた谷を**又兵衛谷**といい、生田中学校のある丘と明治大学のある丘の間の谷を長兵衛谷といいます。二つとも谷戸田の所有者の名前をつけたものでしょう。

又兵衛谷沿いの三・四・五丁目は**三田原**です。ここは以前は広い畑と雑木林の原で、低地の登戸や生田の農家の人達が畑づくりに出かけてきたところでした。畑では麦、豆類、さつまいも、じゃがいもなどがつくられていました。

三田原と長兵衛谷の境、現在の明治大学のプールの南の台地には、かつて塚のようなものがあり、そのまわりの現在の生田中学校と三田小学校の境あたりの三百坪ほどの畑を**十日森**と呼んでいました。この畑には大正の頃まで、ゆずや柿の木のある十五坪ほどの馬つなぎの場所があり、また祠もあったそうです。トウカモリは「稲荷森」と書く例が方々にあり、あるいはここにお稲荷様がまつってあったかもしれません。現在は中学校と小学校のグラウンドとなってしまう、森の姿を見ることはできません。

三田原には、昭和四十年頃までは、たった二軒の農家しかありませんでしたが、昭和四十一年から日本住宅公団による宅地造成が始まり、今では立派な集合住宅がところ狭しと立ち並んでいます。

【栗谷一丁目～四丁目】

この地域は、小田急線の生田駅と読売ランド前駅との中間の南側の丘陵に位置しています。ここも明治八年までは、上菅生村に含まれており、その後、生田村となり、昭和十三年に川崎市に編入され、昭和五十二年に住居表示が実施されて、栗谷一丁目～四丁目となりました。

栗谷一丁目と三丁目はかつての字**栗谷**にあたり、ここには小田急線沿いから**南生田**へぬける道が二本走っています。

その一本は、西の**大作**方面から入り、五反田川を渡る**川戸橋**から東南に栗谷町会会館に達する道で、大作からの道なので**大作道**と呼ばれ、栗谷一丁目と三丁目の境をなしています。一丁目には「大作道」という屋号の家があります。

もう一本の道は、生田駅から五反田川を**生田橋**で渡って、三丁目と四丁目の境を通り、南生田小学校に達する坂道です。この道も今は切通しになっていますが、かつては台地が谷にせまる急崖の道で、古老の話によると「この坂道のために栗谷には嫁がこない」といわれたほどの難儀な坂だったそうです。

坂の半ばを登って一息つくところに、昭和四年建立の大きな御大典記念改路碑が建っています。この碑文には「この道は住民にとって、役場や学校に通う大切な道でありながら、急坂で遠まわりな不便な道でした。そこで昭和二年に道を修理し、ようやく苦勞がとりのぞかれた。」という趣旨のことが刻んであります。

坂を上った四丁目は**東栗谷**です。かつては台地上に家が散在し、**サンヤ**と呼ばれたところ
です。道の東側には**山王権現社**があり、そこの灯籠は文化五年(一八〇八)のもので、「栗屋講中」と刻んであります。栗谷とも栗屋とも書かれていますが、いずれにしても「クリヤ」の意味は定かではありません。

大作からの道と生田駅からの道が合流するところに、前述の栗谷町会会館があります。敷地内には元禄元年(一六九〇)建立の**庚申塔**があります。この塔は、かつては会館より少し南の道沿いの塚の上に立っていました。そしてそのあたりを**庚申山**と呼び、その前の坂道を**庚申坂**といっていました。かつてはこの塔が上菅生村と五反田村の境で、北が上菅生村、南が五反田村となり、栗谷は両村の入会地になっていました。

また会館の近くには、屋号を「セエノカミド」という家があり、かつては小正月になると、家の西側にセエノカミの小屋を建て、それに火をつけて焼く行事が行われていましたが、昭和四十年ごろには行われなくなりました。

庚申塔もセエノカミの行事も、村境と関係の深いものです。

【西生田一丁目～五丁目】

西生田は小田急線沿いの麻生区に接する丘陵地帯です。小田急線を境に、北側が一・二丁目、南側が三・四・五丁目です。西生田もかつては上菅生村に属し、その後、生田村を経て昭和五十三年に一丁目が、翌年に二～五丁目が住居表示され、現在に至っています。

小田急線の北側の西生田一・二丁目のうち、二丁目の東半分が以前の字**大作**、その西半分と一丁目とが字**北大作**にあたり、麻生区の高石に接しています。その境には小田急線に沿って流れる五反田川にかかる**二枚橋**があります。その名の由来については次のような伝承があります。治承四年(一一八〇)、源頼朝が鎌倉で挙兵すると、平泉に逃れていた義経は弁慶や伊勢の三郎らを従えて鎌倉へと急ぎました。途中、この橋にさしかかりましたが、馬では通れず、弁慶らに新しい橋をつくらせました。それがのし餅を二枚かさねたような形に見えたところから、二枚橋と名づけられたというものです。近年、この二枚橋はコンクリートの橋につけ替えられ、その名前も消えてしまいましたが、近くの和菓子屋にその名が残っています。

この二枚橋から読売ランド前駅の南側に**津久井道**(世田谷町田線)の旧道が通じています。この旧道に沿って南北に蛇行しながら流れる五反田川は、別名を谷川とも呼ばれていました。

昭和二年に小田急線が開通した当初は、今の読売ランド前駅は西生田駅とよばれ、今の生田駅は、東生田駅と呼ばれていました。当時、一村に二つの駅をつくるのは異例のことで、それには高石にあった農機具工場の細王舎や、土地を提供した駅前の白井家などの熱意が反映したからだといわれています。

旧道は読売ランド前駅のすぐ東の三差路で、現在の津久井道と、菅の**馬場谷**へ通じる道とに分かれます。そしてさらに馬場谷への道は、丘の尾根を越す手前で左に登っていく急坂の道とに分かれています。この急坂が旧道で、高石、**細山**からの人たちは、かつてはこの道を通り峠を越えて菅にぬけていました。坂の頂上には「オッコシ」という屋号の家があります。オッコシとは打越と同様に、山や峠を越えるという意味で、全国各地に見られる地名です。

この分岐点から東へ下っていく道は**グミ坂**と呼ばれ、**大谷坂**とならぶ急坂です。グミ坂には人がかくれるほど大きなグミの木があったそうで、今でも切通しの石垣が当時をしのばせます。

グミ坂を下ると、かつては杉山神社にあった不動尊をまつる不動堂があります。地元の大作では、この不動を「お不動さん」と呼び、かつてはいろいろな集まりや太子講、無尽講、念仏講などに不動堂が利用されていましたが、今では大作の自治会館として使われています。

二丁目の五反田川にかかる橋を**川戸橋**といいます。ここは五反田川と栗谷方面から流れる川が合流するところで、川が荒れる場所という意味で**川戸**と呼ばれたといいますが、定かではありません。

西生田三丁目の北半分は以前の字**南大作**で、その南半分と南生田一丁目の北半分にかけてを**無入**といいます。無入の由来は、三丁目に屋号を「無入」と書いてムギユウと呼ぶ家があり、昔そこには無入寺という寺があったという話が、その家に伝えられています。

三丁目の小田急線沿いには、杉に囲まれた杉山神社があり、この地の氏神(鎮守)です。社の東側には、丘陵を南生田一・二丁目まで入りこんだ谷があり、その谷頭にあたるところを**四郎左衛門谷**といいます。

読売ランド前駅の南には、五反田川を渡る**雁俣橋**があり、その南の四丁目の南半分から五丁目のかけての台地は**雁俣**と呼ばれています。その由来は、ちょうど雁が羽根をひろげた形になっているからとか、あるいは弓の矢を弦にかける凹状になったハズの形に似ているので雁俣とつけたともいわれていますが、確かではありません。

旧津久井道を駅から西に進むと、台地に登る急坂があり、これを**西原の坂**といい、坂を登った台地面は**西原**と呼ばれ、かつては広い畑や栗園がありました。小田急線ができた頃(昭和初期)、家もないこの原に宅地造成が実施されましたが、実際に移ってきた人達はきわめて少数でした。しかし現在では道路も整備され、密集した住宅地となっています。

【南生田一丁目～八丁目】

南生田一丁目～八丁目は多摩区の南西にあって、麻生区に接する。小田急線の南側の丘陵地帯です。

南生田もかつては上菅生村に属し、その後、生田村を経て、昭和五十二年に一丁目～四丁目までが、昭和五十七年に五丁目～八丁目に住居表示されました。

南生田一丁目の北側はかつての字**無入**で、一丁目の南側と二丁目の北側が字**四郎左衛門谷**にあたります。四郎左衛門谷は杉山神社から東に伸びる谷の入口に位置し、その地名の由来はおそらくこの谷戸田を所有していた人の名前にちなむものと思われます。

二丁目の東側から三丁目をへて、八丁目の南東の隅にかけてはかつての字**立牛**です。立牛は**東栗谷**に入りこんでいる**池の谷**の谷頭にあたり、以前は今の南生田保育園のあたりに**籠馬池**がありました。『風土記稿』の溜井の条に籠馬池は「段数四段ほど字**牛谷**にあり」とありますが、この牛谷が現在の立牛です。現在では住宅造成のために谷は切り崩され、かつての面影をしのぶことはできません。

「ロウバ」という地名に関しては、古江亮仁氏が次のように述べています。「ロウバという地名は他に十三カ所も川崎市にあり、これらの谷はいずれも三方を崖や急斜面にとり囲まれた地形をしています。そこで狭い一方の谷口を柵で閉鎖しておけば、馬は急斜面を登らない習性を持っているので、安心してこの中に放牧できます。また麻生区の黒川のローマザワの付近からは、馬の繋飼場とみられる角柱列や馬寄せ場と考えられる遺構も発見されています。」(『地名と風土』小学館)

南生田二丁目の南側と四丁目の西側はかつての字**塔の越**です。『風土記稿』にも小名で「塔の腰」と書かれ、「長沢の内」にあり」と記してあります。その由来については、関東の高野山と呼ばれる麻生区の王禅寺の塔頭がここにあり、人々がその寺所を越して生田へやってくるゆえに塔の越という説(『川崎史話』)があります。また他の一説には、かつて津久井道を柿生方面から麻生区高石の**弘法の松**のある尾根を越えて生田の方面へ向かうのに、東の方へ峠を越して行ったために「トウノコシ」と呼んだという説もあります。

「峠の越」と書いてトウノコシとかトウノコエと読む地名は全国各地にあり、文字通り、峠を越えて行くところという説などがあります。

大正の頃までは、兵隊にとられる若者や、嫁や奉公に出る娘を見送る人々は、弘法の松のある尾根まで送って別れたそうです。現在でも、多摩区と麻生区との境は峠となっており、松やクヌギの雑木林もわずかに残り、昔の面影をしのぶことができます。

三丁目の南側と四丁目の北側、それに五・六丁目をかつての字**中谷**といい、四丁目の南側を字**西長沢**といいます。中谷は、長沢から南生田四・五・六丁目にかけての広い谷のほぼ中ほどにあるためにつけられた地名だといいます。ここは現在のような住宅地になる以前は、南向きの入りこんだ谷で**池の谷**とよばれ、谷戸田の奥には用水池がありました。谷戸田とは谷に入りこんでいる水田のことですが、現在では住宅造成のためすっかりつぶれてしまい、わずかに畑が残っているにすぎません。

【長沢一丁目～四丁目】

長沢一丁目から四丁目は多摩区の南端で、南は宮前区、西は麻生区に接しています。

長沢も明治八年以前までは上菅生村の一部で、その後、生田村となり、昭和十三年に川崎市に編入され、昭和五十七年の住居表示で長沢一丁目～四丁目となりました。長沢は、一・二・三丁目がかつての字**東長沢**で、四丁目がかつての字**西長沢**です。

長沢の谷を東西に流れている川は、**平瀬川**の上流にあたり、土地の人はこの川を**谷川**と呼んでいます。この川が丘陵の奥まで東西に長く入りこんでいる様子から、このあたりを長沢と呼んだのかもしれませんが。

川筋の二丁目あたりには**六百面**というところがあり、そこにはかつて水車がありました。また三丁目には**中村堰**というところがあって、ここにも水車がありました。この水車は、精米のほかにも素麺づくりのために小麦粉を製粉していたものですが、残念ながら、今ではその姿を見かけることはできません。

長沢のほぼ中央を東西に走る道に面して、昭和十三年建立の昭和道路改修記念碑があります。この樋には、役場や駅に通じる道の改修への住民の努力のあとが刻んであります。この道の三丁目と四丁目との境には、**大山道**の碑と、地蔵が立っています。大山道の碑のあたりには、毎年、大山の夏山が始まる前夜の七月二十六日から、**上長沢**の下講中の三区と七区の約二〇戸の人たちによって灯籠が立てられました。

まず灯籠のまわりに青竹をたてて、シメ縄を張り、御神酒をあげ、それから一同がむしろに座って御神酒やお菓子をいただき、なごやかな集まりが行われました。また上長沢の地神講でも同様の行事が行われていましたが、昭和四十五年頃には、灯火も電灯に変わり、やがて行われなくなりました。

この大山道は、枡形の榎戸、大道を経て長沢に入り、王禅寺に出て、そこから南下して、横浜市緑区の長津田で溝口の方からくる大山街道に合流します。この道の利用者は登戸あたりの人たちと、こちらをまわった方が近い川向こうの世田谷、狛江の人たちでした。前述の地蔵は長沢の**六地蔵**のひとつで、この道に沿って六か所にそれぞれ一体ずつ立っています。施主は「稲毛領長沢村中」と刻まれ、享保十八年(一七三三)のものが二基、同二十一年(一七三六)のものが四基です。

一丁目の盛源寺の北側の、現在の長沢浄水場の沈澱池のあるあたりは小高い丘で、かつての**神明山**といわれ、そこには神明宮がありましたが、明治四十三年に、現在の四丁目の諏訪社に合祀されました。

かつては平瀬川沿いに集落が点在する山村であったこのあたりも、今では隣の菅生に聖マリアンナ病院もでき、閑静な住宅地になっています。

まとめ

多摩区は長尾の住居表示が昭和 50 年に行われ宮前区から多摩区に区域変更が行われた。その後、ほとんどの地域の住居表示が行われ、平成 2 年の中野島でほぼ終わった形になっており、後は登戸地区の整備後に新地番がふられることになる。

多摩川に面した多摩区は、歴史的に見ても、対岸の調布・狛江・世田谷との結びつきがあり、津久井道（玉川通り）を介してのものの流れあり、現在も多摩水道橋が架かり、世田谷町田線として重要な働きをしている。その中でも小田急線が地域に与えた影響は本文でも触れたように、町を大きく変えた要因となっている。

一方、麻生区は歴史的に見ると、都筑郡から柿生村を経て、多摩区更に分区を経て麻生区となった。生田地区の一部が分区にあたり麻生区になった。昭和 35 年の日本住宅公団による百合ヶ丘団地の誕生は、川崎市のみならず全国に注目された都市型住宅団地の草分けとなった。その後、昭和 46 年に細山の一部に千代ヶ丘の町名地番整理が実施された。白山・虹ヶ丘・五月台・白鳥・栗平など新町名が次々と誕生し、平成 18 年に黒川にはるひ野という新町名ができた。現在も住居表示が実施され、町の姿が少しずつ変わっている。

小田急多摩線の開業により、新百合丘駅ができ、麻生区役所が開設して、麻生区の中心として北部の副都心としての働きが大きい。

そこに住むものにとって、無意識に町名を名乗り、生活の一部に折に触れて使用しているが特段の意味を知る機会もない。公園などの名称に、旧地名を冠したものが多く見られるがあえてその意味を考えることなく、位置情報として使用していることになる。

今回の、「川崎市北部 多摩区・麻生区の町名の移り変わり」では、現在の町名(地名)に至る、旧町の分割がどのように行われ、新町名が生活の中で生きるものになりたいと考えて資料などを提供した。未来に通ずる町名が、単に今栄えれば良いということだけでなく、これから先に使用する人々に責任ある町名として引き継がなければならない。

小田急小田原線・多摩線の周辺における住居表示に伴う
町名と町の変化に関する調査研究
川崎委託事業報告書
2018年(平成30年)3月31日
川崎市